
こんぴけん

ホワイト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こんぴけん

【Nコード】

N3067P

【作者名】

ホワイト

【あらすじ】

ごくごく普通の高校生である主人公が入ってしまった「変な」部活。

そこで繰り広げられるドタバタな？日常を彼は無事に乗り切れるのか！？

プロローグ (桜並木を駆け抜ける風のように) (前書き)

初めまして、ホワイトです。

諸般の事情により「こんぴけん!」を改めて掲載いたします。

まあグダグダと説明だの前置きだのをやっていくのはメンドイので

……

まずは読んでください!

※プロローグのあとの○の中の言葉には深い意味は全くありません。

プロローグ (桜並木を駆け抜ける風のように)

どこかでなにかを間違えたらしい

四月一日、市立水川高等学校みながわ入学式

この日、俺の一風変わった高校生活が始まった

「へー、以上を持ちまして入学式を終了させていただきます。新入生諸君は速やかに各自の教室へと移動してください。」

やっと長ったらしい入学式が終わった。生徒の集団が講堂兼体育館の出口へと流れ込む。

「おーい、代々木！」

「ん？　なんだ、神田か。」

「何だとは何だよー、面白くないなあ。」

今話しかけてきたのは神田武彦かんだ たけひこ、俺の幼馴染であり親友である。まあ、細かいことは後にして……

「で、何の用だよ？」

「何言ってるんだよ、お前と隣じゃなかったから校長ハゲの話の間するところが無くなって寝るしかなかったんだよ！」

「寝てたのかよ！　つーか先生に起こされなかったのか？」

「心配ご無用、先生も寝てたから。」

「マジ？」

「うん、腕組んでモロ寝てた。」

「……何やってんだよ先生は……」

「あー、話をそらすなよう！　オレが聞きたかったのはそんな事じゃないんだよ。」

「じゃあなんだ？　っていうかお前が勝手に話を広げてったんじゃないのか」

「そうか？　まあ、それはそうと……代々木、お前さあ、グラウンドで整列してる時になんかわいいう女の子と話してなかった？」

「ん？　あー、アレはただ単に自分のクラスの場所がわかんないって聞かれただけだよ。」

「で、どのクラスだったんだ？」

「うちのクラス。」

「きたあああ！　フラグ立ったあ！」

「何のフラグだよ……」

「いやー、間違いない、それは絶対に運命の出会いってやつだよ！」
「今時そんなベタな話があるかよ……」

無論、その子の名前なんて聞いてもないし、名前を聞かれたわけでもない。大方ちようどいい所に俺がいたから聞かれただけに決まってる。いやまあ確かにかわいかったけどさあ……

「いやー、分からんぜ。なんせ今の世の中何が起きても不思議じゃないんだからな。」

「……なんでそうなるんだ……」

「だってよう、首相はコロコロ変わるし通り魔事件はあちこちで起こるしカップラーメンは値段上がるしどっかの地方自治体の選挙啓発ポスターにゲームのキャラが出てくるしお米の袋に萌えキャラ描いたらやたらと売れたって話だし……ふう、でよー、紅白○合戦にはアニメ関係の人が出てくるし池袋の○越は潰れてヤ○ダができるしアキバにもヤ○ダができるしおでん缶最近あんまり見かけないし……」

「なんかだんだん話がすごい方向に向かってる気がするんだが……つーかとつとと教室に行こうぜ。いきなり遅れて先生に怒られるのはごめんだ。」

「つとと、そうだな。急ごう。」

少し喋り過ぎたようだ。既に周囲に生徒はほとんどいない。俺と神

田は教室に向かって走り出した。
が、ここで重要な話を一つ。

- 1・神田武彦はいわゆるポツチャリ系であること。
- 2・もちろん見た目通りに運動は苦手であること。
- 3・そして当然のことながら体力も無いこと。

そういうわけでちょっと走っただけでも神田はすぐに息が上がってしまふのだ。

「よ……、代々……木、まって……くれえ……」

「おい！ まだ校舎にも着いてないのにそんなんでどうするんだよ！ 頼むからもうちょっとがんばってくれ、じゃないと俺まで遅れちまう！」

「心配……する……な……、オレと……お前は……一蓮……托生……だ……」

「頼むからもう少し踏ん張ってくれよ！ それとこんな所で俺を巻き込まないでくれ！」

ここで神田を見捨ててしまえば俺は余裕を持って教室に着ける訳だが、悲しいかな保育園来からの親友、ここで見捨てることは出来ない。正直言うと見捨てても恨まれることは絶対がないが、それは親友としてできない。

「ほら、後は階段昇って廊下を進むだけだから、頑張れ！」

「……ぜえ……はあ……」

もはや答える余力も残っていないらしい。階段を上るのに手間取ったせいで、もう周囲に生徒はいない。

「あれ……？ 俺らの教室ってどこだったっけ？」

よくよく考えれば自分たちの教室に行くのはこれが初めてなわけだして。

したがって場所は当然知らないわけで。

「なあ、神田。どこがC組の教室だ？」

「オレは……知らん……」

「どうしようか……」

「……二階じゃ……ないのか……?」

「……………」

「あー……オレもうだめだ……」

「しっかりしろ、神田!　ここで寝たら死ぬぞ!!」

何が悲しくて入学式の後早々こんなコントみたいなことをやらなきゃいけないんだよ……。

と、俺たちがあたふたやっているところに誰か人が近づいてくる気配がした。廊下の向こうから歩いてきた先輩と思しき人影に藁にもすがるような思いで救いを求める。

「あの、すいません。1年C組の教室はどこですか?」

「はい?」

近づいてきたのはいかにも優等生、といった感じの女子生徒だった。というか綺麗過ぎてちょっと気が引けてしまう。つややかな黒髪を腰まで伸ばしていて、ちょっと困ったような顔でこちらを見ている。なぜか両手でアクエ○アスのダンボール（中身は何か別のものが入っているようだ）を抱えているのだが。

「えーと、ごめんなさい、もう一度言って貰えるかしら?」

「あ……、あの……1年C組の教室ってどこですか?」

「あ、1年C組ね、それなら確か三階の、階段を背にして右側の方にあっただと思うんだけど。」

「ありがとうございます。ほら、神田、行くぞ。」

「おう!　了解!　お姉さま、ありがとうございます!　手前は神田武彦と申します、よろしければ記憶の片隅にでも留めて置いていただければ幸いです。では!」

そう言っただけで神田は脱兎のごとく階段を駆け上がっていく。

「……な……そんな風に走れるんだったら最初っから走れよ!」

「何を言う!　きれいなお姉さんを見たら誰だって元気が出るだろう!　特にさっきの方はロングヘアーでとっても丁寧な言葉遣い、

お嬢様っぽい感じで個人的にツボだ！ オレには背景に桜吹雪が見えた！ あのお方にはきつと和服が似合うに違いない！」

「どうでもええわ！ そんなん！」

「オレはきれい、かわいい、どちらかに該当すればOKなんだ！
胸のサイズは問わん。いや、むしろ先人の言葉を借りれば『貧乳はステータス』だ！」

「誰もお前の性癖なんかきいてねえ！ つーか広すぎないか、ストライクゾーン？」

「気にするな、そして世の中にはもはやここでは語れないほど広いストライクゾーンを持ったヤツもいるんだ。例えば青髪ピ○ス様とか……」

「誰だよ!？」

「ああ、美人のお姉さん最高！ 神様、ありがとうございます！」
まあ、何はともあれ、おかげでC組の教室にはなんとか着くことが出来た。

教室のドアを開けると、既にクラスにいた生徒の視線が集中する。当たり前ながら、もう俺たちを除く全ての生徒は席に着いていた。どういう順序で座っているのか分からないので手近にいた生徒に聞いてみる。

「なあ、いったいどういう風に座ってんだ？」

「ん？ えーとね、とりあえず先生が来るまでは自由だって。」

「あ、そうなのか、サンキュ。」

「代々木……、自由だとは言ってもオレたちの席は決まってるっばいぞ」

「は？」

……確かに今教室内で空いている席は二つしかない、当たり前だが俺と神田以外の生徒は全員席に着いているのだから。

だが問題なのはその席の位置だ。どうも最前列に見てもそこは教卓の真っ正面なのだが……。

「神田………」

「なっ、そ、そんな目でオレを見るなあっ！」

まあ、神田にどれだけ文句を言おうが誰かが席を替わってくれるわけではないだろうし、諦めて席に着く。みんなも酷いな、前から順番に座ってくれればいいものを。

「ふう……、もう俺は疲れたよ。」

「いや、オレの方が疲れたって。」

「身体じゃなくて心の方だよ……」

「何言ってるんだ、心ならさっき極上の癒しを受けただろう？」

「少なくとも俺はそうは思わないがな……」

確かにさっきの先輩（？）がめっちゃ綺麗だったのは認める。だがそれを極上の癒しだ、なんて言うのはどうかと思うのだが。

そうこうしているうちに担任の先生がやってきた。

「ういーっす、みんな揃ってるな？」

教卓の前まで来ると、黒板に先生のものと思しき名前を書いていく。「えー、先生の名前は登戸俊、のぼりしゅん今年一年間お前さんたちの担任をすることになったからよろしく。一応先に言っとくが、先生はテキトー星人だからめんどくさいことが嫌いだ。で、まあ色々と話なんかもあるわけだが、そういう面倒な事は後回しにして今年一年間の運命を決めるドッキドキの席決めと行くか。」

……なんだ、この先生、初っ端からだるいオーラ全開だ……。しかも自分で自分のことを『テキトー星人』はないだろうと思うんだが。というか一年間同じ席かよ。

「方法はここに先生が用意してきたくじがあるから、これを順番に引いてくれ。全員引き終わったら改めてルールを説明するから、ほい、そこの窓際一番前のヤツ、くじ取りに来い。」

窓際の一歩前にいた生徒がくじが入っているらしい業務用の茶封筒を取りに行く。そして、自分のいた席に戻ると、くじを一個引いて封筒を後ろの席の生徒に渡した。

「あ、言い忘れてたが先生がいいと言うまで開けんなよー、言うことを聞かないヤツは強制的に教卓の前送りにするからな。」

くじの入った封筒はどんどん回ってくる。そして俺の順番がきた。
「……よっと、」

くじを引いて封筒を神田に渡す。

「……でやっ!」

そんな気合を入れて弾かなくてもいいだろうに……。

そして、最後の生徒にまでくじが行き渡ると、

「おーし、全員引いたな? じゃあルールを説明するぞ、しっかり聞いとけよ。えー、くじを開くと数字が書いてあるはずだ。で、基本的に席の位置は自由。ただし同じ席を二人以上のヤツが希望したら数字が若いやつに譲れ。以上、おしまい。とりあえずくじを開いてみる。」

みんなが恐る恐るくじを開いてゆく。さて、俺の数字は……

「なあ、代々木、どうだった?」

神田が尋ねてくる。

「三番」

「なんだと!」

「お前は?」

「碁盤だ!」

「……」

「あれ?? 間違えた、五番。」

「素でかよ!」

「なっ、別にいいじゃないか、人間だもの!」

「語尾にそれを付けるだけで何か含蓄のある言葉っぽく聞こえるから止めろ!」

「おいおい、お前らいきなりコントをおっ始めるなよ。」

突如先生が会話に割り込んできた。

「へっ? いや、別に狙ってやってる訳じゃないんですけど……」

「ん? そうなのか? まあいいや、どっちにしろ二人ともなかなか

かしい番号引いたな。」

「そうですね。」

「その番号を生かすなら、座る場所は窓際の後ろから二番目当たりがいいぞ。」

「そうなんですか？」

「おう、なんと言っても窓際、ここは暇な時に外を見て時間をつぶせる。そして一番後ろは意外と目立つからな。敢えて一つ前に移るんだ。」

「あの、気のせいじゃなければ授業を聞く気がない事が前提になっている気がするんですが……」

「んー、んなこと言ってもどうせお前らやる気が起きない授業ってあんだろ？ 人間だもの。」

「……ここで肯定したりツツこんだりしたら負けな気がする。」

「そ、そんなことはないですよ。」
神田が説得力ゼロの笑顔で必死に取り繕う。……思いっきり顔が引きつってるな……

「んな事いうな、お前らの気持ちはよく分かる。そして俺はそんなお前らの味方だ。あ、でも俺の授業だけはちゃんと聞いとけよ。ちゃんと聞いてないとイスに縛り付けて職員室で小一時間晒し者にするぞ。」

なんかいろんな意味でこの先生、型破りすぎる……というか斬新だ……

「おーし、全員番号確認したな？ じゃあ移動開始！」

先生の合図で生徒が移動を開始する。俺はあの先生に頂いたアドバイス通りに窓際の列、後ろから二番目の席に座る。

「代々木はやっぱそこか、んじゃオレここ！」

俺の一つ前の席に神田がやってきた。

「隣じゃないのか？」

「おうよ、隣同士でもいいんだが何か物のやり取りをする時に隣だと見つかりやすいからな。」

「さいでつかい……」

「さてと、代々木。」

「なんだ？」

「オレ寝るからみんなの席が決まったぐらいの時を見計らって起こしてくれ、よろしく、そしておやすみ。」

と、言うが早いか神田は机に突っ伏してしまった。

「……おいおい……」

さて、話し相手が寝てしまったからやることがない。仕方がないので席替えの様子でも観察することになろう。やはり、というか席は後ろからうまっていくな。ただ既に教卓の真ん前を陣取っているヤツがいるが、あのこの世の終わりが来たかのような顔をしていることから察するに一番ビリの番号を引いてしまったのだろう……俺じゃなくてよかった……

神田の隣に來たやつは、眼鏡をかけた男子生徒だ。決定、こいつのあだ名はメガネくん。安直すぎるとかいいうツツコミは無しだ。さて、俺の隣は……

「ふっふっふ……その席、頂いた！」

見ると先ほどまで俺の隣に座っていた生徒が新しく來たやつに立ち退き要求をされているらしい。というかなんか怪盗チックな言い方するな、どんなやつだよ……

「あつ、朝の人？ お隣もらうよ？」

……おいおい、なんで朝の女の子がそこにいるんだ？ まあ同じクラスだったから別に居ても不思議ではないのだが……

「えーと、今朝グラウンドで会ったよね？」

「おお、覚えててくれたんだ！」

まあ、まともに舌が回らないくらい慌てた様子で話かけられたら誰でも印象に残ると思うんだが……

「ところでお前はは何番を引いたんだ？」

「わたし？ 一番だよ。」

「げっ……マジかよ！」

確かに彼女が手にしている紙には乱暴な字で「1」と書かれている。とんでもない強運の持ち主だな。

「前の人寝ちゃったね。」

「ん？ 神田か。こいついつも寝不足だからな。」

「ふーん、ところであなたの名前は？」

「俺か？ 代々木実だ。」

「へー、代々木君かー。私は桜木春香さくらぎ はるかって言うんだ、よろしくね。」

「ああ、よろしく。」

その後しばらくして、全員の席が決まると先生が話し始めた。

「よし、全員席は決まったな？ 無論一年間変えるつもりは全くな
いから、メンドイし。さて、じゃあ連絡事項を伝えたいんだがその
前に……おい、三番を引いたやつ、お前の相方を起こしてやれ。」
やばい、桜木と話し込んでて神田を起こすのをすっかり忘れてた。

「おい、神田、起きろ、起きろって！」

「むにゃ……まってくれ、まだらーめんをたべおわってないから……」

「神田！ 何喋ってんだ！」

「ぬおっ！ なっ、何が起きたんだ！」

「おーい、碁盤クン、何やら楽しそうな夢を見てるとこ悪いが連絡
事項だ、起きてろ。」

先生の言葉でクラス中が大爆笑に包まれる。……これでこのクラス
での神田のキャラは決まったな。

「………えー、以上で連絡事項は終わり。さて、他にやることも
ないから自己紹介でもするか？ もちろんやるよな？」

おそらくみんなの本音はとっとと帰りたい、だろうがそんなことを
言うやつは一人もない。普通思っても言えないけれども。

「反対するやつもないみたいだし、じゃあ廊下沿いの列の一番前
から始めてくれ。」

そういうわけで自己紹介が始まった。残念なことに誰も奇抜なこと
をやらない。そして桜木の番になった。後二人挟んで俺の番かよ、

どうしたものか……

「桜木春香です。第一中学校から来ました。好きなものはおいしいお菓子とおもしろいこと、嫌いなものは特にありません。これから一年間よろしく願いします。」

まあ普通の部類に入るのか？ それにしても嫌いなものがないって在り得ないと思うのだが……

そしていつの間にか俺の番。

「第三中学校出身の代々木実です。これから一年間よろしく願いします。」

結局一番無難な感じになってしまった。さて、次は神田の番だ。

「第三中学校から来ました神田武彦です。ただの人間には興味ありません……」

「さて！ 神田！ そのネタは際どい！」

「むおっ！ なぜ代々木がこのネタを知っているんだ！？」

「なんだか知らんが止めなきゃまずいような気がしたんだよ！」

まあ、クラスのうち何人かが必死で笑いをこらえているかのようにニヤニヤしているところを見ると、ほっといても結構おもしろいことになった気がするが。

「なんだよー、しょうがないなー、えーっと……好きなことは食べ歩きです。個人的には駅前の三風堂のラーメンがめちゃくちゃおいしいです。ああ、ラーメン、それは神の食べ物。あのスープの香り……麺の食感……」

「……神田、ここで語るな。」

「なっ！？ でも今時お湯を注ぐだけでいつでもどこでもラーメンが好きなおいしいラーメンでもやっぱ本物は麺の食感もスープの味も全然違うラーメンあとかく食べればわかるラーメン！」

「……とりあえずお前が今ものすごくラーメンを食べたいのは解ったから、落ち着けて。」

「異議ありっ！ 先生！ 代々木がラーメンをバカにしましたっ！」

「……あー、お前らのコントを見てるの中々面白いんだが、さす

がに長々としやべりすぎだ。そろそろ終わらせてくれい。ついでに鎌〇先生に謝っとけ。」

「せっ……先生までラーメンをバカにするんですか!？」

「はい強制終了。シャツトダウン次ー、始めてくれーい。」

語りたくてもこれ以上語れない神田であった。

そして最後の生徒の自己紹介が終わると、また先生が話し始めた。

「よし、自己紹介終わり。ちなみに一番インパクトがあったのは多分碁盤クンだと思うが、それはいいとして今日はここまで、えー、級長！ 号令かけてくれ！」

「起立、気をつけ、礼！」

なんと級長は神田の隣のメガネくんだった。

「じゃあ気をつけて帰るように。……お、そうだ、確か校庭で部活の勧誘をやっていたと思うから興味のあるやつは行ってみるといいさて、昼飯でも食うかな……」

最後の一言で変なイメージを植えつけながら登戸先生は教室から出て行った。

「じゃあね、代々木君。」

「ん？ ああ、またな。」

桜木がいの一番に教室を出て行く。それに続いて他の生徒も次々と教室を出て行く。

「おーい、代々木。」

「なんだ？」

「お前はいつの間にあの子と仲良くなってるんだよ？」

「お前が寝てる間。」

「くう……抜け駆けは許さんぞ！」

「何が抜け駆けだよ……そういえば神田はさっき先生が言ってたやつ、見に行くか？」

「んー、代々木が行くならオレも行くけど？」

「んじゃ行くか。」

そして俺と神田は教室を出て校庭へと向かった。

校庭では様々な部活の先輩たちが新入生に声をかけていた。サッカー部、テニス部、バスケットボール部、吹奏楽部といった定番の部活に混じって何やら裏科学部だとか黒歴史部だとかどう見ても怪しそうな紙を持った人たちも混じっている。あれはいったいなんなんだ？

「代々木、お前なんか決めた？」

「いや、特に。神田は？」

「オレは運動系は絶対無理だからなー。」

「だな。」

「あー、何かこう動かなくっても良くて楽な部活ってないかなー。めんどくさくなければ最高なんだけどなー。」

「んな部活があるかよ……」

「あるかもしれないだろ！ 夢を壊すなよ！」

「ないって……」

「あるよ。」

「えっ？」

見るといつの間にか俺たちの後ろに一人の先輩がいた。身長は俺よりわずかに高い。長方形の角が丸くなっているよくある感じのメガネをかけていて、制服の上着は着ていないが、普通の生徒なら外すであろうワイシャツのボタンを第一ボタンまで閉めている。なんかメチャメチャ真面目そうだ。

「楽で楽しい部活ならいいんでしょう？ ウチに来る？」

「あのー、どんな部活なんですか？」

神田が即座に反応する。

「来れば解るよ。ついてきて。」

そういつてその先輩は校舎へ向かって歩き出した。

「神田、行くのか？」

「ああ、代々木、一緒に来るよな？」

「あー、ちょっと怪しい気もするが……まあいいか。」

「おーい、早くきなよ！」

さっきの先輩はもうだいぶ離れた所にいる。俺と神田は急いで後を追った。

しかしこの先輩、歩くのが異様に速い。神田はもう息が上がっている。さっきから見失わないようにするので精一杯だ。

「す、すいません。もう少し遅く歩いてもらえませんか？」

「ん？ あ、ごめん。大丈夫？」

「こっちは……アウトだ……」

神田はまた朝のような状態になっている。

「まあ、もう少しで着くから頑張つて。」

先輩はまた歩き出した。この人、待つ気はあまり無いらしい。

そして、俺たちは二階の廊下の南の端にある部屋の前に来た。ドアには『コンピューター研究部』と書かれた札が下がっている。

「んじゃ入つて。」

先輩がドアを開けて先に入る。その先に広がっていたのは……

部室と聞いてなんとなく思い浮かべる暗い・汚い・狭い、といったイメージからはかけ離れた部屋だった。意外と広々とした部屋で、窓の向こうの木々が木陰を作り、その木漏れ日で程よく照らされた室内はある程度片付けられていて、さらにエアコンまで付いている。窓に沿って置いてあるテーブルはなかなかしゃれたデザインをしていて、その上にはコンピューターのモニターがいくつか並んでいる。そのうちの一つの前には別の先輩が座っていた。

「あら、新人生？ ……ってまさか、小金井君、本当に拉致してきたの？」

「失礼な！ 僕は基本的に任意同行主義だよ。一応同意を取り付けてからじゃないと後味が悪いからね。」

任意同行主義？ まあ確かに無理矢理連れてこられたわけじゃないが、同意したっけ？

「……まあいいけど、いらっしやい……って、あれ？」

「あれ？ 知り合い？」

「あなたたち、朝の？」

「あっ！」

「おっ……お姉さま！」

俺と神田は同時に声を上げた。間違いない、今俺たちの前にいる人は朝に教室の場所を教えてくれた人だ。よくよく見ればこの部屋の入り口の近くに置いてあった段ボール箱には見覚えがある。ばっちりアクエ〇アスって書いてあるし……

「あの、朝はどうもありがとうございます。」

「別に気にしなくてもいいわ。それとお姉さまって呼ぶのはやめてもらえるとうれしいわね。とりあえず、ようこそコンピューター研究部へ。」

「先に自己紹介しとくね。僕は高二A組のこがねい さとし小金井聡、部長やってるからよろしく。」

「私は高二A組のかごはら あきの籠原秋乃。副部长と会計をしています。」

「あー、代々木実です。」

「神田武彦です。」

「さて、と。あの紙どこにやったかな……？」

「やっぱりね、そうなると思って作っておいたの。」

「おっ、サンキュー。……って、あれ？ これじゃなくって部活の説明の紙。」

「えっ？ 入部届けじゃなかったの？」

「んー、まあいいか、口頭でやれば手っ取り早いし、めんどくさいけど。とりあえずウチがどんなことをやってるのか説明するよ。ホントは説明が書いてある紙を渡すはずだったんだけどね……始めていいかい？」

「ええ。」

「どうぞ。」

「もう入り口で見たから知っていると思うけどウチはコンピューター研究部、通称コンピ研って言って、早い話がみんな協力してコ

ンピューターに関するスキルを上げましょう、って部活。といっても普段は結構お遊びに近いこと……というより遊び？　をやってるからあんまり難しく考えなくていいよ。何か質問はあるかな？」
なんとなく説明がざっくりしすぎている気がしないでもないが、とりあえずおおよそのことは分かった……？

「えーと、活動日ってどうなってるんですか？」

「君は……神田君だっけ？　活動日はほぼ毎日。たまに日曜日もあることがある。長期休暇中は活動がある日は一応決まってるんだけど、それ以外で集まることも多いね。あ、でも来る来ないは自由だよ。何か私用があって来れない時とかは誰かに伝言を頼んでおけば問題ないから。……それと長期休暇中はイベントもあるよ。」

「へー、そうなんですか。」

「あの、ちよつといいですか？」

「代々木君だっけ？　どうぞ。」

「他に部員の人っていないんですか？」

「……いたら籠原さんが副部長と会計を兼務すると思うかい？　しないよね？」

「いないんですか……」

「そうなんだよねー。実はさあ、去年の時点で今の高三に当たる部員がいなくなっただけ、先輩たちが卒業した後部員がいなくなっちゃってさあ、今年新入部員がいないと廃部の危機になっちゃうんだよ。そういう訳で、君たち、ウチを救うと思って入ってくれない？」
どうも地雷を踏んでしまったらしい。この人笑ってはいいるが、なんとなく入ってくれなきや帰らせないよオーラを出しまくっている気がする……しかもちゃっかり入り口を塞ぐ位置に移動してるし。……でも、話を聞いている限りは楽そうだし、きつい練習があるとかそういうこともないだろうし、入って損は無いかもしれない……無いよな……？

「今なら部費もお安くなってるからさ、入らない？」

「ちよつと！　なに勝手に部費安くしてるの！」

「いいじゃん、減った分はヤツらから巻き上げればいいし、今年は新兵器オモチャを導入するし、応援も手配するから絶対に負けないって。そもそもこっちが負けたことなんて一回も無いんだしさあ。」

「……そういう問題じゃないでしょ。」

「……なにやら物騒な単語が散見されるが、なんとなく知らない方がいい気がする……というより知ったらただじゃ済まなさそうだ。」

「でもさ、ここで部員を確保しておかないと後々大変なことになるよ？ それぐらい分かってるでしょ？」

「……分かったわ、仕方が無いわね……」

「よし、決定。で、どうする？」

「オレ入ります！」

「んじゃ俺も入ります。」

「よっしゃ！ それじゃあこの入部届けに必要な事項を記入して次の活動日……授業が始まる日か……に持ってきてね。さて、君たち、今日はもう帰る？ それとも活動の様子を見てく？」

「あー、俺は昼メシがまだなんで帰ります。」

「あ、じゃあオレも。代々木、三風堂に行かないか？」

「うーん、それでもいいか。よし、行こう。」

「籠原さん、お昼まだでしょ、どうする？」

「特に何も考えてないけど？」

「どっか食べに行く？」

「……そうね、久しぶりにそういうのもいいわね。」

「それじゃああのパン屋さん行かない？」

「あのクロワッサンがおいしいところ？」

「そう、そこ。」

「じゃあ行きましょうか。」

「よし、そしたらみんなで行こう！」

「え？ そのパン屋さんって駅前にあるんですか？」

「そうだよ。あのパン屋さんカフェオレがおいしいんだよね。」

「よーし、代々木、ラーメン屋ハシゴしようぜ！」

「止めとくよ……」

「なんだよー、いいじゃんかよー。」

「俺はそんなに食えん！」

「どうも大食い大王がいるみたいだね。」

「……今年は支出が増えそうだわ……」

そして俺たちは部室を後にして、駅前へと向かった。

プロローグ (桜並木を駆け抜ける風のように) (後書き)

さてさて、ここまで読んでいただきありがとうございます。

きつとこの文章を読んでいらっしゃる方は全文読んでいらっしゃる
ことでしょう。

(なに? 読んでない!? 今すぐ読んでください!! お願い
します)

えー、→はおそらく該当する方はもういないと思うので続きをば……

いかがでしたか? 楽しんでいただけたでしょうか?
改めて掲載するに至り、微妙に改変している箇所があったような記
憶が……

まあそれはともかく、楽しんでいただけたのでしたら僕としても幸
いです。

さらに続きが読みたい! なんて思っていただけたらもう御の字で
す。

それではまた! 感想なども是非どうぞ!

(五時……もとい誤字などを指摘していただけると助かります)

第1話 (まーのんびりとやっていきましょーや) (前書き)

はい、やっと本編？が始まります、はい。

新しい登場人物はいたようないなかったような……

まあ深いことは考えずにお気楽に楽しんでください。そのために書いているようなものなので。

そして例によってサブタイの（ ）の中の言葉に深い意味は全くありませんので。

それではごゆっくり

第1話 (まーのんびりとやっていきましょうや)

四月八日

衝撃の(?) 入学式から一週間後、この日から授業が始まる。

朝家を出ると、たいていはすぐに神田と出会う。神田の家は俺の家から学校に行く方向と反対に五十メートルほどいったところであり、俺と神田が家を出る時間は大体同じぐらいなので中学の時からほとんどいつも一緒に登校している。

「よう。」

「ういーっす。」

お互いにいつもの挨拶を交わして学校へ向かって歩き出す。

「今日から授業かー。」

「だな、登戸先生みたいな先生ばっかだったらどうする?」

「それはそれでいいかもな。だけどそれって『俺の授業は起きてろ』って先生ばっかってことか? それだとちよつとキツイかな、寝れないし。」

「寝ることを前提にするか?」

「寝ててもオツケーってことはほとんど何やっても問題ないってことだとオレは思ってるが、何か?」

「……おいおい……」

そんな感じで神田とたわいも無い話をしながら歩いていくと、最初の交差点を曲がったところで後ろから声をかけられた。

「むむっ、そこに行くのは代々木君!」

「へ?」

後ろを振り返ると、そこには桜木がいた。なにやら得意げな笑顔をしてくっちへやってくる。

「なんだ、桜木か、おはよ。」

「うん、おっはよー。やっぱり代々木君だったね。」

「ぬおっ！ 代々木、その子はこないだの子か！」

「ああ、そうだけど。」

「そっちの人、代々木君の友達？」

「あ、うん、神田武彦って言って俺の幼馴染。」

「神田です。以後お見知りおきを。」

「わたしは桜木春香です。よろしくお願いします。」

「神田、なにそんなにかしこまってんだよ。」

「こういう機会にキャラ作りをしないでいつするんだよ？」

「お前のキャラは間違いない入学式の日に決定してると思うぞ。」

「ぐあっ、痛いところ突くなよ！」

「変わり者第一号、か。」

「ひどいな、まあ確かに入学式の日にはポシャっちゃったけどよく。」

「いや、むしろあの時のキャラのままで通した方が友達はたくさん出来ると思うぞ。」

「そうかなー？ あっ！ 代々木、入部届けちゃんと書いてきたか？」

「ああ、親のハンコもらう時になんか不思議な顔をされたよ。」

「そうなのか？ うちの親はオレが部活に入るって言ったら喜んでたぞ。」

「そりゃあ放課後の食べ歩きが無くなれば食費が減るだろうからな、喜ぶんじやないか？ ……そういえば桜木はどっか入ったのか？」

「わたしはまだ。おもしろそうな部活がいっぱいあってどれにしようかとっても悩んでるんだよね。」

「そうなのか、でも桜木ってなんとなく運動系のところに入りそうだよな。」

「うーん、それでもいいんだけど裏科学部とか秘境部とかもおもしろそうなんだよね。」

「……いったいどんな部活なんだろうな。」

と、桜木も交えてしようもない話をしながら学校へと歩いていった。

四時間目、科目は地理、担当は俺達の担任である登戸先生

「ういゝっす、初めての授業はどうだ？ 一時間目はなんだったっけ？ おーい、級長！」

「現代社会です。」

「現社か、矢川先生やがわか？」

「はい、そうです。」

「そうか……矢川先生か……」

「せんせーい、矢川先生がどうかしたんですか？」
なぜか神田が声を出す。

「いやー、実はだな、たぶん一回目の授業だったから抑えていたとは思うんだが……まあ一言で言ってしまうえばアイツはエロいんだな。ま、心配しなくても授業では下ネタはそんなに飛ばさないと思うから。ただ個人的に質問に行った時に關しては知らん。あ、女子だったら心配ない。その辺はちゃんと弁えている変態紳士だからな。」
「…………マジですか！！！！！！」

一部の男子生徒から歓声上がる。……こいつら、間違いなくこのあと矢川先生のところへ突撃するな……

「とまあ雑談はそれぐらいにして、授業を始めるぞ。寝るなよ」
そして中々面白い授業（雑談含有率60%）がチャイムの音と共に終わった。

「おっしや、メシの時間だ。……あ、そうそう、俺が弁当持ってくるまで食べ始めんなよ？ 一回はお前さんたちと一緒にメシを食うように言われててな。でもメシ買いに行くやつらは買いに行つて構わんぞ。ほいじゃすぐ戻ってくるからな。」

先生はやや急ぎ気味に教室を出て行った。

六時間目が終わった。

「あー、終わった終わったー。」

神田が思いっきり伸びとあくびをする。

「今日の先生は割と普通だったな。」

「うーん、でもオレは三時間目の生物の先生はいいと思うぞ。」

「あー、あの雑談好きだ、って言ってた先生か。」

「授業の初っ端から雑談しまくりだもんなー。」

「っと、先生が来たぞ。」

終礼をするために登戸先生がやってきた。

「えー、初めての授業はまあきつと楽しかっただろうと思うがどうだった？ 楽しかったよな？ 特に俺の授業は面白かっただろ？」

……で、連絡事項だが今日は特になし。あえて言うなら明日の授業に必要なものを忘れるなよ。それといくら単位制だからといって初っ端からサボらないように！ 去年は二日目からサボったヤツがいたから一応言っておく。それと初めてでいろいろと分からないこともあるだろうが、助け合いの精神で何とかしてくれ。後は高校生なら勉強だけじゃなくて部活とか恋愛とかに精を出してもいいと思う。勉強だけの高校生活なんてつまらないからな。一度だけの青春だ、有意義に過ごすように！ 以上、おしまい。」

「起立、礼！」

『さようなら』

何気に勝手な仮定をしたり、生徒指導を丸投げしている気もするが、まあそこは気にしない方向で。ついでに最後のアレ、名言か？

「代々木ー、部室行こうぜ。」

「よし、行か。」

そして教室を後にしてまだ生徒もまばらな廊下を通り、コンピ研の部室へと向かう。どうも他の一年生のクラスはまだ長々と終礼をやっているようだ。……いや、むしろうちのクラスが短すぎるのか？

二階の廊下を南端へ向かって進むと、すぐにコンピ研の部室へ着いた。

「こんにちはー。」

「お、いらっしやい。入部届けは書いてきた？」

部室には既に小金井さんがいた。パソコンも電源が入っていて、なにやら起動画面が表示されていた。

「あ、はい。書いてきました。」

「オレもっす。」

「はいはい、それじゃあ出してちょうだい。」

入部届けをカバンから出して手渡す。

「よし、不備もないし、では改めて……コンピューター研究部へようこそ！ ちょっと待っててね。今君たちのパソコンを使えるようにしてるから。ちなみにOSはレインボウズだから、多分君たちの家にあるパソコンと同じだと思うよ。」

そう言って小金井さんは再びパソコンに向かって作業を始めた。特にすることもない俺たちは手近にあった椅子に腰を下ろして、その様子を眺めることにする。それから少しして籠原先輩がやってきた。

「ごめん、小金井君、遅くなったわ。……あら？ あなたたち、もう来てたの。」

「ええ。」

「入部届けは出した？」

「はい、もう出しました。」

「そう……、もう少し待っててね、すぐにあなたたちのパソコンが使えるようになるから。」

「よし、終わり！ 代々木、神田、ちょっと来て！」

「あつ、はい。」

「一応聞いとくけど、さすがにパソコンの使い方は分かるよね？」

「ええ、それぐらいは。」

「まかしてください。」

「そしたらこのパソコンが代々木、隣のパソコンが神田のだから、

とりあえず起動してみて。」

俺と神田はそれぞれのパソコンの前に座って起動する。しばらくしてデスクトップが表示されると、今度は籠原先輩が説明に入る。

「うん、問題ないみたいね。これからはそのパソコンを使っているなことをしてもらうから。それとパスワードは掛けるのも掛けないのも自由よ。でも一応設定しておくことを進めておくわ。誰かに勝手に使われるのはいやでしょ？ ……えーと、説明することはこれぐらいかな？ 小金井君、他に何かある？」

「んー、大体そんなもんでしょ。」

そこまで小金井さんがしゃべったところで誰かが部室のドアをノックした。

「ごめんくださいーい！」

ん？ この声、どことなく聞き覚えがあるような……

「どうぞ、開いてますよ。」

籠原先輩がそう言うのと、ドアが開いて一人の生徒が入ってきた。

………桜木がなぜここに？

「えーっと、コンピューター研究部であってますよね？ ここ。」

「はい、そうですが……って、もしかして春香ちゃん？」

「えっ、まさか秋乃先輩？」

「ん？ 籠原さんの知り合い？」

なんなんだ？ そもそもここに桜木が来ること自体が想定外なのにその上に桜木と籠原先輩が知り合いだって？

「わー、秋乃先輩おひさしぶりです。」

「そう？ ついこの間会ったばかりじゃなかった？」

「あー、籠原さん、この子知り合いなの？」

「うん、そうよ。小学校の時のね。」

「あれっ？ 秋乃先輩、彼氏さんができたんですか？」

「えっ！ ち、違うわよ！ そんな訳ないでしょ！ どうしてそうなるのよ！？」

「えー、そうなんですか？ 秋乃先輩美人だからきっとモッテモッテ

だと思ってたんですけど。」

「……籠原さんに挑んで惨敗したヤツは数知れず、なーんて噂もあるけどね……」

小金井さんがこっそり耳打ちしてくる。

「それよりも春香ちゃんどうしたの？ ……まさかうちに入りたいとか？」

「はい、そうです。」

「ええっ、そうなの！ 本当に？」

「そうなんです。……あ、代々木君に神田君、やつほー。」

「あ、ああ。」

「お、おう。」

「ひゃー、まさかこんなことがあるなんてね……。去年籠原さんが入ったときには先輩たち、『コンピ研史上最初で最後の女子部員だ』って大騒ぎしてたのに、今年も来るなんて……ちょっと驚きだな。」

小金井さんの独り言、か？

「えーっと、じゃあ春香ちゃんうちに入るのね？ それならこの入部届けに必要な事項を記入して明日持ってきてちょうだい。」

「わかりましたー。」

「よーし、さらに部員が増えてよかった！ さて、じゃあ新人部員のトレーニングでも始めるか！」

「その前に春香ちゃんの分のパソコンもセッティングしておいてね。」

「ぐあっ、それがあつた！ ちょっと待っててくれ……えー、名前、なんていうんだい？」

「あ、桜木春香です。」

「はいはい、桜木さんね。そしたらしばらく雑談でもしてて。その間に準備するから。」

そう言っって小金井さんはパソコンに向かって作業を始めた。桜木と籠原先輩はイスを持ってきて俺たちの向かいに座る。

「ふう、春香ちゃんのパソコンの準備が終わるまでしばらくかかるから、それまでは休憩ね。……でも本当にここでよかったの？ 他には気になる部活とか無かったの？」

「うーん、あったにはあったんですけどそれがどこも活動場所が見つからなくて……」

「？ そんなはずは無いと思うんだけど、どこの部？」

「えーつとですねえ、裏科学部と秘境部と黒歴史部です。」

「ちよつと……全部アングラ系の部活じゃない！」

「あー、俺らもちよつと気になってたんですけど、それっていったいどんな部活なんですか？」

「あー、オレも気になる。」

「そっち系のことは小金井くんに聞いてちょうだい……小金井くん！」

「はいはい、えーつとね、裏科学部って言うのはちよつとどころじやなくアブナイもしくはヤバイ実験をメインにやってる部活。活動場所は基本的に水川大橋の橋の下か豊野川の川原、あるいはとある研究所の実験室、その実験室は先輩のコネで貸してもらっているらしい。秘境部は主に秘境と呼ばれる場所、というか彼らがそう呼んでいる場所、無論危険な場所も含む所に行くべく日夜鍛錬をしている部活。活動場所は駅前のスポーツジムが多いね。ちなみに実際に秘境にアタックをかけるのは長期休暇中。黒歴史部はいろんなところで闇に葬られたイタいエピソードを中心に調べている部活。そのターゲットは偉人・有名人から校長まで幅広い。活動場所は大体市立図書館、たまに実地調査って言ってどっか行ってる。」

「な……なんでそんなに詳しいんですか！」

「小金井くん、なぜだかそっち系の人に広いネットワークを持っているのよ……」

「僕の人脈はそっち系だけじゃないさ。ちなみにアングラ系って言われるのは基本的に学校側に認可されてるわけじゃないから。文化祭なんかでは有志出展の形をとって出展してる。部員勧誘は入学

式の日だけ、それもあんまり目立たないようにやってる。先生に見つかるといろいろ面倒らしいからね。で、それを逃すと僕みたいにそこつながりのある人経由じゃないとまず入れない、そもそも活動場所が分からないから入りようが無い。ついでにさっき言ったやつその他にもいくつかあるよ。」

「あのー、小金井さんはどこまでそっち系の人と繋がりがあるんすか？」

「んー、顔が利かないところは無いと思うよ？ 今度彼らの活動を見てるかい？」

「い……いや、遠慮しておきます……」

「そう？ 気になったらいつでも言ってるね。すぐに手配するから。それともう少して準備終わるから、籠原さん、トレーニングについて説明して。」

「わかったわ。」

「えーっと、籠原先輩、トレーニングってなんですか？」

「うーん、早い話が新入部員を鍛え上げるための特訓ね、でもそこまで大変じゃないから大丈夫。」

「よーし、準備できたぞー。」

「あ、じゃあ春香ちゃんはおっちで自分のパソコンの準備してきて。」

「はい！」

桜木は勢いよく立ち上がると小金井さんがいじっていたパソコンの前へ飛んで行った。

「えーっと、説明するわよ。トレーニングって言うのはブラインドタッチングの練習のこと。それが終われば何しても構わないから。」

「ブラインドタッチング？ なんですか、それ？」

「文字通りキーボードを見ないで文字を打つこと。それが出来ると文字を打つ作業の時の速さが段違いだから、ここに入ったら必ず習得しなくちゃいけないの。」

「大丈夫、僕は一週間で終わったし、籠原さんでも三週間で終わったから。」

「籠原さん『でも』ってどういうことかしら？」

「んー、まあ思わずポロっと言っちゃった言葉だから聞き流してついでに忘れてくれるとうれしいな。」

「覚えておくわ。」

「あー、やだなあ……後が怖いなあ……ん？　ちよっと！　桜木さん！　何が起きたんだ！」

「わ、わかりませうん！」

「ちよっと！　どうしたの？」

籠原先輩が様子を見に行く、そして小金井さんと同じように驚きの声を上げる。

「えっ？　なにこれ！」

みるとレインボウズ独特の青いウィンドウが大量に出現していて、おまけにフリーズしているっぽい。

「あのさ……、もしかして桜木ってパソコンオンチ？」

「あはー、ばれちゃった？　てへ。」

「てへ、じゃ済まない気がするんだが……。」

「ちよっと、小金井くん！　何とかならないの？」

「何とかするから待って！」

先輩たちは二人ともパソコンの復活に取り掛かってしまった。

「なあ、桜木。」

「ん？　なあに？　代々木君。」

「お前家でパソコン使ったこと無いのか？」

「うーん、あんまり無いかも。」

「……それは現代に生きる高校生としてどうかと思うんだが……なあ、神田、お前はどう思う？」

「……………ぐう」

「へ？」

見ると神田は腕を組んで盛大に寝ていた。さっきから会話に加わっ

てこなかった訳はこれだったのか……。

「よし、やっと直った……」

「お疲れさま……」

「……籠原さんが桜木さんに付きっ切りになってあげた方がいいんじゃない？　というよりむしろ付いててあげないと危険な気がする……」

「そうね……、そのほうがよさそう……」

「よし、じゃあ代々木と神田は僕、桜木さんは籠原さんが面倒を見るということ。そうそう、代々木、神田を起こしてくれるかな？」

「おい、神田、起きろ。」

「ふえ？　準備できたのか？」

「そうだよ、いいから起きろ。」

「へいよ。」

「よし、したらそれぞれ自分のパソコンの前に座って起動して。」
そして詳細説明兼トレーニングスタート。

一時間後……

「よし、今日はここまで！」

「みんな、お疲れさま。」

「ういっす。」

「終わった……」

「みんなどうだった？」

トレーニングといってもさすがにずっとやりっぱなしではなく、一日一時間程度でいいらしい。何でも一時間以上やっても集中力が持たないので意味が無いとか何とか。……なんとなく『ゲームは一日一時間！』とか言う言葉が連想されるが、まあ気のせいだということにしておこう。

「それじゃあ後は好きなことしててもいいんだけど、今日は特にやることも無いからどうしようか。……まあいいか。帰ってもいいし

残ってでもいいよ。今日はここで一旦お開き。明日からは何かやりたいことがあったら自分で必要なものを持ってきてね。ちなみに僕のオススメはゲームでもしてるか音楽ファイルとイヤホンを持ってきて音楽でも聴くこと、かな。もちろんゲームっていうのは任○堂DSとかP○Pっていうののことだけど。」

「はあ……いいんですか？ そんなことしても。」

「いいよいいよ。僕も籠原さんもよくやってるから。」

「そうなんですか？」

「え……ええ、まあ。」

「ゲームがやりたかったら面白いFPSがあるからあげる。エ○ユレーターなんかは使ってもいいけどあくまで自己責任でヨロシク。ほいじゃあ後はご自由にどうぞ。」

特にやることがない俺たちは早々に帰ることにした。

その帰り道……

「なあ代々木、なんつーか思ってたよりラクじゃなかったか？ 特訓。」

「だよな。どっちかつーとゲームみたいな感じだしな。桜木はどうだった？」

「えっ……あはは、わたしは秋乃先輩に怒られてばかりだったよ。『お願いだから余計なところを触らないで！』って。」

「桜木さん、オレの見立てでは籠原先輩は怒らせるとヤバイ。だから気をつけたほうがいいと思う。」

「えー、大丈夫だよ。秋乃先輩が怒るのはだらしない男の人だけだもん。」

「……それでいくと小金井さんはかなり危ないんじゃないか……？」

「うーん、確かにしっかりしてるとは言いづらいな……」

「でも部長をやってるってことはそれなりにちゃんとしてるんじゃない？」

「そうなのかもな……そうなのかな？」

とまあ高校生生活の初日はこんな具合だった。

第1話 (まーのんびりとやっていきましょうや) (後書き)

さて、いかがでしたか？

以前は大きくまとめていたものを小分けにして、ちよいと手直しを入れただけなんです、やはり分量が少なめのほうが読みやすいかと思ってこうしました。

楽しんでいただけたなら幸いです。つまらなかったら……ごめんなさい、がんばります。

しかしあとがきに書く事に関して結構困るのは僕だけですかね？さすがにあとがきにまで本文のノリを持ち込むとかなかなかすごいことになりそうな気がしているのでいろいろと自粛しています。だけどそのうち羽目が外れる……かも？

それではまた！

第2話 (単位のご利用は計画的に) (前書き)

ということで改訂版第二話なのです。

それではお楽しみください!!

第2話 (単位のご利用は計画的に)

二日目、放課後

「こんにちはー。」

「こんにちはー。」

「こんにちは。」

放課後、コンピ研の部室に来る。

先に来ていたのは籠原先輩だけだった。

「あれ？ 今日はまだ小金井さんは来てないんですか？」

「……小金井くんなら今日は来ないわ。」

「え？ そうなんですか？」

「ええ、だって今日は学校に来てないもの。」

「風邪でもひいたんですか？」

「違うわ、サボってるのよ。……まったく、今度はどこに行ってるのかしら……」

部長なのに学校をサボってるだって？

「あの一、サボってるって言うのは……」

「そう、いわゆるズル休み。」

「……まさか去年いた二日目からサボった生徒って言うのは……」

「そう、小金井くんのこと。他にもいろんな伝説を持っているわよ？ 中学校の時から毎年出席日数はギリギリで進級してるし。」

「ギリギリ？ そんなにサボってたんですか？」

「……お願いだから絶対に真似しないでね、あんなことしてて許されるのは小金井くんだけよ。」

そのとき何やら携帯の着信音のような音が鳴った。

「ごめんなさい、ちょっと待ってて、きつと小金井くんからだから。」

」
籠原先輩はパソコンの脇に置いてあった携帯電話を取ると、メールをチェックし始めた。

「というか携帯電話って持ち込みオッケーだったっけ？」

「やっぱり……今は小山駅にいるそうよ……。」

「小山？ どこスカそれ？」

「うーん、口では説明しづらいわね……、そうだ、神田君、その小金井くんのパソコンの前に置いてある時刻表を取ってきてもらえるかしら？」

「はいよろこんで！ えーと、これですか？」

神田が持ってきたのは背表紙に赤い文字で『J〇時刻表』と書かれたやたらとぶ厚い本だった。

「なんですか、この本？」

「だから時刻表。小金井くんがよく持ち歩いてる物よ。昨日あたたちが帰った後にこれを読んだから怪しいとは思ってたんだけど……中身は列車がいつどの駅を通るのが書いてあるの。それで、小山駅っていうのはここ。」

籠原先輩はなにやら地図に路線図が書いてあるページを開くと、そのうちの一点を指差した。

「へえー、こんなところにあるんスカ。」

「って、もうすぐそこが宇都宮じゃないですか！」

「分かった？ じゃあもう閉じるわよ。」

「……っていうか小金井さんって鉄道オタクなんですか？」

「そうなのよ……まあ普通に接してたらあまり気づかないとは思わねどね。」

「でも学校サボっていいんですか？」

「いいわけないでしょ。」

「あの一、小金井さんはいったいどういう人なんスカ？」

「そうね……一言で言えば変な人ね。よく学校を休んではあちこちに乗りに行ったり、かと思えば試験では学年トップクラスだし、

体力に関しては下手な体育会系よりも遙かにあるし……まあ運動神経に関しては別だけど、無駄に記憶力も良いし、いろんなことの呑み込みは異様に早いし、さりげなくピアノは上手いし……いるのよね、ああいう人って……」

「それと怪しい部活の人と交流があることについては何か関係あるんですか？」

「ないわ。それとこれとは別よ、多分……。でも確かにそれも一因かもしれないわね。時々とんでもないことを思いつくから……」

「とんでもないこと？」

「ちよつとした事からかなり危険なことまで色々。特に裏科学部の人たちが喜びそうなのがが多いけれどね。」

「……かなり気になるんですけど……」

「はい、おしゃべりはいったんおしまい、早くトレーニングを始めて。あ、そうだ、春香ちゃん、今日はちよつとあなたの面倒をあまり見てあげられないから、自分で頑張つて。くれぐれも変なことはしないでね。」

「えーっ！ 秋乃先輩何か仕事でもあるんですか？」

「年間予定表を打ち込んで印刷しなきゃいけないの。さすがに手書きだと見栄えがしないから。」

「そうなんですか。それじゃあしょうがないですね。」

「ごめんね、本当は私も春香ちゃんの面倒を見てあげたいんだけど、というより見てないと不安で仕方がないんだけど……これは早めに仕上げておかないといけないから。」

そして昨日と同じようにトレーニングが始まった。

そしてやっぱり一時間後……

「はい、おつかれさま。今日のトレーニングはもうおしまいよ。」

「へーい」

「あ、はい。」

「よし、終わった〜！」

「じゃあもう好きなこととしていいんすよね？」

「ええ、ご自由にどうぞ。」

「神田、何かやるのか？」

「おう！今日はネットで拾ってきたRPGをやろうと思って持ってきたんだ。」

「桜木は？」

「うーん、わたしはまだパソコンの使い方がよく分からないから本でも読もうと思って。」

「何だ？代々木は何も持ってきてないのか？」

「ああ、特に思いつかなくてな。」

「じゃあオレが持ってきたRPGやるか？面白そうだぞ？」

「そしたらそうするか。」

「あれっ？秋乃先輩何聴いてるんですか？」

いつの間にか籠原先輩はイヤホンを耳に挿していた。

「え、なに？」

「秋乃先輩何聴いてるんですか〜！」

籠原先輩はイヤホンを耳から外すところを向いた。

「聴きたいの？別にいいけど。」

「わーい、聴かせてくださ〜い！……………これなんですか？たぶんクラシックですよね？」

「『きらきら星変奏曲』って言って分かるかしら？」

「きらきら星ってアレですか？『きらきらひかる よぞらのほしよ〜♪』ってヤツですよね？」

「そう、その元になった曲ね。もともとはモーツァルトが当時のパリではやっていた歌を使って作った曲よ。なんでも弟子の教育用に書かれたそうだけどね。」

「はあ、そうっすか……あのー、籠原先輩はJ-POPなんかは聴かないんですか？」

「んー……あんまり聞かないわね。」

「でもなんか秋乃先輩にクラシックってなんかイメージぴったりですよね。」

「そうかしら？」

「はい！ お姉さまのイメージにぴったりです！」

「……神田君？ 何か言った？」

「あ、いえ……なんでもなかったっす……」

「そういえば秋乃先輩ってピアノ弾けるんですよね？」

「ええ、まあ一応ね。……それにしても春香ちゃん、よく覚えてたわね。」

「ピアノ弾いてる時の秋乃先輩ってすごくキレイなんですもん！
きつとあれをみたらどんな男の子でもイチコロですよ！」

「……そうかしら？ それに私は小金井くんほど上手くはないわ。」
「そんなに小金井さんって上手いんですか？」

「ええ、信じられないぐらい上手いわ。中学二年生ぐらいの時から『放課後のシヨパン』なんて異名をとってたらしいから。」

「なんかよく分からないけどカッコいいな。」

「なんなら今度小金井くんに頼んでみたら？ きつと喜んで弾いてくれると思うわ。」

「オレはお姉さまの弾くピアノを聞いてみたいっす！」

「……カン ダ ク ン ？」

「……いや、なんでもないっす！」

「そう？ ……あ、いけない、年間予定表を配っておくのを忘れるところだったわ！ はい、みんな一枚づつ持ってたって。」

できたてで微妙に温かい年間予定表が配られる。さて、中に目を通す……

「あのー、この七月二十九日の『お楽しみ』ってなんですか？」

「書いてある通り『お楽しみ』よ。」

「……全然分かんないんですけど。」

「それと八月三日から六日まで『お泊り会』ってなってるのはなんスか？」

「それも文字通り『お泊り会』だけど？」

「どこ行くんですか？」

「さあ、それは小金井くんに聞いてちょうだい。たぶん去年と同じだとは思うんだけど……そもそもこの予定を組んだのは小金井くんだから。」

「じゃあ十二月二十七日の『お楽しみ会』っていうのも……」

「ええ、詳しいことは知らないわ。」

「……………」

「ごめんなさい……小金井くん、明日は来るはずだから……」

「あ、気にしないでいいっスよ。」

「そう？ 本当にごめんなさいね……」

『教員日直より連絡です。最終下校時刻十分前となりました。生徒諸君は帰り支度、教室の戸締りをして速やかに下校してください。』

「あら、いけない。みんな、早く帰り支度をして帰りましょう。」

「あ、はい。」

「へーい。」

「はーい！」

そして俺たちは部室を出て校門へと向かった。校門には先生が何人か立っている。

「さよなら」

「はい、さようなら、気をつけて帰れよう。」

普通に挨拶を交わして校門の外に出る。

「じゃあみんな、私はここで。」

「あれっ？ 秋乃先輩、わたしたちと同じ方向じゃありませんでした？」

「ええ、そうなんだけど、これから水川駅に小金井くんを捕まえに行くから先に帰っててちょうだい。」

「小金井さんを捕まえるんですか？」

「そうよ。メールが来た時に小山駅だったから水川駅に着くのはきつと七時ぐらい、駅で捕まえて文句を言わなきゃ。本当は年間予定

表を作るのは小金井くんの仕事だったんだから。」

「そ、そうっすか、じゃあオレらはもう帰るんで。さようなら。」

「はい、それじゃあまた明日。」

「代々木！ 桜木さん！ 早く逃げるぞ！」

神田が小声で俺らを急かす。

「なっ、なんだよ急に……」

「なに？ いったいどうしたの？」

籠原先輩の姿が見えなくなったのを確認して神田が語りだす。

「今は籠原先輩やばい。めっちゃくちゃ怒ってるぞ、なんかこう禍々しいオーラが見える。触らぬ神に祟りなし、だ。」

「な……なんでそんなことが分かるんだ？」

「カンだ、っていうか籠原先輩目が笑ってなかったんだよ。笑顔の奥に怒りが爆発寸前の状態で蓄えられてたんだよ！」

神田のカン、か？ ……惜しいな、もう少しでダジャレができそう

なんだが……

第2話 (単位のご利用は計画的に) (後書き)

さて、いかがでしょうか？

今回も読んでくださった方、本当にありがとうございます。

この話だけちょっと読んでみたという方、ぜひプロローグからどうぞ。

それではまた。

第3話 (わが道を突き進むと……?) (前書き)

第三話です

例によってサブタイトルの()の中の言葉に深い意味はありません、
たぶん

そいではお楽しみあれ

第3話 （わが道を突き進むと……？）

授業が始まってから三日目の朝……

「ういーっす。」

「よう。」

家の前で神田と出会う。そしてどうでもいいような話をしながら交差点まで来ると、

「おっはよう！」

桜木と出くわす。

「そういえば桜木はちゃんと入部届け書いてきたのか？」

「うん、大丈夫だよ。ちゃんとハンコももらってきたし。」

「……なんか親に言われなかったか？」

「え？ 秋乃先輩がいる部活だって言ったら、『秋乃ちゃんによるしくね』としか言われなかったよ。」

「いや、お前のパソコンオンチについてのことなんだが……」

「特に何も言ってなかったけど？」

「そうか、それならいいんだ……いや、よくないか……」

「おい、代々木。あそこを歩いてる人たち、小金井さんと籠原先輩じゃないか？」

たしかに、どことなく見たことがある後姿だ。なにやら口喧嘩をしているようだが……

「……どうしてよりによって昨日休むのよ！」

「んー、春の陽気に誘われてプチ旅がしたくなったからかなー。」

「そんなんじゃないまた出席日数ギリギリで進級することになるわよ？」

「だーいじょうぶ、ご利用は計画的、だから。」

「そういう問題じゃなくって、小金井くんは部長なんだからやらない

きやいけないことがたくさんあるでしょ！」

「一応そういうのは全部やってから学校をサボるように心がけてるから大丈夫。」

「昨日はやってかにゃ……やってかなかったじゃない！」

籠原先輩……囁んだ……

「心がけてる、と言っただけで完全に実行するとは一言も言ってないけど？　だいたい今回は新入部員用のパソコンのセットアップは全部僕がやったんだからおあいこってことでいいじゃないか。」

小金井先輩は華麗にスルー……

「うっ……」

なにやら朝っぱらから壮絶な口論（と言うよりも一方的なお説教、しかもおそらく効果ナシ）が展開されているが、とりあえず挨拶はしておこう……

「えーと、おはようございます……」

「ありゃ、おはよ。悪かったねえ、昨日は。まあ時々こういうことがあるから覚えといて。」

「お……おはよう、みんな……」

「あはは、怒ってる籠原さん怖かったでしょ？」

「……」

「んー、正直じゃないな。まあこの場合は答えたらアウトって判断は間違いじゃないと思うよ？」

「そ、そうですか……」

「ね、だから言ったでしょ？　すぐにバレるって。」

「べ、別に私は隠そうとしてたわけじゃないわよ！」

「さっきから怒りすぎだよ、だいたい昨日駅で散々説教を聞いたじゃないか。」

「や、やっぱりホントに駅に行ってきたんスカ……」

「うん、ビックリしたよ。改札を出たら籠原さんがいてさ、あんまりにも怖かったから思わず逃げ出そうかって思っちゃったよ。あー、本当に怖かったなー。」

「その全く反省してない態度が問題なのよ！」

「そりゃそうだ、だって僕は僕のしたことを悪いことだとは思ってないから。」

「……………」

言い返す言葉がないのか、籠原先輩は怒りで肩をふるふると震わせている。

「大体さー、そんなに怒ってばかりいるから。」

「怒ってばかりいるから、なに？」

「その先を言うわけじゃないじゃなく、僕の命が危ないからね。」
何のために文の最後にまるが付いてると思ってるのさ。」

どうも火に油を注いだ感が否めないが……

「いったいなんなんですか？ その先って？」

「ん？ 知りたい？」

籠原先輩がキツと小金井さんを睨む。それを見ると小金井さんは籠原先輩に聞こえないようにそっと囁いた。

「胸に栄養がいかないんだよ、って続くんだよ。」

次の瞬間、ボグツと鈍い音がして、小金井さんの顔が激しくブレて視界から消えた。

「……………言ったわね……………」

「痛い、痛いつて！ カバンの角で頭を殴らないで！ ホントに痛いから！ っていうか聞こえてた？」

「……………ええ、ばっちり。」

「ヤバイ…… みんな！僕は逃げるから後はヨロシク！ BGMはオッフエンバック「地獄のオルフェウス」第三幕への間奏曲で！」
それだけ言うと小金井さんは猛然と走って逃げ出した。

「待ちなさい！」

籠原先輩も後を追って走り出す。

「……………」

「……………いや、決して無いわけではないと思うっス、籠原先輩……………」

「秋乃先輩……気にしてたんだ……」

神田のコメントは籠原先輩に聞かれたら間違いなく地獄送り確定だな、本人にしたら慰めのつもりなんだろうが……

「でも確か小金井さんと籠原先輩って同じクラスだったような……」

「……なあ、神田。今日小金井さんが部活に来るか賭けるか？」

「あの人のことだから来るんじゃないか？」

「やっぱりそう思うか……」

「無事じゃあ済まない気もするがな……」

「じゃあ無傷で来るかどうかだろうだ？」

「もう既に負傷していると思うんだが……」

「……か。」

とりあえずこんな所で立ち止まっていたでは始業に遅れてしまう。歩き出してしばらく行くと、立ち止まって肩で息をしている籠原先輩に追いついた。

「……振り……切られたわ……」

見ると小金井さんの姿は既に無い。

「秋乃先輩、お疲れ様でした！」

桜木……それは励ましなのか？

「見事に逃げられたっスね。」

「こういうときはあの無駄な体力が鬱陶しいわ……」

籠原先輩、相変わらず目がめっちゃくちゃ怒ってて凄まじく怖い。

そんな一件があった日の放課後……

俺たちが部室に来た時に、部室にいたのは小金井さんだけだった。

「こんにちは。……籠原先輩はまだ来てないんですか？」

「あー、うん。今日籠原さんは掃除当番だから。遅れてくるってさ。」

「そうですか……」

「……君たちさ、今朝の籠原さん見て怖いと思った？」

「ええ、まあ……」

「やっぱりねー。でもね、本当はとっても優しい人だからあんまり気にしないであげてね。」

「そうなんですか？」

「うん、僕がサボってるときに心配して連絡くれるのはいまや籠原さんだけだからね。それになんだかんだ言ってもちゃんと君たちの面倒を見てくれて、その上に年間予定表もしっかり作っておいてくれるし。そういうことをちゃんとやってくれるから僕は籠原さんを信頼してるんだ。」

「でも、じゃあ朝の件は何だったんですか……」

「あー、あれは聞こえないように言っただつたりだつただけで、聞こえちゃってたみたいだね。」

「言うつもりはなかったんですか？」

「うん。だってさー、アレを言っちゃうとその場ではメチャクチャ怒るんだけど、その後でとっても悲しそうな顔してるんだよ。なんかこう見てるこっちが悲しくなるぐらいさー。おかげで籠原さんの友達に『小金井君、いったい何を言ったの？』って詰問されちゃったよ。」

「あの一、小金井先輩、秋乃先輩にちゃんと謝りました？」

「そりゃもちろん。さすがにアレは僕が悪いから、でも許してくれる気配がないけど……さて、じゃあ早めにトレーニングを始めちゃってもらえるかな？」

「はあ……分かりました。」

そしてトレーニングを始めてしばらくしてから籠原先輩が現れた。

「……こんにちは……」

「おつかれ。」

「あ、お疲れ様です。」

「ちわーっす。」

「あ……、秋乃せんぱうい！ 助けてくださーい！」

「わかったわ、今行くから少し待ってて……」

確かにどこことなく元気が無い。まだ朝のことを引きずっているみたいだ。

「……はい、これで大丈夫……」

「ありがとうございますーす……秋乃先輩、元気出してくださいよ。」

「……うん……ありがとう……」

桜木の救済を済ませると、籠原先輩は心ここにあらず、といった感じで自分の席に座った。ちなみに小金井さんの隣だが……

「籠原さーん、元気出してよ。朝のことは悪かったって。」

「……………」

その大元になった人が言ってもあまり効果は無いと思うんです、小金井さん。

「うむむむむ……こうなったら、みんな！ ちょっと席外すからヨロシク！」

小金井さんはそう言うなり部室のドアを開けてどこかへ行ってしまった。残されたのはなんとなく居心地の悪い沈黙だった。……空気が重い……

そして五分としないで小金井さんは戻ってきた。

「はい、籠原さん、これあげるから元気出して。」

小金井さんの手には『さわやかりんごジュース』と書かれている缶が握られていた。どうもこれを買に行っていたらしい。

「ほら、これ好きなんでしょ？ 飲みなよ。」

「……どうしてそれを知ってるの……？」

「だって籠原さんよくこれ買ってうれしそうに飲んでるじゃん。ほら、飲んで飲んで！」

「……そう、ありがとう……」

とは言っても籠原さんは受け取ったときり飲む気配が無い。

「……まだダメか……よし、少ししたら戻ってくるから、ちょっ

と待ってて。」

再びどこかへ出かけていく小金井さん。そして、小金井さんが部室を出て行った後に、籠原先輩がポツリとつぶやいた。

(……バカ……そんなに気を使わなくてもいいのに……)

神田と桜木には聞こえていなかったみたいだが、確かにそう言った後、先ほどの缶ジュースを開けて飲み始めた。気づいた桜木が話を振る。

「あー、よかった。秋乃先輩、やっと元気になってきた。」

「ん、ごめんなさいね。なんかみんなまで元気が無いみたいだし……」

「いやいやいや、そんなことないっすよ。」

「うんうん、秋乃先輩は元気じゃないと!」

「うふふ、そうね。元気出さないと……ね。」

「でも秋乃先輩、ホントに気にしてたんですね。」

「まて、桜木! 今ここでその話題はマズいだろ!

「おい、桜木、それは今は言わない方が……」

「ううん、大丈夫。気遣ってくれてありがとう、代々木君。本当に普段は気にしてないから。……それに人間欠点が一つぐらいはないと上手くやっていけないものよ?」

「……それは暗にお姉さまが〇の〇〇〇以外はパーフェクトだと言ってるんですかね?」

「神田君、わざわざ伏字にしなくても大丈夫よ。それに私はそんな完璧な人間じゃないわ。」

「そうですか? オレが聞いたところによるとこの学校で最もモテる女子生徒ぶっちぎりでナンバーワンっすよ?」

「……何それ……?」

「あ、いや……うっかり口が滑ってしまいました。はい。」

「……それと何回言ったらその呼び方で呼ぶのを止めて貰えるのかしら?」

「止める気はありません!」

「……………」

「かつ……籠原先輩……その沈黙と非難の眼差しがとっても心に刺さるっス！」

「ま……まあとりあえず秋乃先輩の元気が出てきたからよかったよかったです！」

「そうね……ありがとう、春香ちゃん。それに小金井くんが悪気が無かったのは分かってるから。」

「そうなんスか？」

「小金井くんは本気で人を傷つける人じゃないもの。それに小金井君とは中学のときからずっと同じクラスだし。」

「え？　そうだったんですか？」

「あれ？　小金井くんとは中学校からずっと同じクラスだって言っ
てなかったかしら？　まあ話すようになったのは中三からだけど。」

「そ、そうだったんスか、知らなかったっス……」

「ええ、まあ変人っぷりもよく知ってるけどね……」

「やつほー！　たっだいまー！　……みんな、どしたの？　やたら
としんみりしちゃって？　あ、籠原さん、これ食べて元気出してよ。」

「どうやら小金井さんは学校の前にあるコンビニに行っていたらしい。
コンビニ袋を手に提げている。」

「これって……小金井くんがよく食べてるプリン？」

「そ、おいしいから食べてよ。」

「今度は籠原先輩が好きなやつじゃないんですね。」

「んー、それでも良かったんだけど……なんというか……僕の趣味
？　甘いもの好きだし。」

「ふふっ、やっぱり小金井くんね。」

「ひどいなあ……でもいつもの籠原さんに戻ったから結果オーライ
かな？　やっぱり籠原さんはそうでなくちゃ。あ、そうそう、一応
みんなの分のお菓子も買ってきたんだ。ほら、遠慮しないで食べて
ね。」

小金井さんはコンビニ袋からポテトチップスやらチョコレートやらを出しながら言った。

「おおっ！ 食べちゃっていいんスカ？」

「どうぞどうぞ。そのために買ってきたんだから。」

「じゃあポテチ貰いまーす！」

真っ先にポテトチップスを取る神田。

「じゃ、わたしはコレ！」

続いてチョコレートを持っていく桜木。

「俺は残り物か……」

「まあそんなに落ち込まない！ 残り物には福があるって言うだろ？」

別に残ったメ○トスが嫌いなわけじゃないので落ち込んではいないのだが……

「あ、そうそう、メ○トス是一粒だけ残しといてね。」

「？ 何ですか？」

「ん、なに、ちょっとね。ふふふふ……」

「小金井くん？ メントスコーラの実験は許さないわよ？」

「ぎくううう！ な……何でわかったの？」

「袋の中に残ったコーラは何に使うのかしら？」

「いや、見て見ぬ振りしてくれると助かるな。」

「そんなことできるわけないでしょ！」

「わかったよ、しょうがないな。」

「『しょうがないな』はこっちの台詞よ！ 全くもう……」

とまあそんなことをしているうちに最終下校時刻が迫っていた。

「さて、みんな忘れ物はないね？」

「はい、小金井さーん、忘れ物があるっス。」

「ん、なんだい？」

「将来の夢を忘れてきましたー。」

「大丈夫だよ、今から探せばまだ間に合うし、捨てたんじゃなければきつと見つかるよ。」

「……こんなことを平気で言う神田も神田だが、小金井さん、何気にさらっと流している。地味に凄い……というかアホ？」

「はいはい、馬鹿やってないで早くかえりましょ。」

「籠原さんもノってよ。」

「どうノれって言うのよ？」

「うーん……例えば『あなたの夢はどうしたの？』とか？」

「……もう帰っていいわよね？ 春香ちゃん、帰りましょ。」

「はい。」

「あぁっ、ひどい、待ってよ！」

何はともあれ朝の一件は何とかなったみたいだし、これでいいのか……いいよな？ 『これでいいのだ！』とかいうナイスなボケは期待してないからな？

「よし、これでいいのだ！」

「……ナイスすぎだぜ、神田……」

「それにしても秋乃先輩、いつも通りになってくれてよかった！」

「そう？ 私は必死に機嫌を取ろうとする小金井くんを見てるものもなかなかおもしろかったけど。」

「なっ……それホント？」

「冗談よ、半分ぐらい。」

「半分は本気なんだ……ちよつとヘコむな……」

「まあそう気を落とさないで、小金井くんこそ元気が一番よ。」

「そうかなあ……つと、じゃあここで僕はさよならだから、んじやまた。」

「ちよつと、私もよ？」

「あははー、なんか色々と怒られそうだから僕だけで帰ろうと思っただけだよっぱり無理か。」

「そうね、色々と言いたい事があるわね。」

「あー、怖い怖い……」

「そういえば小金井さんと籠原先輩、帰る方向同じなんですね。」
「あー、うん。同じっていうか、僕の家が隣が籠原さんの家だから。」

「え……そうだったんですか！」

「うん、だから今朝捕まったんだよ。ご丁寧に玄関前で待ち伏せしてたから逃げられなかったんだよ。」

「逃がすもんですか……今まで何回あのパターンで捕まったと思ってるのよ……」

「じゃあ籠原さんも今まで何回あのパターンで振り切られたと思ってるのさ？」

「う……」

「ま、そーゆーことでじゃあね、また明日！」

「さようなら、みんな、また明日ね。」

小金井さんと籠原先輩は交差点を曲がっていった。交差点をあと三つほど過ぎれば俺たちと桜木の別れる交差点だ。

「それじゃあ代々木君、神田君、またね！」

「おう、じゃあな。」

「はいよー、おつかれー。」

桜木と別れる交差点を過ぎれば俺と神田の家はすぐそこである。

「さて、じゃあな、また明日。」

「おう、んじゃ。」

家へ入ろうとする俺に神田が声をかけてくる。

「なあ、代々木。」

「ん？ どうした？」

「今度メントスコーラの実験やってみないか？」

「やめとけて、籠原先輩にバレたら殺されるぞ……」

「そこは小金井さんを味方につければ大丈夫！」

「むしろもっとヤバイ方向にいきそうな気がするけどな……」

「うーん、そうか？ まあいいや、ほいじゃな。」

「へいへい……」

こうしてこの日は終わりを告げた。

第3話 (わが道を突き進むと……?) (後書き)

なんだか改めて後書きを書くのも結構めんどくさいですね……
なにせ以前も書いたものだけに、何を書けばいいのやら……という
事態に陥っているのです (笑)

それではまた!

第4話 (がんばってもどうにもならないことだってある) (前書き)

やっと「トレーニング」とやらが終わった……のかな？

例によってサブタイの○の中には大した意味はありません！

それではお楽しみください

第4話 (がんばってもどうにもならないことだってある)

コンピ研の活動が始まってから二週間。ついこの間俺と神田は無事にトレーニングを終え、自由を満喫していた。……え？　もう一人いたろうって？　……桜木はだな……その……

「ねえ、籠原さん……桜木さんのこと、どうする？」

「……そうね、トレーニングはもう諦めた方がいいかも。それより変なプログラムを起動させないでパソコンが使えるような訓練をした方がよさそうね……」

こんな会話が先輩方の間で繰り返される理由はただ一つ、桜木のパソコンオンチの度があまりにも酷すぎたことだ。

「春香ちゃん、本当に申し訳ないんだけどしばらくパソコンをいじらないでいてもらえるかしら……」

「はい……わかりました……」

さすがの桜木もシュンとしている。まあ、先輩たちにもものすごく疲れた顔で言われたらさすがに普通はああなるだろうな……

「はあ……どないしましょ……」

「そうね……やっぱり私が付きっ切りになるしかないのかしら……」

「それだと開発戦力が僕しかいなくなっちゃうじゃないか、今から一年生を仕込んでも間に合わないし……」

「でも開発って言ってもせいぜい数値を変えるぐらいでしょ？　それなら一年生でもできると思うけど？」

「うーん、でもやっぱりプログラムをいじるなら一応基礎からしっかり習得した上でやった方がいいでしょ。いくらVBが簡単だからっていつでも仕組みが分からなきゃいちいち説明していかなきゃだしさ……」

「……むしろいつそのこと代々木君と神田君に春香ちゃんの面倒を見るのを任せてみる？」

「大丈夫かな……でもそれぐらいしか手が無いか……」

「じゃあそれで決まりね。代々木君、神田君、ちょっと来て！」

「あ、はい。」

「へーい。」

「たぶん話を聞いてたと思うけど、あなたたちに春香ちゃんの面倒を見るのを任せることになったから。お願いできるかしら？」

「え……ええ、まあ頑張ります……」

「お任せあれ！」

「お前やけに自信満々だな……」

「なに、ちょっと見栄を張りたくなっただけだから気にすんなって。」

「見栄って、お前自信があるんじゃないのかよ……」

「残念ながら桜木さんの暴走を止められる自信はない！　だがいざという時にパソコンの電源を無理矢理落とす自信はある！」

「神田く〜ん、自信があるのはいいいことだけどできればその方法は避けてほしいな〜。」

「すみません、努力はします……」

「できれば努力より結果を出してほしいんだけどな〜。ま、本当にいざという時は許すから。さて、じゃあ早速頼むよ。僕らの仕事は明日からなんだけど、別に予行演習ってことでいいよね？　その代わりに今度お昼奢ってあげるから、んじゃよろしく。」

「さて、んじゃ早速手伝いたいところなんだが……なあ、桜木、お前は普段いったい何をやってるんだ？」

「えーっとね、例えばここをこうしてみるとか……」

「いや、待て！　実演しなくていいから！」

「あっ、そっかー。そうすると今度は代々木君と神田君にヘルプ出さなきゃいけないもんね。」

「なんかもうまともに教えられる自信が無くなってきたぞ……」

「はわあああ！　代々木君、ヘルプ！」

「実演するなああああ！」

はあ、こんな調子じゃあ先が思いやられるな……

「なっ！ おい、フリーズしてんじゃねえか！」

「あちゃー、またやっちゃった……てへ♪」

「もう勘弁してくれ……神田、バトンタッチ……」

「おうよ、引き受けた！」

その五分後……

「すまん、代々木……後は任せた……オレにはもう無理だ……」

「おい……神田、もう少しでいいから粘ってくれよ……」

「いや……もう無理だ……オレの手には追えん……」

その様子を見ていた籠原先輩から一言。

「春香ちゃん……もう少しでいいから教えてくれる人を労わってあげてね……」

「が……がんばります……」

……むしろ頑張るほど空回りしそうで怖いから程々にしてくれ……

そしてやっとトレーニングタイムが終わる

「や……やっと終わった……」

「お疲れさまー、やっぱり大変だった？」

「……なんというか、籠原先輩の偉大さを身に染みて感じました……」

「あんなことをずっと一人でやり続けるなんてオレたちには無理です……」

「あはは……ごめんね、代々木君、神田君……」

「いや、気にすんなって……」

「おう、オレらは全然気にしてないから……」

こんなことをしばらくやり続けなければいけないなんて……先が思いやられる……

この日は結局早めに下校することになった。

「いやー、お疲れさま。特に代々木と神田、本当にご苦労様。」

「……ありがとうございます……」

「……ありがたいつス……」

「んー、何か二人ともお疲れみたいだけど、さっきのお昼をおごってあげる約束覚えてる？ それなんだけど、今日この後僕の行きつけのパン屋さんでおいしいパンを奢ってあげるってことにしているかな？」

「あー、いいですね……」

「喜んで行かせてもらうっス……」

「よし、じゃあ決まり、行こうか。」

「あのー、わたしも行っちゃダメですか？」

「え、……さすがにお財布に厳しくなっちゃうから、ゴメン！ 桜木さん！」

「……そうですか……」

「じゃあ私が春香ちゃんの分をおごってあげるわよ？」

「えっ！ いいんですか？」

「ええ。頑張っ、って応援の意味も込めて、ね。」

「やったー！ ありがとうございます！ 秋乃先輩！」

「えーっと、それじゃあ全員行くのかな？」

「そういうことになるわね。」

「はいな、それじゃあ出発！」

そしてコンピ研部員全員で小金井さんオススメのパン屋さんへ行くことになった。

校門を出て駅へ向かって歩いてゆく。水川高校から水川駅までは歩いて二十分ほどである。そして電車を使って通学している生徒はそれほど多くは無いので、駅までの道程で同じ学校の生徒を見かけることはあまり無い。

「おいしいパンか……どんなだろうな？」

「神田、よだれが垂れかかっているぞ。」

「むぐおっ！　いかん、想像だけでよだれが出てきた！」

「……お前って本当に幸せなヤツだな……」

「ふっふーん、食は明日の元気の素」

「……聞いちゃいないな……」

「それにしても代々木も神田もお疲れさん。明日からしばらくの間頑張ってね。」

「小金井くん……そんな肩の荷が下りたみたいと言うとかえって代々木君と神田君の元気が無くなっちゃうと思うんだけど？」

「そうかな？　……そうだね。それにしても桜木さん、本気で何とかしてくれないとみんな困っちゃうから本当に頑張ってよ？」

「……でっ……できるだけ頑張ってみまうす……」

「でも頑張りすぎて逆にみんなの手を煩わせないでね、お願いだから。」

「……はい……」

そして水川駅に着く。駅前は一ミナルを中心として、その空間を取り囲むように最近できたビルが立っている。数年前に、某大手家電量販店が出店してきてから今までほとんど何も無かった駅前にビルが立ち並び始め、今では駅前だけで半日は遊んで潰せるほどになった。……よくよく考えると半日しか遊べないというものなんだかな……

「……あー、どっか行きたいなあ……」

「……別に行っても構わないんだけど、その前に仕事は全部片付けて行ってね？」

「…………メンドクサーイ！」

「……怒るわよ？」

「止めてよして怒らないでメッチャ怖いから」

「それなら自分がすべきことを見失わないでね？」

「さーて、気を取り直してパン屋に行こう！」

「切り替え速っ！」

「いつものことよ。」

「……小金井さん、なんでそんなに立ち直りが速いんスか？」

「簡単簡単、過去のことは過去のこと、今更どころしようったってどうにもならないからもう知らない。そう思うだけだよ。」

「……いろいろと難しそうですね……」

「そんなことはないよ。……よーし、着いたー！」

やってきたのは駅前のビル群のうちの食品関係の店が多く入った建物の七階にある、普通のパン屋にちよつとしたカフェテリアスペースが付いたような感じの店だった。社会人たちに混じってちらほらと中学生や高校生の姿も見える。

「さて、と。じゃあ好きなパンを取ってきて、僕はレジの前で待ってるから。」

「よっしゃ！ 死ぬほど食うぞ！」

「……食べ過ぎて腹を壊すなよ？」

「心配ご無用！ 鉄の胃袋と言われたオレがこの程度で腹を壊すわけなからう！」

「自重してくれないと色々君の食事に盛らなくちゃいけなくなっちゃうから自重してね？ 僕の財布も破綻しちゃうし。」

「盛るって……何をですか？」

「何って、もちろん××××××××××とか？」

「……何スか？ それ？」

「要は○××△物質。」

「小金井さん、さっきから何を言ってるのかさっぱり読み取れないんスけど……」

「あれ？ おっかしいなあ、……ホントだ、伏字になってる、何でだろう？」

「自主規制がかかってるのよ。あんまり物騒なことは言わないの、じゃないと×××で○を△△△わよ？」

「……そういう籠原さんもなかなか過激なことを言うね……」

「そうかしら？ 別にあれはわざわざ伏字にする必要はなかったんだけど？」

「まあ、僕が言った事よりはるかに安全だね、痛いだけで死なないし……待てよ？ 打ち所が悪ければアウトかな？」

「もういいから、早くパンを取ってきましょう。」

「おっと、そうだね。ほれじゃ一旦解散！」

一度話を中断して、おいしそうなパンを探しに行く。ちょうど焼きたてのパンが並んでいて、どれもこれもおいしそうだ。

「神田は何を食べるんだ？」

「んー、とりあえずコロツケパンとピザパンとツナトーストとクリーム入りメロンパンと……」

「……そんなにガツチリ食べるのかよ……」

「タダ飯が食えるんなら食いまくつとくべきだろ？」

「……あんまり買いきると小金井さんに葬られるぞ？」

「……そうだな、これぐらいにしておこう。」

「あくまで減らす気はないんだな……桜木は何食べるんだ？」

「んー、わたしはねー、クロワッサンとフレンチトーストかなー。」

代々木君は？

「俺はクロワッサンだけでいいや。」

そして会計を済ませ（小金井さんは飲み物まで奢ってくれた）窓際の席に着く。

「さて、それじゃあいいただきます。」

「……………」

「……………」

「……へー、結構おいしいな。」

「うまいっス！」

「おいしい！ それにけっこう眺めもいいんですね。」

「でしょ？ 来てよかったと思わない？」

ビル群の端に立つこのビルからは視界を遮る高い建物がほとんど無いかげで遠くまでよく見ることができる。このビルのすぐ下を線路が走っていて、その向こうは西日に照らされた工場群の彼方に東京湾が見える。

「あ、列車だ！」

小金井さんがまるで子供がカブトムシでも見つけたときのような顔をして眼下を走っていく電車を見る。

「あゝ、線路が僕を」

「呼んでないわ。明日もちゃんと学校に来なさい。」

「ううゝ、ケチだなー……」

「……ケチだとかそういう問題じゃないでしょ？」

「まだ単位は余裕だよ。」

「……いいから来なさい。明日は六時間目に音楽よ？」

「うむむ……じゃあ六時間目までにこっちに戻ってくればいいや！」

「……いいから来なさい。小金井くんの場合はちゃんと一時間目から来てたら居眠りしてても誰も文句を言わないから。」

「あれ？ 確か授業開始から二日目の時点でサボった生徒っていうのは……」

「あ、それ僕だよ。」

笑顔で親指を立てる小金井さん。

「何をそんなに誇らしげに言ってるのよ……」

「……そうだったっスね……」

「……というかそんなにサボりまくってて成績とかは大丈夫なんですか？」

「大丈夫だよ。」

「そうなんですか？ 籠原先輩？」

「ええ、どうしてなんだかさっぱり解らないんだけど、成績は全く問題ないの、と言うより文句のつけようがないわ。そうじゃなかったら小金井くんは毎日お説教をくらう羽目になってるわよ。」

「……他の人はそのことをなんとも思っていないんですか？」

「さあ……少なくとも私はなんとも思っていないし、他の人たちも『小金井だから』って言って全く気にしてないみたいだけど……」

「……小金井さん、あなたはいったいなんなんスカ……？」

「うゝん……変な人？」

「……自分で言わないでよ……」

そしてこの日は夕方七時頃に帰途についた。

神田は自腹を切ってさらに四つほどパンを食べ、先輩たちから驚愕の目で見られていたんだよな……

第4話 (がんばってもどうにもならないことだってある) (後書き)

どうでしたか？

楽しんでいただけましたでしょうか？

どうでもいいですけど、よく考えたら神田君はパンを8つほどたいらげてるんですね……

それではまた！

第5話 (88は何の数でしょう?) (前書き)

やっと第5話……

例によってサブタイトルの()の中の言葉には深い意味はありません。

それではどうぞ

第5話 (88は何の数でしょう?)

そして次の日……

「神田、一時間目って何だったっけ？」

「一時間目？ 現社じゃないのか？」

朝、全く覚えていない時間割を思い出せないので授業の準備のために科目を聞く。

「現社だったっけ？」

「だったと思うんだが……メガネー！ 一時間目ってなんだっけ？」
神田が自席の前に座っている級長に声をかける。

「……とりあえず現代社会であっているがせめて『級長』だとか普通に呼べないのか？」

「いやー、だってお前の名前覚えてないし。」

「ならこの機会に覚えてくれ、浜野博之だ。」

「ふーん、……よし、覚えたぞ！ メガネ浜野だな！」

「……微妙にあっているが違うな。お笑い芸人のような名前になっている。」

「よし、メガネハマコーだな？」

「僕は決して政治家ではないぞ！？」

「あー！ もういい！ やっぱメガネだ！」

「……ふざけているのか本気なのか知らないがもういい。それより早く現社の準備をしたらどうだ？ あと五分で始まるぞ。」

「おっと、いけない！」

そして矢川先生がやってきて授業が始まる。

個人的にいちいち授業の様子を伝えるのもめんどくさいのでかなりきわどいネタが連発されていたことだけ記しておく。

二時間目、科目は地理。すなわち我らが登戸先生の授業だ。

「ういーす、授業始めるぞ、席に着けい。」

いつものようにやる気ないオーラを発しながら登戸先生が入ってくる。

「起立！ 気をつけ！ 礼！」

級長が型通りの号令をかけて授業が始まる。

「さて、授業を始める前に一つ大事な話をせにやらん……」

先生はいつになく真面目な顔をする。普段は絶対にそんな顔をしないので、自然とクラス中が緊張に包まれる。

「昨日だな……」

……そしてクラスの緊張が最高潮に達したその時、不意に先生はいつものニヤリとした笑いを浮かべて続きを語る。

「校庭の隅で野グソたれたバカがいた。」

あまりに真面目からかけ離れたその内容にクラス中が大爆笑に包まれる。何人かの矢川先生とやたら仲良くなっている生徒は笑いのあまり椅子から転げ落ちそうだ。

「でだ、もし『そいつ見ました』ってやつがいたらちょっと教えてくれ。それと『実はボクでしゅ』とかいうヤツは即刻申し出ること。罰として昨日ソレを片付けた用務員さんの代わりに学校中のトイレを掃除してもらうからな。そいじゃ始めっか。」

そして授業が始まる。しばらく経って授業の中程……

「……なあ、代々木？」

「どうした？」

「実はさあ、オレ昨日ソレっぽいヤツ見ちゃったんだよなあ……」

「……マジで？」

「なんか校庭の隅の草陰でしゃがみこんでたからたぶんそうだと思う……」

「えっ？ 神田君その人見たの？」

「らしいぞ。だよな、神田？」

「多分な、今んとは何とも言えないが。」

「え〜っ！　だったらそのこと言った方がいいよ〜！」

「ちょっ！　桜木！　声がでかい！」

「はわっ！」

こちらに気づいた先生が振り向く。

「おい、その漫才コンビ+α、ちょっとうるさいぞ。」

「すいません。」

「ひそひそ話はしてもいいがうるさくするな。で、何をしゃべってたんだ？」

「いや、そのですねえ……」

「神田君が昨日校庭の隅にいる怪しげな人を見たって言ってました〜。」

……桜木、こういうときはそれを言っちゃうと色々と面倒なことになるから適当にごまかせよ……

「マジか？　神田、どうなんだ？」

「……たぶんそうだったと思います、はい。」

「で、どんな感じのヤツだった？」

「遠くてよく見えませんでした。」

「……そうかい、本当に『見た』だけかよ。それじゃあ野グソ野郎を捕まえる手がかりにはなんねえじゃねーか。」

「なんかスイマセン……」

「別にお前が謝ることじゃないだろう？　……さて、なんかめんどくさくなったらしきリもいいからこの後は雑談でもするか。」

『うっしゅ！』

何人かが歓声をあげる。

「さて、この中で二中から来たヤツはどんぐらい居るんだ？」

クラスの四分の一ほどの生徒が手を挙げる。神田の隣の級長も二中出身らしい。

「お前ら二年の小金井ってヤツを知ってるか？」

俺と神田と桜木は三人揃って吹き出しそうになった。

「まあアイツもある意味で有名人だからそのほかのヤツでも知ってるかもしれないな。でよ、アイツがまた伝説を創りやがった。なんだと思う？」

誰も答えないのを見て、先生は後を続ける。

「アイツよう、駅弁の牛タン弁当買うためだけに学校サボって、しかも行きも帰りも鈍行で仙台まで日帰りで行ってきやがった。ご丁寧にもその次の日は昼メシにその弁当を食ってたらしい。」

……クラス中が静まり返る。おそらく大半の生徒が何を言っているのかか理解し切れていないだろう。

「……せんせーい、それマジですか？」

神田が意を決して質問を投げかける。

「マジだよ。まあ小金井だしな、何やっても許されるようなもんだし。」

別の生徒が恐る恐るしゃべりだす。

「……先生、どうしてその人は何やっても許されるんですか？」

「なに、簡単だよ。アイツがムチャクチャ頭良いからだ。」

「……なんスカ……それ……」

一番前でいつも寝ている生徒が珍しく起き上がって呻く。先生はそいつが寝ていたことを気に留める様子も無く話し続ける。

「んー、アイツ全国模試であっさり一桁をたたき出すようなヤツだからなく、別に単位さえ足りてれば進級させといて損はないだろう？

っていう話だ。それにどうせ籠原にこっぴどく怒られるのは分かっているし、こっちが一々説教たれても全く効果無いしな、まあほっといいていいんじゃない？ 面倒だし。……っていうのが教師側の見

解だ。あ、お前ら籠原って言って分かるか？」

先程二中出身だと手を挙げた生徒のうち、男子生徒が全員頭を抱え込む。なぜか女子生徒が数名混じっているのが気がかりだが……

「あ？ なんだ、二中出身の男は全員撃沈済みか？」

撃沈済み？ それでいくと今頭を抱え込んでいる女子って……ま……さか……

「あのー、今度はいったい何が？」

「あー、詳しいことは二中出身者に聞いてみてくれ。それと俺もいろんな方向で名を上げたい！ってやつは頑張れよ。ま、あんまりアレな方向は勘弁してくれよな？ お前らがなんかやらかすと文句言われるのは俺だから。……そういえばよう、こないだ出た新作ゲームで……」

とやってるうちに雑談タイム（ではなく授業）が終了する。

「よーし、次は化学だったっけな？」

神田が伸びをしながら聞いてくる。

「だな、確か今日は実験だったはずだぞ。」

「実験か……揺れるフラスコ泡立つ液体謎の装置に爆発フィーバー！ ボンバイエ！ アーフロー！」

「それをやったらお巡りさんが飛んで来るぞ？」

「気にしたら負けだ！ 1・2・3ダァー！」

「微妙に古い！ そして商標登録済みだ！」

「2・2・3ダァー！」

「それは多分登録されてない！？」

「2・2・3ダァーフルキメ○デス！」

「新商品創造だど！？ しかも元ネタもう売ってないぞ！」

「3・2・3ダァー！」

「さらに数字が増えただど！？」

「4・2・3ダァーフロー！」

「……俺ではもう止められん！ 桜木、なんか言ってやってくれ！」

「いえーい！ あーふーろー！」

「お前もか！？」

「アーフロー！」

「あーふーろー！」

「落ち着けお前ら！」

『低燃費ー低燃費ー低燃びっぴっぴー、低燃費ー低燃費ー低燃びっぴっぴー』

「新たなネタが始まっているだど!？」

「は○じ〜!」

「く○ら〜!」

「ク○ラが立った〜! ……じゃない! くそっ! 俺まで巻き込まれるとこだった!」

「は○じ〜、おじいさんのハゲ抜いてあげなかったの〜?」

「禿げは抜くもんじゃない!」

「は○じ〜、おじいさんのハ○毛抜いてあげなかったの〜?」

「ちゃっかり言い直しただど!？」

「抜いてあげなかったかも〜」

「お前らもうア○ムの山に帰れ!！」

「おじいさ〜ん!」

「感動の再開じゃないんだよ!！」

「ハ○毛抜いてあげられなくてごめんね〜」

「一気に台無しだど!？」

「ぺ〜○〜!」

「新たにペー○ー登場かよ! ……これは俺が落ち着かなきゃダメだ! 落ち着け俺落ち着け俺落ち着け俺……」

「手のひらに人人人って書いて飲み込むといいらしいよ、ペー○ー。」

「よし、ひとひとひと……違う! しかも俺はペー○ーじゃない!とにかく早く実験室に行くぞ!」

テンションがすごいことになっている神田と桜木を連れて実験室へと向かう。しかし、実験室の入り口の所でなにやら人だかりが出来ていた。

「おい、メガネ、何が起きてるんだ?」

「……まずは名字だけでいいから覚えてくれ。で、何が起きているかについてだが、どうも実験室に入れないらしい。」

「なんでだよ?」

「先生がそろそろ説明してくれるらしいから聞けば分かるだろう。」

「はあ……」

化学の目黒先生が生徒の群れの前に出てきて説明をする。

「えー、諸君、実は今化学実験室内にどこの誰が送り込んだのか大体の想像はつくんだが大量のゴキブリが居る。というわけで今日の実験は次回行う。ゴキの駆除が終わるまでは勇気ある者も含めて立ち入り禁止だ。ただし我こそは、という者は名乗り出る。もれなく全部のゴキブリを駆除し終わるまで実験室内に幽閉してやる。まあその間の授業は出席したことにおいてやるからな。」
どこかの誰かが送り込んだって……なんじゃそりや？

………

「よーし、今日はここまで！ 宿題忘れんなよー、もし忘れたら……そんな時に思いついたことをやらせるからな。」

四時間目の上野先生の数学の授業が終わった。

「やれやれ、なんかかなり退屈だったな……」

「うおー！ メッチャ眠かったぞ！」

「ふえ？ 授業終わったの？」

「……寝てたのかよ……桜木……」

「あははー、だって眠かったんだもん。」

「話聞いてないとテストの時に地獄を見るぞ？」

「大丈夫！ そのときは秋乃先輩に頼んで教えてもらおうから！」

「なっ……なんだと！」

「ならば代々木、オレたちは小金井さんに泣きついてみよう！」

「……教えてくれるのかよ……」

「おっ、そうだ、代々木、桜木さん、先輩たちとメシ食いに行かないか？」

「メシ？ 神田、弁当持ちだろ？」

「だから弁当持って行くぞ。」

「へいへい……」

そして俺たちは小金井さんと籠原先輩のいる二年A組の教室に向かった。

教室の外から軽く中を窺ってみるが、二人とも姿が見えない。仕方ないので通りがかった先輩に聞いてみる。

「すみません。」

「ん？ なんだい？」

「あの一、小金井さんっていますか？」

「小金井？ 今日朝から来てたはずだけど、ちょっと待っててくれ……………おい、小金井！ ……スマン、アイツ今寝てるわ。」

「……………そうですか、ありがとうございました。」

「あれ？ みんなどうしたの？」

「はい？」

ちやうど籠原先輩が教室に戻ってきたようだ。

「えーとですね、神田がせっかくなんでみんなでお昼を食べようと言い出したんで来てみたんですけど。」

「そう？ それならちやうどいいわ。そうしましょうか。ところで小金井くんは？」

「あー、……………さっき聞いてみたら寝てるって言われまして……………」

「……………そう、わかったわ。起こしてくるからちよっと待ってて。」

そう言っていると籠原先輩は教室の中へ入って行き、ちやうど窓際の後ろから二番目の席で寝ていた小金井さんの方へ歩いていった。

「……………小金井くん、起きて。」

「ぐーぐーすーすーぐーすかぴー。」

「……………起きなさい！！！」

籠原先輩はすばやく小金井さんの隣の席に置いてあった参考書のような青い本で小金井さんの頭を引っぱたいた。パンツ！ と乾いた、しかし芯のある音が廊下にまで響く。

「痛いっ！ なにするのさ！」

小金井さん、即座に反応。

「代々木君たちが来てるのよ。一緒にお昼を食べたいって言うてる

から来て。」

「そうなの？ 了解、すぐ行く。」

小金井さんはすばやく席を立つとあっという間に弁当袋を持って廊下に出てきた。

「やつほー、ゴメンゴメン、なんか春先って眠くってさ。」

……アレ、痛くなかったのか？

「あなたはいつも眠い眠い言ってるじゃない。」
続けて籠原先輩もこちらにやってくる。

「それじゃあ屋上ででも食べようか。」

先に歩き出した小金井さんたちに続いて俺たちが教室の前から立ち去ろうとした時、教室の中にいる先輩たちの会話が耳に飛び込んできた。

『あちゃー、またか。』

『籠原さんって小金井君に対してはけっこう過激だよね……』

『小金井もよくあれで怒らないよな……』

『まあ小金井だしな……アイツ全然怒らないし、不機嫌なのは見たことあるけどキレたところは見たことねえ。』

『籠原さん、今回は青チャートか……そのうち広辞苑になるんじゃないか？』

『ありえそうなところが怖いな……』

『だがああいふ籠原さんも萌えだ！』

『あれっ？ おまえってこないだコクって撃沈したんじゃないっけ？』

『そうだよ！ 悪いか！？』

『いや、スマン、ちょっと思い出してな。』

『えー！ 笠幡君、籠原さんに告白したの！？』

『マジで！？ マジで！？』

『ちくしょー！ なんでみんな寄ってくるんだ！？』

……とりあえずなんか色々あるらしいことは分かったので、急いで小金井さんたちの後を追うことにする。

屋上は誰も居らず、春の陽気をたっぷりと含んだ風が頬を撫でる。周囲一帯が住宅地であるこの学校は屋上からの見晴らしが抜群である。少し遠くに駅前のビル群が見え、遙か彼方には幽かに東京の高層ビル群も見ることが出来る。こんないい場所に先客が全くいないのが不思議でもあるが。

「メチャクチャ眺めがいいっすね!」

「うーん、そうだけど春だから遠くは霞んでるね。冬はもっと遠くまで、それこそ富士山も見えるよ?」

「でも冬にこんなところに来るんですか?」

「来るよ?」

「小金井くんだけよ、そんな季節にこんなところに来るのは、しかも授業をサボって。」

「うーん、でも冬の眺めは凄いいんだよ?」

「それを連れ戻しに来るのは私なんだから自重してね?」

「……放つといってくれてもいいのに……」

「なにか?」

「いや別に。でもさ、北風に身を任せながらきれいな景色を見てるといろんな疲れがとれるよ?」

「それはコートに身を包んでるあなたはいいかもしれないけれど私は良くないわ。」

「冬になったら籠原さんも毎日コート着て来てるんだから呼び戻す時も着てくればいいじゃない?」

「……それをやると私まで戻って来れなくなっちゃうからやらないのよ。」

「……あのー、そろそろ食べませんか?」

「あ、そうね。………いただきます。」

『いただきます』

全員弁当持参、そして始まるおかずの交換会、もはや定番なのか?

「秋乃先輩、その玉子焼きくださーい!」

「そんな慌てなくてもあげるわよ。……はい、どうぞ。」

「わーい、それじゃあお礼にタコさんウィンナーあげま〜す！」

「はい、ありがとう。」

「そういえばさあ、化学実験室に大量のゴキが送り込まれたらしいね。」

「……食事中よ、小金井くん。」

「……だね、で、この話を続けるのが嫌な人いる？　いないね。」

「……もう少し話題を選べないのかしら？」

「でさあ、それで一年生の実験が全部潰れちゃったらしいんだよね。」

「それ俺らのクラスですよ。」

「そうなの？　そりゃまたご愁傷様、でね、そのゴキの駆除方法なんだけどさあ、換気扇から殺虫剤を送り込んで一網打尽にするんだってさ。」

「……それはいいんですけど、結局ゴキブリを送り込んだのって誰なんスカ？」

「んー、たぶん、というか間違いなく裏科学部だね。最近ゴキの育成してるって言ってたから。」

「……裏科学部ですか……」

「うん、なんでも実験室を貸してもらえなかったから、ちょうど増やしたはいいものの使い道が無くって困りまくってたゴキを仕返し代わりに送り込んでやれ〜！　……ってなったって言ってた。」

「……そもそも実験室で何をしようとしたの？」

「えーっとね、新人教育を兼ねて手始めにTNTを合成しようとしてたんだって。」

「……それで、作った後はどうするつもりだったのかしら？」

「いつも通り川原でアフロ〜、じゃないの？」

「すいません、アフロ〜、ってどういう意味ですか？」

「あはははは、もれなく詳しいことは言えないけど簡単に言っちゃえば『チュド〜ン』だとか『ドッカ〜ン』みたいな感じ？」

「……ヤバイっスよね……それ……」

「気にしたら負けだよ？」

「普通気にしますって！」

「K r, I, N b, I r, S r, H f, I, T c, A l, R n, A u, M n, A g, K, E u！」

「はい？」

「……一見ただの元素記号の羅列だけど、大文字だけ読んでみれば意味が分かると思うわ……」

「K I N I S H I T A R A M A K E? ……気にしたら負け!？」

「正解! そしてさすが籠原さん、一発で読み解くとは!」

「……この間も同じことをやってたけど？」

「あれ? そうだったっけ? 覚えてないや。」

「やってみました。……それにしてもHにハフニウムをもってくるなんて……小金井くんらしいわね。」

「それは褒めてるのかな？」

「ひねくれてるって言ってるのよ。」

「ひどいなあ! 別に水素とかヘリウムでも良かったんだけどそれだと面白くないじゃん？」

「そのままでも十分面白くないわ。」

「なんかもうちょっと気の利いたことは言えないの？」

「その台詞をそっくりそのままお返しするわ。」

「利子は5%です!」

「……………怒らせたいの?」

「ごめんなさい。ちよつと調子に乗ってました。」

「……あのー、秋乃先輩、何がなんだかさっぱり分からないんですけど……」

「えっ? 元素記号って習わなかった?」

「……きれいさっぱり忘れちゃいました〜!」

「……一応聞いておくわね? 春香ちゃんは文系? 理系?」

「……考えてないです……」

「……神田君は?」

「……何にも考えてなかったっす！」

「……代々木君？」

「……神田に同じくです。」

「………まだ焦って決める必要はないけれど、来年までには決めておいた方がいいわよ？」

「で、籠原先輩はどっちなんですか？」

「理系よ。」

「……なんかイメージでは文系って感じなんですけどね……」

「そうかしら？」

「小金井さんはどっちなんスか？」

「小金井さんは見るからに理系じゃないか？　どうなんですか、小金井さん？　……あれ？」

『あはは、ちようちよ、ちようちよ』

みると小金井さんはいつの間にか席を離れて向こうで蝶々と戯れている。

「………籠原先輩、小金井さんっていつもあんな感じなんですか？」

「そうね、かなりアレに近いものがあるわね……」

「……秋乃先輩、そろそろお昼休みが終わっちゃうんですけど……」

「ほんとだ……小金井くん！　お弁当片付けなさい！　もうすぐお昼休み終わるわよ！」

『そのままにしろって、五時間目はサボるから』

「……なんですって！　いいからこっちに来なさい！！」

籠原先輩は素早く立ち上がると小金井さんの方へ歩いてゆく。

「……籠原先輩、こええ……」

「……同感だな……」

『ちようちよ、ちよう……いたいいたい！　耳を引っ張らないで！！』

『いいから早くお弁当を片付けて！　授業に遅れるわよ？』
『間に合わせる気は毛頭ない！』

『……いいかげんにしなさい!!!!!!』

……籠原先輩が完全に噴火モードになったので、小金井さんは渋々戻ってきた。

「あーあ……せっかく蝶々と遊んでたのに……」

「片付けたら早く教室に戻るわよ、そういえば春香ちゃんたち次の授業は？」

「えーっと、たしか音楽です。」

「教室移動があるなら急いだ方がいいわ。まあ十分もあれば十分だと思うけれど。」

「十分あったら十分なのは当然だと思うんですけど……?」

「? それは時と場合にもよるでしょ? 例えばここから大阪へはどう頑張っても十分じゃ足りないわ。」

「え? 何言ってるんですか?」

「えっ?」

「あっはっは、読み間違いだね。籠原さんは『じゅっぷん』と『じゅうぶん』、桜木さんはどっちも『じゅっぷん』って読めばさっきからの会話が意味を持つよ?」

「とっ……とにかく早く行きましょ!」

やや顔を赤らめてみんなに先立って校舎内へ戻ってゆく。

「音楽か、辻堂先生面白いでしょ?」

「……まあそうですね、たまによくわからないことを言ってますけど……」

「ふふふ、それはあの先生が『バイ』だっていうのを知っておけば色々と思えると思うよ?」

「バイ?」

「バイセクシャルのこと。手取り早く言っちゃうと『男でも女でもどっちでもイけるぜい!』っていう人のこと。」

「………神田、お前は知ってたか?」

「あの先生がそれっぽいっていうのには薄々気づいてたぞ?」
念のために補足、音楽の辻堂先生は女性である。初回の授業で言っ

た『このクラスにはおいしそうな子が多いわね♪』という言葉は長らく謎の言葉として扱われてきたが、今日やっと意味が分かった……なぜか背筋に悪寒が走る……

そして音楽室、辻堂先生がやってきて授業が始まる。

「やつほー、みんな元気だった？　そして今日はビッグニュースがあるのよー！」

相変わらず変なテンションで授業を始めるこの先生、授業自体は面白いのだが、が、もう少しでいいから電波な言動を何とかして欲しいところである。

「ななんとなんと、やつとピアニストの調達に成功しましたー！　やったね、つっちゃん！」

補足、つっちゃんとは辻堂先生のニックネームである。本人がそう呼んで欲しいと言っているのです、その名前で呼ぶ生徒は多い。しかし自分で自分を呼ぶときに使うのは如何なものかと思うのだが……

「と、いうわけで今日は生演奏で鑑賞授業です。でも困ったことにまだ本日のゲストが来てないのよねん……」

ちょうどその時、音楽室のドアが開いて、誰かが入ってきた。誰だろうと思ってそちらを見た先には……

「すいませーん、辻堂センセ、何の御用でしょう？」

……小金井さん登場！

「あー、やつときたー。もう、遅いじゃない。」

「……これでも急いできたんですけどねえ、それより何の用事ですか？」

「ああ、それぞれ！　一年生の鑑賞授業をやるからピアノを弾いてちょうだい。」

「……何を弾けど？」

「何でもいいけど、さすらい人はダメよー」

「何故？」

「さすらい人は長いから、他のをお願いー」

「……じゃあ英雄ポロネーズでいいですか？」

「グッジョブよく、じゃあ後は好きなようにやっていいわよく」

「……それじゃあみんな適当にピアノの周りに集まってももらえるかな？ 椅子は好きなようにすればいいけどピアノには寄りかからないでね？」

とりあえず手ぶらで奏者用のイスの斜め後ろに立つことにする。

「あれ？ そういえば代々木たちのクラスだったつけ。」

こちらに気づいた小金井さんがしゃべりかけてくる。

「そうですね、それより自分の席で座って聴くんじゃないんですか？」

「だってそれをやると寝る人が出てくるでしょ？ それに今回は『見て楽しむ』が一番大事だし。」

「『見て』楽しむんですか？」

「そ、だから英雄ポロネーズを弾くんだけど、……まあ見てればどうしてだか分かると思うよ？」

それだけいうと、小金井さんはイスに座る。俺の横には神田が椅子を持ってやってきた。こっそり背もたれに体を預けさせて貰おう。

「ねえ、代々木君、確か秋乃先輩が小金井さんがピアノ上手いって言ってたよね？」

「そういえばそうだったつけ？」

「んじゃ始めるよく、静かにしててね。」

音楽室が沈黙に包まれ、緊張が最高に達したその時を見計らって小金井さんが演奏を始める。ピアノの鍵盤の上を小金井さんの両手が滑るように動いたり、飛び跳ねていたりと忙しく動き回っている。なんとなく『見て楽しむ』といった意味が分かった気がした。なんというか……

「……すげえ……」

隣で神田が呟く。先程から似たような声がちらほら聞こえてくるが、みんなも同じようなことを考えているのだろう。んでもって、迫力が凄く、何よりも格好いい。思わず『こんな風に弾けたらな……』

などと思ってしまう。

演奏が終わると、誰とも無く拍手が始まった。それが収まると、辻堂先生が口を開く。

「ブラボ〜！ やっぱり上手いわね、そして小金井くん、この後の授業で弾くものは覚えてるかしら？」

「……今日は籠原さんの番じゃありませんでした？」

「違うわよ、本当ならここで『よっしゃ〜！ 罰ゲーム！ さあて何をしてもらおうかしら〜』 ……って言いたいところなんだけど、残念ながらあなたあのレパトリーに入ってるのよね〜」

「……で、何を弾くんですしたっけ？」

「『木枯らしのエチュード』よ。」

「……またそんな無茶をおっしゃる。」

「去年の授業の締めには『さすらい人幻想曲』を弾いてみんなを驚愕させたあなたに逃げ場はないわよ〜。特にあの終楽章、あんなテンポで弾くとは思ってなかったわ〜、よく指と腕が壊れなかったわね〜」

「……はあ……」

「じゃあその調子でおいしそうな……じゃなくてかわいい一年生たちに『木枯らし』も聞かせてあげてね〜」

今さりげなく『おいしそう』とか言ったぞ！ この先生！

「……今弾くんですか……」

「そのとおり！ なんて言ってもやらせるわよ〜」

「はあ……ほれじゃま『木枯らしのエチュード』逝きますか〜」

……字が逝っている……

再び演奏を始める。さっきの曲とはうって変わって暗く静かに始まる。このまま続いていくのか？ と思った直後に猛烈な曲が始まった。左手はポンポン跳ぶし、右手に至っては何でこんなに指が回るのが聞いてみたいほど鍵盤の上を駆け巡っている。

最後まで壮絶な終わり方で締めくくると、先生が解説を始めた。

「え〜、さっきの曲はですね〜、『ピアノの詩人』と呼ばれたショ

パンの〜」

先生が解説をしている間、小金井さんは勝手に何かの曲を弾いている。……あれ？ どっかで聞いたことがあるような……

「小金井くん、ちゃっかりCM始めないでもらえるかしら〜？」

「あ、やっぱり気づきました？」

CM？ そういえばそんな気が……

「ありがとう、いい薬です！」

クラスの誰かが叫んでピンと来た、そうだ、アレだ！

「せいかうい、ちなみにシヨパン・Prelude Op. 28—
7・胃腸調……もといイ長調でした。」

「小金井さん、ダジャレですか……？」

「ん〜、ダジャレだと思うし実際にイ長調と胃腸をかけて使われたらしいよ？」

「……どこでそんな知識を……」

「雑学は素晴らしい！ 覚えようと思わなくても脳みそが勝手に覚えてくれる！」

「……さいでっかい……」

「あら？ えーっと……ゴメン、その君、名前なんだっけ？」

「……代々木です。」

「そうそう、代々木君。キミ、小金井くんと知り合いなのかしらん？」

「まあ一応先輩ですから……」

「それならちょうどいいわ〜、今度から小金井くんに来てもらう日は連れてきてちょうだい〜、ほっとくと多分来ないから〜。」

「……はあ、わかりました……？」

「は〜い、それじゃあ授業再開よ〜」

そして授業が終わった時、挨拶が済むのと同時に教室に入ってきた人がいた。

「……お……お姉さま〜！」

神田が速攻で反応する。

「神田君、その呼び方は止めてほしいって何度言ったら分かるのかしら？」

「……籠原先輩、まだ五時間目の終わりのチャイム鳴ってませんよね？」

「ええ、ちょうど授業の終わりに小テストがあったから手早く終わらせてきたの。だから心配しなくても大丈夫よ。」

「手早くって、どのくらいですか？」

桜木もやってきた。

「試験時間十五分のところを十分で、よ。」

「……早いですか？ それ？」

「さあ、小金井くんなら五分ぐらいで終わらせるんじゃないかしら？」

そういうと籠原先輩はまだピアノの前に座っている小金井さんの方へ歩いていった。

「結局用事ってなんだったの？」

「んー、鑑賞授業をするからピアノ弾いてー、ってそんな感じ。」

「あらま、籠原さん、早いわね。」

「あ、こんにちは、辻堂先生。」

「ちようどいいから今のうちに伝えちゃうわね。来週のこの時間、今度はあなたがピアノを弾いてちようだい？」

「えっ？ 私がですか？」

「そうよー、曲は何でもいいけどお得意のスケルツォ第二番は後々のためにとっておくといいかもねー。」

「……わかりました。曲は考えておきます。」

「ああん……籠原さんがピアノを弾いてる姿を想像しただけでロマンティックが止まらないわー！」

……辻堂先生はよく解らないことを言いながらクネクネと身悶えている……… それを見て小金井さんも籠原先輩も見ながらにヒいている……… まあアレは誰でもヒくな、うん。

「そういえば籠原先輩もピアノ弾けるんスよね？」

神田が雰囲気を変えようとしたのか、会話の口火を切る。

「ええ、一応ね。」

「あらん？ 一応だなんて謙遜する必要はないわよ？」

とりあえず正常に戻ったらしい辻堂先生。

「折角だから何か弾く？」

「……いいえ、遠慮しておくわ。」

「オレ籠原先輩の弾くピアノ聴いてみたいっス！」

「わたしもわたしも！」

……これは籠原先輩が弾かなきゃいけない空気にしようとしてるな

……

「ね、代々木君も聴いてみたいよね？」

「……だな。」

「と、いうわけで籠原さん、弾いてくれるよね？」

「……分かったわ、弾くわよ……でも何を弾けばいいのかしら？」

「『マゼツパ』なんてどう？」

「……それなら小金井くんが弾けばいいじゃない？」

「無理だよ、聴いたことしかないし、かなり難しいし。」

「……小金井くんが弾けないものをどうして私が弾けるのよ……それにあなたに大概の曲を『難しい』って切り捨てる権利はないわ。」

「なんかひどいなあ……というかなんでさ？」

「キーワードは『アルカン』ね。」

「……そうきたか……」

「納得した？ それで、結局私は何を弾けばいいのかしら？」

「『黒鍵のエチュード』なんてどう？」

「それじゃあそうするわ。」

『おいしい、籠原さまがピアノを弾くぞ』

どこかの誰かが突如そんなことを叫ぶ。すると音楽室中に雄叫びがこだました。

「……籠原先輩、コレはいい……」

「気にしないで始めるわよ。」

冒頭から右手が凄いことになっている気がするが、明るい、楽しげな曲だ。籠原先輩も楽しげなほほえみをうかべて弾いている。

あつという間に終わってしまったが、それでも籠原先輩が上手い、というのは分かった。まあ、鳴り響く拍手に混じって『ぞっこんじや〜』だの『ほほえんで〜』だのという声が混じっているのが気がかりだが……

「ああん、やっぱりピアノ弾いてる時の籠原さんはとってもキレイよ〜、もう食べちゃいたいぐらい〜!」

「……………」

一番暴走している人が近くにいたよ……籠原先輩も返事に困ってるし……

「さあ、私は一曲弾いたんだから小金井くんも一曲弾いて?」

「え? 僕も弾くの? でも何を?」

「マゼツパ」

「……さりげなく怒ってない?」

「そんなことはないと思うわ。」

「……いや、絶対怒ってるでしょ! 神田、どう思う?」

「お姉さま〜!」

「神田君、いいかげんにしなさい。」

「……小金井さん、お姉さまメチャクチャ怒ってますよ……」

「今のは九割方君が原因だと思うよ?」

「そうっスか……」

「小金井くん、それじゃあ『さすらい人幻想曲』の終楽章を弾いてちょうだい。」

「……絶対にいじめる気満々だね? 僕このあと『木枯らし』弾かなきゃいけないんだけど?」

「さあ、何のことかしら?」

「……さっき『英雄ポロネーズ』と『木枯らし』弾いたんだけど?」

「『さすらい人』が全楽章通して弾けたんだからそれぐらい余裕でしょ？」

「……………はあ、わかったよ、弾くよ、弾けば機嫌を直してくれるんだよね？」

「さあ、何のことかしら？」

「……………とことんいじめる気だなあ……………」

文句を言いながらもピアノに向かう小金井さん、そしてその曲を弾き始めた。

「……………すげえ……………」

「いったい手はどうなってんだ？」

「ね、だから去年みんなを驚愕させたっていったでしょ？」

確かにこれは驚くだろう、両手が両手ともなんだか凄いことになっていた。個人的には最後の辺りがとつてもクレイジー。

「オレには残像が見えた……………」

「わたしも……………」

「さあ、小金井くん、その調子で『幻想ポロネーズ』もいってみましょ？」

「……………ごめんなさい、もう許して……………それにそんな時間ないし……………」
ふっと時計に目をやるともうすぐ休み時間が終わる時間だった。気がつけば上級生、おそらくは小金井さんたちのクラスメートが来ている。

「やべっ！ 神田、桜木、戻ろうぜ！」

「ぬおっ！ ヤバイ！」

「ホントだ、急ごうよ！」

俺たちは慌てて音楽室を後にした。

その日の放課後……………

「いやー、それにしても小金井さんが来るとは思ってなかったっス！」

「僕も予想外だよ、上野チャンに『辻堂先生が呼んでるぞ』って言われて行ったらいきなり『ピアノを弾け！』だなんてさー、前もって知らせてくれればいいのにね。」

「でも小金井さんメツチャかつこよかったっスよ！ あんなに上手いだなんて知らなかったっス！」

「そういえば籠原先輩はどうしたんですか？」

「んー、たしか今日は掃除当番だったかな？」

「そういえば小金井さんが掃除当番で遅れたことってありましたっけ？」

「どうだろう？ 無いかも。」

「……なぜ？」

「掃除当番の日に居なかったりだとか、あとは宿題の答えを教える代わりに当番を代わってもらったりしてるから。」

「……それって先生は何も言わないんですか？」

「なんか言ってたような気もするけど気にしない。」

「……………そうですか。」

『みんな、遅れてごめんなさい。』

ちようど籠原先輩がやってきた。

「今日は掃除当番だったから遅れたわ。」

「おつかれさまです。」

「それと小金井くん、平塚君が呼んでたわ、教室で待ってるから来てほしいそうよ。」

「ん？ 平塚が？ わかった、ちよつと行ってくるからヨロシク。」
「行つてらっしゃい。」

小金井さんが部室を出て行くと、籠原先輩が話し始めた。

「ふう、それにしても私までピアノを弾く羽目になるなんて思ってもみなかったわ……………」

「でもあの時弾いてた…………えーっと、コッカンのナントカでしたっ

け？ メツチャ上手かったっスよ？」

「……神田、さりげなくヒワイだ。」

「そう言いつつ『卑猥』をカタカナにする代々木も中々のものだな！」

「ぐおっ！ こんな時に変換ミスかよ！ イメージ低下確定フラグが！！！」

「……最低ね……まあ変換ミスってことにしておいてあげるわ……でも小金井くんの演奏を聴いた後だとちょっと聴き劣りがしたんじゃないかしら？」

「そんなことないですよー！」

「春香ちゃん、素直に答えてみて？」

「うー、それは確かに小金井先輩の方が上手かったんですけど……それとは違ってなんていうか……こう、秋乃先輩は包み込むみたいな感じ？ で、小金井先輩はどっちかっていうとなんとなく無表情というか……」

「そう……なんかこう言ったら悪いけど、意外とちゃんと聴いてたのね。」

「うーん、そんなのじゃなくって本当に聴いたそのまんまを言っただけなんですけど……」

「そんなことないわ、それと小金井くんの演奏は無表情に思えるけど、そうじゃなくてあれはいろんな感情を表に出さないからああなってるのよ。」

「……普通ピアノ弾く人ってなんか気持ちを込めてだのなんだの言ってる気がするんですけど？」

「……まあ小金井くんはひねくれ者だし、あんまり声高に自己主張されてもね……っていうのはあるけどね……」

「……いいんですか？ そんなこと言っちゃって？」

「小金井くんがひねくれ者なのは本当でしょ？」

「……否定できないですね……」

「それに感情をあんまり表に出さないのは小金井くんの性格みたい

なものだし。」

「……どっちかって言うて感情のままに行動してる気がするんですけど……？」

「そう見えても裏で何を考えてるのかは全然分からないわよ？　だから行動が全く読めなくて困ってるんだけど……」

「そうっスか？　オレはなんとなく読めるっスよ？」

「……神田君にもひねくれ者になる素質があるのかしら？」

「さりげなく酷いことを言いますね……それって暗に神田が変人だっって言ってるようなもんじゃないですか……」

「そうね、少なくとも神田君がたまにでも私のことを『お姉さま』だなんて呼ぶうちはそう見ておくわ。」

「酷いっス！　お姉さま！」

「……神田、お前はバカか？」

「……！　しまった！　ついつい言ってしまったっス、お姉さま！」

「……確信犯だな、これは……」

「……神田君？　あんまりふざけると大変なことになるわよ？」

「ごめんなさいお姉さま！」

「……いいかげんにしなさい！」

「ぎゃー、お姉さまが怒ったー！」

「神田！　籠原先輩がヤバイから止めろ！」

「お姉さまー！」

「や・ば・い！　桜木！　全力で神田を止めろ！」

「わーい、秋乃お姉さまー！」

「お前ら状況を考えろ！　冗談抜きでヤバイ！」

「秋乃お姉さまー、ケーキ食べたいです！」

「……春香ちゃん？　あなたも止めてもらえるかしら？」

「ご……ごめんなさい……」

「お姉さまー」

「神田！　お前は本格的にバカだ！」

「お姉さまー」

「……もういいわ、好きにしなさい。ただし私は神田君のことを聞き分けの無いお子様だつて見ることにするから。」

「そっ……そんな目でオレを見ないでください!」

「そうやって身悶えてるお前が一番不気味だ!」

「どうやらオレにはマゾの素質があるようだ!」

「なぜそっちに話が飛ぶんだ!?」

「代々木までそんな目でオレを見るのか!?」

「そんなお前を見たら誰でもそんな目でお前を見るに決まってるだろ!」

「いやんばかんあほん!」

「……桜木……いや、待て俺、ここで桜木に振っちゃいかん……」

「神田君……さすがにちよつと気持ち悪いかも……」

「ぐはあっ! 会心の一撃だとおおお!」

「勇者は倒れた……じゃない! どこぞの国民的RPGだよ!」

「ド○クエじゃないか?」

「だろうがな!」

「勇者よ、死んでしまうとは情けない!」

「俺が勇者になつてゐるのか!?」

「お前に世界の半分をやろう、どうだ?」

「いらん! とにかくエンドレスフラグが立ちはじめてるからもう止めろ!」

『君はこれ以上話を続けてもいいし、話をするのを止めてこの場を立ち去ってもいい。』

立ち去りますか?

YES/NO

「NO! ……ってか小金井さん!? そしてそれは一部の人にしか元ネタがわからないですよ!?」

「君は遊んでみてもいいし、遊ぶことを断念して引き返してもいい。」

「世界○の迷宮! あれは名作! ……暴走が大変なことになりか

ける!？」

「ちなみに今僕が想定してるのは？だよ？」

「そうですかい！」

「……もう終わりにしなさい。それで、小金井くん、いったいどんな用事だったの？」

「んとね、シューベルトの『ます』やるからピアノやってくれない？　っていう感じ。」

「……そのほかの楽器は集まったの？」

「だから最後にピアニストを呼んだんだったさ。ちゃんとコントラバスも見つけたらしいよ？」

「……執念、ね。確か平塚君はチェロやってるんだったかしら？」

「そうそう、で、それはおいといて何であんなことになってたの？」

「……引き金を引いたのは神田です。」

「神田、何を言ったんだい？」

「お姉さまと呼んでみました。」

「……そうかい、で、籠原さんはどうして怒ったの？」

「……それよりもどうして小金井くんは私が怒ってたことを知ってるの？」

「簡単だよ。学校中に籠原さんの怒り声と代々木と神田の漫才が響き渡ってたから。」

「……マジっすか？」

「うん、もうすぐ先生が『お前らうるさい!』って説教しに来るよ?」

「……なんとかならないんスカ、小金井さん？」

「よーし、じゃあさっさと脱走しよう！」

「本当はその発想に対してコメントするべきなんでしょうけど、事態が事態だから私もそうするわ……」

そして先生が来るよりも先に俺たちは部室を脱出した。

ただし籠原先輩の一存で、生贄になった神田を置き去りにして……

第5話 (88は何の数でしょう?) (後書き)

というわけで今はここまでで筆を置かせて頂きます。

近々続きも(といってもまだ以前書いたもののストック)UPしますので乞うご期待!

……期待してくれるとうれしいです、とっても

ではまた

第6話 (休日の午後はシューベルトの調べ) (前書き)

というわけで小分けになったものです。

微妙に手を加えたような何もしてなかったような……？

例によって（くどいようですが）サブタイの○の中の言葉には深い意味はありません。

まあ、なにはともあれお楽しみください。

第6話 (休日の午後はシューベルトの調べ)

日曜日、憩いと安息の日……なのだが、俺にとってはある意味非常につまらない日でもある。以前は日曜日もそこそこ面白かったのだが、コンピューター研究部に入ってから毎日が波乱万丈すぎて（主に桜木の暴走、当然あまりよろしくない方向の出来事も含む）日曜日が『平和すぎて』つまらない。

今現在午前九時三十六分……

「ヒマだな……散歩にでも出かけるか。」

昔から特にすることが無いと散歩に出かける。まあ要はヒマつぶしだな。……え？ 高校生なら休日には女子とキャッキャウフフしてろって？ 残念ながらそんなことに付き合ってくれるヤツはいないんだな。

今日は天気もいいし豊野川の土手でも行くか……

豊野川は水川市内を流れる川で、河川敷には運動場やサイクリングロードが整備されている。俺の自宅から豊野川へは一度学校の近くを通って水川大橋の方へ歩いてゆく。川が近づくに連れて家は少なくなり、川を渡ると一気に畑などが増え、家はまばらになる。とりあえず学校の方に向かって歩いてゆくと、前をどこかで見たような人が歩いている。

「……籠原先輩ですか？」

「え？ ……あら、代々木君、こんにちは。」

「こんにちは、今日はどうしたんですか？」

「私は今日ピアノの発表会があるのよ。……それで、代々木君はどうしたの？」

「俺はひまで暇でしょうがないのでヒマつぶしにぶらついてるんですよ。」

「……『ひま』って言葉を三回も並べるなんて……よっぽど暇なのね……」

「……言われて初めて気がつきましたよ……というかなんで籠原先輩は制服なんですか？」

「うーん、一応発表会だからちゃんとした格好をしていかなきゃでしょ？ だからよ。」

「……そうなんですか。」

「そういえば多分ないと思うけど、小金井くんを見なかった？」

「小金井さんですか？ 見てないです。」

「そう、ありがとう。小金井くんも今日の発表会に来るはずなんだけど、なんとなく忘れてるんじゃないかって気がするのよね……」

「……小金井さんですからね……」

「まあいいわ、私はもう行くから、また明日ね。」

そう言って籠原先輩は駅のほうへと歩いていった。

それから二十分ほど歩いて水川大橋に着く。橋を渡って上流の方へ向かってしばらく遊歩道を歩いて行く。野球のグラウンドでは地域の少年野球チームが練習をしている。こんな休日に練習するなんて元気が良いと言いかねんと言いか……とりあえずお疲れさん、だな。土手の上の遊歩道を自転車でサイクリングを楽しんでいる人々やジョギング中のオッサンとすれ違いながら歩いてゆくと、人影もまばらな辺りに来たところで、やや広めの運動場のようなところでなにやら白衣のアヤシイ集団が何かをやっているということに気づいた。無論運動をしているわけではなさそうだ。

遠めに見ていても何をやっているのかはよくわからない。……気のせいであってほしいのだが、その集団の中で約一名どこかで見たことがあるような人物が混じっている。

「……あれ、小金井さんだよな……?」

その運動場へ降りてアヤシイ集団に近づいてゆくと、白衣の人物がこちらにやってきた。

「キミ、ここはもれなくかなり危険になる。早めに立ち去ってくれないか?」

「……いったい何をやってるんですか?」

「答えられないな、禁則事項だ。」

……ネタ、か?

『あれ、代々木か? 何やってんの?』

白衣の集団に混じっていたのはやはり小金井さんだった……

「……小金井の知り合いだったか……」

白衣の人物が戻っていく代わりに小金井さんがやってきた。

「奇遇だね、で、どうしたんだい?」

「いや……俺はヒマつぶしに散歩してたんですけど、小金井さんこそ何やってるんですか?」

「ん、裏科学部の実験に参加させてもらってるんだよ。特に今日は面白そうな実験をやってるからね。」

「……裏科学部って確か……」

「そ、まあアブナイ実験やってるけど安全管理もちゃんとやってるからあんまり気にしないこと。というより一々気にしてたらきりがないよ。」

「……で、今日はいったい何をやってるんですか?」

「えーっとね、BLEVEの実験とお茶の間レールガンの射撃実験、後はエグゾーストキャノンの試作品の試し撃ちだったかな?」

「……なんですか、それ……」

「んじゃ見てく? 口で説明するより実際に見たほうが分かり易いと思うから。」

「ついでに小金井さんは何で制服なんですか?」

「仕様。」

「はい?」

「いや、だから仕様。」

「……というと？」

「だから僕は基本的に制服なのだよ、ワトソン君。」

「俺はどこぞの名探偵の助手じゃないですよ!？」

「ラ○ホー。」

「ああ……意識が遠のいてゆく……わけないでしょう!」

『おい、小金井、もうすぐBLEVEの実験を始めるぞ!』

「はいはい! 代々木、よく見てなよ?」

「はあ……」

なにやら馬鹿でかいカセットボンベのようなものが設置されていて、その周りで白衣の人たちが忙しく動き回っている。

『準備完了! 総員退避!』

号令がかかるのと全員がそのカセットボンベライクなモノから遠ざかるように全力で移動する。

「あのー、小金井さん、これから何が始まるんですか……?」

「みれば解る楽しい実験!」

「……まともに答える気はないと……」

『点火せよ!』

やたらとデカいカセットボンベのような物の下で火が燃え始める。

……ヤバくないか?

その場にいる全員がその物体Xから五十メートルぐらいは離れてじっと見ている。

『部長! そろそろ耐圧限界です!』

双眼鏡でそのモノを見ていた人が声を上げる。

「小金井さん、あの人は何を言ってるんですか?」

「んー、双眼鏡である容器にくっついてる圧力計を見てるんじゃない? そろそろボンバイエするってことだと思うよ?」

「ボンバイエっていったい……」

次の瞬間、あのカセットボンベライクな物体が爆発した。さらにそこから火柱が上がり、ちよつとどころではなくヤバい感じになって

いる……

「これぞリアルメ○ゾーマ！」

「……いくらなんでもやりすぎでしょう！？ 小金井さん！？」

「ザ○キ！」

「ツッコむぐらいなら死んでしまえと！？」

「パ○プンテ！」

「とてつもなくおそろしいものをよびだしてしまった！？」

「それはきつと『ぼりすまん』！」

「俺はまだタイーホされたくない！」

「『メガ○テのうでわ』ならあるって言ってたよ？」

「もう死亡フラグが！？」

「大丈夫、きっと生まれ変わったら幸せになれるよ？」

「まだ死にたくない！」

「ならば『全力逃走』あるのみ！」

「それでは逃げます！」

「しかしまわりこまれてしまった！」

「なんですとっ！ ……もう終わりにしません？ ところで『メガ

○テのうでわ』があるってどういうことですか？」

「これからそれでちよつと遊ぶんだよ？」

「はい？」

「ほら、今準備中。」

小金井さんが指差す方向を見ると、もう爆発の後はキレイに片付けられていて今までカセットボンベライクな物体が置かれていた場所に、マネキン人形がセットされている。

「……今度は何をするんですか？」

「だからメガ○テのうでわの実験。」

「それと若干クレーターができてるように見えるのは気のせいですか？」

「誤差の範囲内でしょ？ そんなの。」

「……はあ……」

「……スキあり！ ほゝれっ♪」
「なっ!？」

何かが腕にはめ込まれたらしい。手首を見るとなにやら怪しげなり
ングがついている。

「……これってまさか……」

「メガ○テ！ ……ポチつとな!」

「ぎゃああああ！ ……って何も起きない？ これただの腕輪じゃ
ないんですか？」

「中身はぎつしり詰まったTNT。」

「はっ……早く外してください!」

「……なのは今マネキンについてるやつ。」

「……冗談キツイです……」

「その中身はニトログリセリン。」

「……もつとヤバくなつた!？」

「……だったら代々木は今頃あの世。」

「……心臓に非常に悪いです……」

「……正解は酸化鉄とアルミニウムの粉末、ちよろっと飛び出して
るのはマグネシウムリボン。」

「……なんなんですか？」

「じゃあそのマグネシウムリボンに着火してみる？」

「……やばそうなので止めときます。」

「ちなみに点火すると腕輪の中が三千度ぐらいになってその腕輪は
鉄パイプ製だから融けちゃうだろうね。」

「……やっぱりアブナイ物じゃないですか!」

「テルミット反応バンザイ！ それとここで渡されるものは基本的
に危険物だと思ったほうが安全だと思うよ?」

「……よく覚えておきます……」

『メガ○テのうでわ実験を始めるぞ』

「おっ、始まるよ。」

再び白衣の人たちがマネキンを中心に大きく広がる。

『3・2・1……アフロ!』

そしてマネキンが派手に爆発した。もれなく俺の目の前にマネキンの手の残骸と思われるものが降ってくる……下手なホラーよりよっぽど怖いな……

「……掛け声は『アフロ!』なんですね……」

「そっちに着目するかく、なかなか面白い考え方をしてるね。」

「目の前に降ってきたマネキンの残骸に対してどうコメントしろと!？」

「それと濃硫酸に萌えられるようになったら裏科学部の門を叩くべきだね。」

「スルーされた!？」

『それでは次はレールガンの射撃実験を行う!』

「……レールガンって……」

「と○る科学の超電磁砲。」

「超能力者は実在した!？」

「あんな人間兵器じゃないから大丈夫。砲弾速度はマッハ10だから。」

「さらに速い!？」

「めざせポ○モンマスター! ……じゃなくって対戦車砲並みの威力!」

「ゆけっ! モ○スターボール! ……じゃなくって……もはや民間レベルの実験じゃありませんって!!」

「大丈夫、今日撃つやつはそんな威力で撃ったらもれなく砲身が吹き飛ぶから。」

「……どこが『大丈夫』なんですか!？」

「万が一事故が起こってもきつと楽に死ねるんじゃない?」

「そっちの安心!？」

「生命保険は入ってるかい?」

「もう逃げます!」

「そっちに行くとレールガンの餌食になるよ?」

「じゃあこっちに!」

「しかしまわりこまれてしまった!」

「またですか!」?

「つうこんのいちげき!」

「おうさまに怒られる!」?

『3・2・1……発射!』

すさまじい轟音と共に何かが撃ち出され、川面に巨大な水柱ができる。

「……小金井さん、お願いですからもう帰してください……」

「だめだよ、これからもっと『あんぜん』で『たのしい』実験をするんだから♪」

「その『安全』と『楽しい』は絶対に一般的な意味と違います!!」
『ポテトキャノンE1J1型の射撃実験を行う。担当者はすぐに集合されたし!』

「……ポテトキャノンE1J1型って……」

「ポテトキャノンって知らない?」

「知りません。」

「子供のおもちゃに大人が本気を出したらタイヘンなことになったやつたシロモノ。」

「具体的にどう大変なことに!」?

「威力がすごい。」

「全然わからない……むしろわかりやすい!」?

「どっち?」

「分かりません!」

「百聞は一見に如かず!」

「見てけと!」?

「そのとおり、よく分かったね?」

「結局E1J1って何のことですか!」?

「E1は発射方式『ヘアスプレーを使用した爆発方式』、J1はジヤガイモのサイズ『まるまる一個』」

「意味があった!？」

『砲撃手は一行に並べ!』

バズーカにしか見えないものを持った白衣の人たちが一行に並んでそれを構える。

『撃て!』

一行に並んだバズーカのような物から何か（小金井さんの話から想像するにジャガイモ）が放たれ、日曜日の、素晴らしく晴れ渡った青空に吸い込まれて行く。

「……なんかここまでくるとむしろすがすがしいですね……」

「科学バンザイ! いやー、やっぱこうでなきゃ!」

「……俺的にはもう帰ろうって気も失せました……」

『ポテトキャノン部隊は引き続き射撃実験を続けるように。エグゾーストキャノン担当は準備を始めてくれ!』

「……あれって……消火器ですよ?」

「ピンポン! 正解! 正確には消火器『だったもの!』」

「……いろいろとアウト!」

「気にしたら負け!」

「負けた!？」

そしてその消火器『だったもの』を地面に向けて撃つ白衣の人たち。

……なんか気のせいではなければ地面に穴を掘っている気が……

……ちょっと待て! シャベルも何も無いぞ!？」

「小金井さん……なぜ地面に穴が開いていくんですか?」

「何言ってるのさ、空気圧で地面に穴を掘ってるんだよ?」

白衣の人たちの内一人が空に向かってそのナントカキャノンを構える。

『総員頭上に注意せよ! ……撃てい!』

そしてその消火器だったモノから巨大な火の玉が撃ちだされた。

「あれはいったい!？」

「多分中にガソリンを入れて撃ったんだね」

「危険すぎますって!！」

「これぞリアルメ○ゾーマ！」

「……もはや人殺しの道具にしか見えない！」

「そう見えるんだったら君はかなりキテるから早めに診てもらいな？」

「まさかの変質者扱い！？」

「代々木が一番アブナかったか……」

「そんな深刻そうな顔をしないでください！」

「冗談だよ？」

「分かりにくい！！」

「さて、今日の実験はこれで一通り終わったからもう帰っていいよ？」

「いきなり解放された！？」

「それじゃあまた明日、かな？ 多分。」

「なぜ多分！？」

「明日は学校をサボるかも？」

「……籠原先輩が怖くなるんで来てください！ ……それと今日はピアノの発表会は無いですか？」

「発表会？ うーん、……あったかも。」

「……時間は大丈夫なんですか？」

「大丈夫大丈夫、午後からだし。でも何で代々木がそのことを知ってるんだい？」

「今朝籠原先輩に会った時に『小金井さんも発表会に来る』っていう話を聞きました。」

「そうかそうか、ありがとう。それでいくとそろそろ時間がヤバイから僕はドロンするね。」

「やっぱり大丈夫じゃなかった！」

「それじゃね。」

小金井さんは白衣の集団の一番偉そうな人（おそらくは裏科学部長）になにかを手早く言うと言うと全力で土手に上がって水川大橋の方へ走り去っていった。 ……さて、俺もこんな物騒な場所からは早めに離

脱することにしよう……………

『投下〜!』

後ろの方では何やら茶色い噴水が上がっている……まさかアレがメントスコーラの実験!? 吹き上がってる液体の入っている容器はどう見ても二リットルペットボトルだし……しかも噴水の高さはかなりある……確かにアレを小金井さんがやったら籠原先輩は怒るだろうな……それより運動場の後始末ってどうするんだ?

……まあ気にしてもしょうがないことを気にするのは止めることにした。

土手道を引き返して水川大橋を渡り、今度は駅のほうへ歩いてゆく。

『おい、代々木〜!』

後ろから声をかけられる。振り向くと声の主がこちらに向かって歩いて……いや、あれでも走ってるのか!?

「ふう、はあ、やっと追いついたぞ……」

「……神田、一応聞いたくがあれは『歩いて』たんだよな?」

「何を言う! オレは全力でお前を追いかけてきたんだぞ!」

「……もちつとでいいから運動しないか?」

「無理だ! そんな時間があればいろんな物が食える!」

「食った分のカロリーはどうするんだ?」

「カロリーなんか気にしたら上手いモンは食えん!」

「なんか含蓄があるっぽく聞こえるだど!」

「にんげんだもの、み〇を。」

「いまさらそのネタの復活を狙うか!」

「このネタは永遠だろう!」

「最後に聞いたのは入学式の日だった気がするが!」

「我ら不滅のロケ〇ト団!」

「なんだかんだと聞かれたら!」

「答えてあげるが世の情け!」

「世界の破壊を防ぐため!」

「世界の平和を守るため！」

「愛と真実の悪を貫く！？」

「ラブリーチャーミーな敵役！」

「ム○シ……じゃねえ！ 乗せられた！？」

「まだまだだな、代々木君！」

「まだまだだよ！ 神田君！」

「とまあそれはさておき……なあ、代々木、今からアキバにラーメン食いに行かないか？」

「ラーメン食いになぜアキバ！？」

「あそこはラーメン激戦区だぞ！」

「だからなんだよ？」

「ハシゴするからついて来い！」

「俺はいやだ！！！」

「なぜだー！？」

「いつもお前ばっか食ってんじゃん！」

「そんなのは想定内だろ？」

「いーや、断固行かない！」

「ちえっ……つれなくなったな、代々木。中学の時は来てくれたのによ。」

「もう勘弁してくれ！」

「はっ！ まさか、代々木、お前自分だけ俺の知らない間にカノジヨつくってキャッキャウフフしてるのか！？」

「してねーよ！」

「そうか、良かったぜ……もし本当にそうだったらオレはお前をコンクリ詰めにして東京湾に沈めなきゃいけないところだったぞ。」

「彼女つくったら俺はお前に殺されるのか！？」

「抜け駆けは許さん憎！」

「憎って……なんかもう既に恨みを買ってるのか！？」

「ん？ いや、そんなはずはないだろ？」

「さっきお前さりげなく『憎』って使っただろ！」

「ただの誤植(?)だ。気にしたら負けだ。」

「気にするわい! 変なところで間違えるな! しかもさりげなく誤植って字の後に(?)ってつけたな!」

「間違えるさ、にんげんだもの、み〇を」

「なんか妙に説得力がある!」

「おおっと! いかん! そろそろ行かないとマズい! ……だがここで代々木とだべってるのも捨てがたい!」

「もういいからとっととゆけい!!」

「おうよ! さらばだ、戦友よ!」

「いつお前と戦いに出たんだ!」

「ああ、思い出す……お前と共に並んだ夏のあの日……」

「……嫌な事を思い出させてくれるな!」

「ちゅーわけで今年も行くか?」

「断る!」

「ちえっ、つれなくなっただな、代々木。」

「いーや、断じて無限ループには入らせないぞ!」

「なにっ!? 読まれていただと!」

「分からない人は『いーや、断固行かない!』辺りから読み返してくれ! そして神田、もう行け!」

「おうよ! じゃあな!」

嵐が去った……引き続き駅のほうに向かって歩いてゆく。すぐに神田を追い越すとかはもちろん誤差の範囲内な。

さて、神田よりもだいたい早く駅前に着いたわけだがこの後どうするか……とりあえずメシ食うか。

近くのファミレスに入る。席に案内され、メニューを見て食べる物を決める。……何にするかな………決定、ベタにハンバーグだな。そして呼び出しボタンを押して店員さんと呼ぶ。

「はい、ご注文はお決まりでしょうか………ってなんで代々木君がここにいろの〜!」

「はい? ……って桜木!? お前こそなんでここにいろんだ!」

「わたしはここでアルバイトしてるんだもん！」

「初めて聞いたわ!!」

「あ……とりあえず注文をとらなきゃ！ 何にするの？」

「ハンバーグ。」

「はい、それじゃあちよつと待ってね」

なんつーか客が知り合いだと一気に対応が馴れ馴れしくなるものなのか？

待つこと数分、頼んだハンバーグを桜木が運んでくる。

「はい、おまたせ！ できたてあつあつハンバーグだよ」

「ありがとな、……じゃあいただきます。」

「めしあがれ……あ、いま行きま〜す！」

桜木はどこかのテーブルの対応に行った。日曜日のお昼時とあって、家族連れなどで賑わっていて店員さんはみんな忙しそうだ。……ハンバーグを食べ終え、貰った水を飲みながら店内の様子を窺ってみるが、桜木が見当たらない。まあ休憩中なのかもしれないが。

「ありがとうございました」

会計を終えて外に出る。……さて、どこに行くか……

「つゝかま〜えた〜♪」

「ぬおあっ!？ 誰だ! ……って桜木か。お前、バイトはもういいのか？」

「うん、わたしがここで働いてるのは土曜日の午後と日曜日の午前中だけだもん。」

「……つーか桜木がここでバイトしてたなんて知らなかったぞ？」

「だってみんなにはナイショにしてるも〜ん! ……あ、代々木君も誰かに言っちゃダメだよ？」

「分かった分かった。しかしそういえば桜木の私服って初めて見るな。」

「えへへ、かわいいでしょ〜？」

「どっちかというと子供っぽい？」

「ひ……ひどい、どうしてみんな同じこと言うの!？」

「『みんな』ってだれだよ……」

「えーっとね、秋乃先輩と小金井さんとみっちゃんとあやちゃんと……」

「……全員挙げる必要はないぞ？」

「……とにかくいろんな人から言われるの！ どうして？」

「それは多分服の問題ではなく桜木自身の問題じゃないかと俺は思うぞ？」

「わたしが子供っぽいの？ ……それならなんか納得するかも……」

「納得した!？」

「それお母さんにも言われたんだもん！」

「まさかのおふくろさん登場!？」

「でもいいか、わたしはわたしだもん！」

「……自己完結かい……ま、それでいいんじゃないのか？」

「これでいいのだ♪」

「そんな旧石器時代のギャグは сенでいい！」

「むっ！ 神田君のときみたいにもっと面白いツツコミしてよー！」

「俺にはそんなものが求められていた!？」

「そういえば代々木君はこの後どうするの？」

「俺か？ 特に決まってるがないな……あえて言うなら夕方までは時間を潰そうと思ってるぐらいだな。」

「ねえ、それじゃあ一緒に買い物に行かない？」

「……荷物持ちか？」

「それをやってくれるととってもうれしいけど、そんなことはないよ」

「……まあいいか、どうせヒマだし。……で、何を買いに行くんだ？」

「いろいろかな？ お洋服とか文房具とか。」

「わかった、それじゃあ行くか……っていうかどこに買いに行くんだ？」

「駅前のお店だよ。じゃあれつつごとく！」

そして駅前のビル群の内の一つのビル、主に服や趣味の品々を取り扱っている店が集まっている建物に入ってゆく、そして洋服や小物（アクセサリーの類）といった品物を中心に扱っているお店の前に着いた。

「……俺は店の前で待ってるから、買い物が終わったら呼んでくれ。」

「えっ？　お店に入らないの？」

「……なんか入りづらい空気を感じてな……」

「そうなの？　じゃあ……えいっ！」

「ぬおっ!？」

桜木に腕をつかまれ、店の中に引きずり込まれる。

「ほら、もうお店に入っちゃったよ？」

「……強引だな……」

「だってこうしないと代々木君絶対にお店に入ってこなかったですよ？」

「多分そうだが……」

「あっ！　かわいいお洋服！」

「話を聞いてない!？」

桜木はあっという間に店の奥へと消えてゆく。……独り取り残される俺……なぜだろう、悲しくないのに涙がでるよ……

桜木を追って店の奥へと進んでゆくと、桜木はいろんな服を手にとっては首をかしげて元の場所に戻っていた。

「……何やってんだ？」

「うーん、なんかピン！　ってくる服が見つからなくて……あつ！　これなんかどう？」

自分の体に重なるように服を持ってこちらに見せてくる。

「まあ似合ってるんじゃないか？」

「じゃあこっちは？」

「それもいいと思うぞ？」

ここである事柄を思い出す。……そう、多くの場合において女性が物を買う時にはとんでもなく時間がかかるということ……しばらく後……

「……俺は疲れたぞ……」

「あはは……ごめんね、悪気はなかったんだよ？」

「……それは分かっているから心配するな……」

結局桜木が買う服を決めるのに二時間ほどかかってしまった。その間俺はひっきりなしに服を見せてくる桜木に返事を返し続けなければならなかったわけだ……

「……で、次はどこ行くんだったっけか……」

「文房具屋さんだよ」

「で、その文房具屋はどこにあるんだ？」

「この上だから大丈夫！」

「……何が大丈夫なんだ？」

「じゃあ行こう！」

「またまた話を聞いてない!？」

そして文房具屋にたどり着く。当然のことながら様々な文房具が置いてあるわけだが、その中に混じって何やらアヤシイ系のグッズも置いてあるのが気がかりだ……

「ねえねえ、代々木君、コレ見て！」

「なんだ？ ……うおっ！ なんだそりゃ!？」

桜木がこっちに見せてきた物はいわゆる指差し棒（たまにコレで黒板を指し示す教師がいる）なのだが、先っぽについているモノはどう見ても……

「……スラ○ム、だよな？」

「こんなものもあるけど？」

「スラ○ムナイトだ！」

「これなんかどう？」

「まさかのくさったし○いかよ!？」

「じゃあこれは？」

「トイレのかっぱん！ 誰だ、こんなもん考えたのは！ おもしろ
す……じゃなくってふざけすぎだろ！？」

「だってこれ『おもしろ指（？）差し棒』って書いてあるよ？」

「ちゃっかり『指』の後に『（？）』が！？」

「これなら代々木君も納得？」

「今度は東急ハ○ズの看板みたいな指がついているだと！？」

「これは『指』の後に『（？）』はついてないよ？」

「これぞ正しき『指差し棒』！ ……じゃなくって桜木は何を探し
に来てるんだ！？」

「えーっとね……あれ？ なんだったわけ？」

「まさか忘れたとおっしゃる！？」

「……忘れちゃった、てへ？」

「ここまで来たのに無駄足にしたくはないです！ 桜木さん！」

「ちょっと待って……思い出してみるから……」

「……………」

「思い出せないことを思い出そうとしてみるのだ……しかし思い
出せない！」

「諦めないでくれええええ！」

「あっ！」

「思い出したのか！？」

「あっちにピコピコハンマーがある！」

「全然関係ねえ！」

「えいっ！」

「ピコッ！ ……じゃねえ！ 桜木、売り物で遊ぶな！」

「むー、生意気な……えいっ！」

ピコピコッ！！

「二回もかよ！？」

「あっ、こっちの方が面白いかもー！」

「デンコツハンマーだど！？ 見た目がとってもデンジャラスだぞ
！？」

「うりゃー！」

ゴツン！

「ちょっと待て、それムチャクチャ痛いんだが！？」

「え？ そうなの？ ……ホントだ、ゲンコツの部分は鉄製だって
」

「まさに鉄拳！？」

「てっけんせいさーい！ えいっ！」

「ぬおっ！」

ビュオッ！！

「あーっ！ かわしたー！」

「桜木さん！ 風切音がヤバイです！」

「だってこれ意外と重いんだもん！」

「自分の手に余るものを振り回さないでくれ！！」

「そんなこと言っても……あちゃあ！」

ゴツッ！！

「痛え！ 星が見えたわ！！」

「ふう、意外と重かったー！」

「だからそれ危ないって！」

「こっちならだいじょぶそう？」

「今度はジャンボハリセン！？」

「すばあん！」

「うおっ！ 危ねえ！」

「あーっ、またよけたー！」

「俺はツッコんでもツッコまれる役じゃねえ！」

「だからこそ代々木君につっこんでみるー！」

「だから止めてくれ！」

「わかったよー、しょうがないなー」

「それをお前には言われたくない！」

「むー？」

「いや、だから早くハリセンをもとあった場所に戻してくれ……」

「……これでよし！ それじゃあシャーペン見に行こう？」

「唐突になぜ！？」

「やっとここに来た目的を思い出したんだよ？」

「いつの間に！？」

「さっきゲンコツハンマーで代々木君を叩いた時？」

「殴った方が思い出すとは画期的だな！？」

そしてシャーペンなどを扱っているコーナーに行くが、途中で途中で見た物を見るに、この店イタズラグッズとかおもしろグッズの類がやたらと充実している気がするのだが……

「ねえねえ、水にとける紙だって？」

「それって子供向けだろ！？」

「だめだなく、代々木君。子供心を忘れたらだめだよ！」

「お前の場合は子供すぎるだろ！？」

「大人もかつては子供だった、しかしそのことを覚えている大人は少ない！」

「とりあえずうろ覚えでごめんなさいって王子様に謝って来い！」

「どこの王子様？」

「星の……！」

「むりだよ、わたしは宇宙にはいけないもん！」

「素直になりすぎだ！」

「いけないの？」

「だめじゃないが……」

「みてみて！ おっきなボールペン！」

「切り替え速いよ！？」

「でもこれって筆箱に入らないよね……？」

「持ち運ぶ気満々！？」

「だってこれってちゃんと使えるんでしょ？」

「それはネタ系であって実際に使用するかはあんまり考えてないと思うんだが！？」

「どうしよう……買っちゃおうかな？」

「なんとというお金の無駄使い！」

「世の中はこういう無駄使いで回ってるんだよ？」

「桜木に世の中について語られるとは！」

「まだまだだなあ、代々木君。」

「神田に続いてお前までそんなことを！？」

「あつ、みてみて！ グニャグニャの鉛筆！」

「だからなんでお前はそうなんだ！？」

「なにが？」

「どうしてこの子は唐突に話題を変えるかね！？」

「なんかいけないの？」

「いけないの！」

「どうして？」

「こつちが話についていけないから！」

「頑張っについてきてよ！」

「無茶をおっしゃる！」

「そんな無茶じゃないよ！」

「無茶です！！」

……とまあエンドレスに近いやり取りが終わった後、無事(?)に桜木は買おうとしていた物を買い、俺たちは店を後にする。

「代々木君、ありがとね。今日はとっても楽しかったよ？」

「……俺はとにかく疲れた……」

「あはは、ふあいと！ 代々木君！」

「……お前は改善する気はないのね……」

「じゃあねー！ また明日！」

桜木と別れた後、本屋に行こうと思い、たまに神田に連れてこられるゲーセンの前を通った時、見覚えのある人物がいるのが目に留まる。

「……また小金井さんか……？」

とりあえず小金井さんであることを確認して声をかける。

「……小金井さん、なにやってんですか……」

「ん？　ありゃま、また代々木か、今日はよく会うね？」

「……そうじゃなくって……」

「見りゃわかるでしょ？　UFOキャッチャーで遊んでるんだよ？」

「……小金井さんには二次元趣味もあつたんですか？」

「違うよ、コレは取った後友達に売るんだよ？」

「確定なんですか!？」

「もうメールで予約を取り付けてあるから。」

「ちなみにいくらで？」

「取るのにかかった金額の一・五倍で。」

「意外とおいしい!？」

「……またそんなことを……」

「籠原先輩までどうしてここに!？」

「私たちは発表会の帰りなのよ。」

「で、どうしてゲーセンに？」

「小金井くんが見てくって言うからよ……」

「いや、だってさ、UFOキャッチャー見ると景品取りたくならない？」

「……私はならないわ。」

「代々木は？」

「俺は確実にふんどくられるタイプですからやりません。たまに神田がやって撃沈してるのを見ますけど……」

「そうなのか、まあ僕も景品の使い道は取った後考えるけどね。」

「またまたお金の無駄使い!？」

「代々木君、無駄使いがないと世の中は上手く回らないんだよ？」

「ほら、金は天下の回り物って言うじゃない。」

「本日二度目の世の中講義!？」

「UFOキャッチャーやる時の敵は物理法則!」

「なんか名言っぽい!？」

「さらに言うなら払い出しのタイプごと取るためのコツがある!」

「あなたはどこまで猛者なんですか!？」

「取れる仕様のやつなら三千円用意しておけば大体取れるよ？」

「取れない仕様とは!？」

「ゲーセンの　ゆるゆるアームが　許せない」

「さりげなく五・七・五調!？」

「おっしゃ!　取れた!」

「取っちゃった!!」

「よし、さて、じゃあ行こうか、籠原さん。」

「……やっど？」

「まあそんなに怒るようなことじゃないでしょ？」

「……そうだけど……」

「もう帰るんですか？」

「うんにゃ、その前に本屋に寄ってくんだよ。」

「鬼遇ですね、俺もですよ。」

「それなら一緒に行く？」

「そうします。」

「ところで字が間違ってるよ？」

「え?　……マジだ!　鬼が来た!？」

「漢字は正しく使おう!」

「そして指摘するのが遅すぎてコメントできない!」

「……いいからもう行くわよ……」

そして本屋へと向かう。

「ところで先輩たちは何を見に来たんですか？」

「楽譜だよ。代々木は？」

「特にこれといった目的は無いです。」

そういうわけで小金井さんたちについていくことにした。

「さーてと、どこだったっけな」

「何を探してるの？」

「ベートーベン、ピアノソナタNo. 15 『田園』の楽譜だよ」

「小金井くんがベートーベン?　珍しいわね。」

「いやー、ベートーベンってあんまり好きじゃなかったんだけどさ、あの曲聞いたら考えが変わったよ。」

「そう……私も小金井くんの意外な一面を見つけたわね。」

「どんな？」

「好きじゃない作曲家の曲はほとんど聴かないんだとばかり思ってたわ。」

「一応聴くだけ聴くよ？ たまにこうやっていい曲に出会えるから。」

「小金井くんにとっての『いい曲』ってなんなの？」

「『僕の』心に染みる旋律を持った曲、かな？ 多分。」

「……で、そういう曲を見つけると弾きたくなっちゃうの？」

「そうそう、やっぱり自分の手で奏でるのが一番だから。」

「で、そうやって課題曲をやらなくて自分の好きな曲を弾くわけね……」

「そうだよ、だって弾きたくもない曲を弾くなんてつまらないじゃない？」

「別に小金井くんぐらいの腕前があるんだったら何も言わないけど……少しは先生を労わってあげたら？ あんなに自分の言ったことを聞いてくれないんじゃ先生も困っちゃうわよ？」

「大丈夫、課題曲も一応こなした上で好き勝手やってるから。」

「……その結果が去年の『さすらい人幻想曲』？」

「そうだね、何でか知らないけどつつちゃんがビビりまくってたな」

「あんな大曲で難曲を弾きこなされたら誰でもそうなるわよ……いつそのこと今度は『超絶技巧練習曲』でも練習したら？」

「いま練習してるよ？ 『マゼッパ』を。」

「……相変わらずみんなの想像の斜め上を飛んでいくのね……」

「どうでもいいけどさ、『超絶技巧練習曲』って字がかっこいいと思わない？ 特に『巧』の字の辺り。」

「……どうしてそういう不思議な物の見方をするのかしら……」

「いや、字がかっこいいかって結構重要なんじゃないかな？たとえばプログラムなんかで目立つじゃん？」

「なにがどう目立つのよ……」

「他にも『即興曲』ってのもいい感じだよね？」

「……まさかそれでシューベルトの『即興曲』を全曲弾きたいって思ったの？」

「それは違うよ、あれは純粹に曲が良かったんだよ。というかもはや紙の領域だよ、あの曲の美しさは。」

「それは楽譜は紙でできてるんだから『紙』の領域？でしょうね……」

「ごめん、間違えた、神の領域だから。」

「……普通に訂正してよ……」

「めんどくさいもん。」

「こうやって書くほうがめんどくさいんじゃないの？」

「こうやって話が続いてく分にはめんどくさくない。」

「……そう、わかったわよ……」

いつも思うのだが、小金井さんと籠原先輩の掛け合いは入り込むスキがない……

「……で、籠原先輩は何を言うんですか？」

「私？ ショパンの『前奏曲集』よ。」

「……とりあえず何のことだかさっぱり……」

「聴いてみる？」

「いや、俺はクラシックはさっぱりなんでいいです……」

「そう？ やっぱり高校生でクラシックを聴く人ってそんなに多いわけではないのね……」

「……逆に籠原先輩はポピュラーなんかは聴くんですか？」

「ほとんど聞かないわね。小金井くんもそうでしょ？」

「うん、こういっちゃなんだけどあんまりきれいな曲がないから耳に毒だね。」

「……さすがにその発言は世の中のアーティストを敵に回してると

思うんですけど……」

「だってさ、エレキギターの音なんかがうるさくって旋律もイマイチだしさ、まあポピュラーなんだから歌詞で勝負、ってのもわかるんだけどせめてもうちょっときれいな旋律作ってよ……ってな感じ？　今時コード進行を先に決めて後から旋律を乗つけていくっていうのも多いらしいよ。」

「とりあえず小金井さんがポピュラーが嫌いらしいっていうのは分かりました。それと専門用語がオンパレード過ぎて何言ってるのかよく分かりません。」

「ありゃ？　別に嫌いってわけじゃ……嫌いか。　いや、でもアニソンはものによっては聞くよ？」

「なぜにアニソンは別扱い!？」

「日本の二次元は完成度が非常に高い!」

「理由がよく分かりませんし、小金井さんはアニメとか見るんですか!？」

「見ないよ、例外が二つほどあったけど。」

「ではなぜゆえ二次元について語ったんですか!？」

「いや、単に傍から見てもよくできてるなっていう話。ついでに友達にアニオタ多いし。」

「初耳です!」

「アニオタは人にもよるけど愛すべき人たちが多いよ？」

「さいでっかい!」

「まあ、今のポピュラーの有象無象の中でも本当の『名曲』の資質を持ったやつは生き残るだろうね。」

「何から生き残ると?」

「時間という名の強力なふるいから。」

「生々しい!」

「あと百年か二百年ぐらいすればそれがなんだったか解るだろうね、まあ個人的にはそんなことより二次元がどこまで進化するのかが方が気になるけどね」

「結局『そんなこと』なんですか!?!」

「そんなくだらないことでギャーギャー言っても仕方がないし。」
「今までの話を全て無に帰す発言!」

「……いいかげんに会計して帰らないの?」

「おっとっと! すっかり忘れてた! ついでに代々木に面白い物を見せてあげるよ。」

「……ヤバイものは勘弁してください……」

「心配ないよ、ここは一般人がたくさんいるから。」

「いなかったらヤバイことになる?!?」

「かもね♪」

「小金井くん? あんまり変なことを言ってる……」

「ごめんなさ〜い、さて、こっちだよ。」

小金井さんについていくと、科学系の本の置いてある本棚の一角に着いた。

「これだよ。」

「なんですかコレ……アリ○ナイ理科ノ教科書? ……………なんで
すか! この凶悪な中身は!?!」

「それこそ裏科学部の必須テキストだよ。なかなか面白そうな本で
しょ?」

「どう考えてもヤバイですって!」

「裏表紙に『分別のないお子さまの手の届くところには置かないで
ください。』って書いてあるはずだよ?」

「そういう問題じゃないです!」

「それと僕も? Aから? Cまでと『工作』全部持ってるから。」

「お願いだから実行に移さないでくださいよ!」

「大丈夫、『僕は』考えるだけだから。」

「『僕は』って!?!」

「実行に移すのは裏科学部の連中。」

「やっぱり!?!」

「彼らの目的はこの本の中身の完全習得だからね。」

「リアルマッドサイエンティスト集団!？」

「部長には僕も勝てないな、化学はガチで対決しても向こうの方が上だったからね」

「凄いかどうかよく分からない!？」

「ちなみに歴代部長は全員グリニャール反応とLAHを使った還元ができるよ?」

「意味が分かりません!」

「確かウヒヒなモノも作った事があるって言ってたな」

「さりげに法律に触れてませんか!？」

「さて、それじゃレジに行こう!」

「スルーした!？」

「科学は偉大だ! それを『危ないから』でいろいろ封印しちゃうのはもったいない! あ、でも『アブナイ人』になっちゃだめだよ? あくまで科学が大好きな一般市民でなくっちゃ。まあどうしてもって人は『マッドサイエンティスト』って称号もあるけどね?」

「……俺はもう帰ります……」

「あ、そう? それじゃあまたね」

「さよなら、気をつけて帰ってね。」

「ありがとうございます、それではまた。」

そして本屋を後にして駅前を歩いていると……

「うお、す、代々木!」

「……神田!? お前何やってんだ?」

「食べ歩きに決まってんだろ?」

「……まさかお前昼から今まで……」

「おうよ、おかげでもう食えねえよ。」

「そんなに食わんでいいわ!」

「食は明日への活力の源だ!」

「『医食同源』という言葉もあるがとりあえずお前には『食いすぎだ!』という言葉を贈っておいてやる!」

「オレは食いたいモンが食えればそれでいいのだ!」

「なんというすがすがしさ!？」

「さあ、代々木もめくるめく食の世界へ来るんだ!」

「俺はお前のように食えんから行かん!」

こうして俺のやたらと疲れた日曜日は終わったのだ……

第6話 (休日の午後はシューベルトの調べ) (後書き)

さあ、いかがでしたか？

コンピ研の面々の十人十色な休日の過ごし方、実験だったりバイトだったり食べ歩きだったり……

まあ、いつもの軽いノリでさくっとお届けしました。

それではまた近々続きをUPできればいいなと思いつつ、今回はここで筆を置かせて頂きます。

それではまた！

こんぴけん SS (思い出は舟歌とともに) (前書き)

というわけで番外編です。

今回は怒ると怖い(?)あの先輩のお話です。

やっぱり以前掲載したものの改訂版ですが、これを消化しないことにはその先も載せられないので、その辺はご勘弁ください。

ではどうぞ

こんぴげん SS (思い出は舟歌とともに)

その頃の私はある意味で非常に孤独だった。

別に二年間の中学生生活の間友達がいなかったとかそういうわけはない。『友達』はいた。しかしその人たちが『親友』であったかどうかは今から思い返しても疑わしい。

なぜかみんな話しかけてくる時に一種の『遠慮』があることが解ってしまう。きっと当の本人たちはそういう気持ちは表に出すまいとしていたのだろうが、瞳の奥にあるものは隠せない。

よく私が好きだと告白してくる人もいた。しかしいつも断っていた。

なぜか？ それはある意味で非常に単純明快、しかし非常に難解でもあった。

はつきり言って自分の容姿には自信があった。また、頭も良かった。別に私がナルシストであるとかそういうわけではない。ただ、私に話しかけてくる人の目の中に自然とそういうものを見出してしまったからだ。良家の令嬢であるわけでもなかったし、長所を鼻にかけるようなこともしていなかった。それでも相手の瞳の中にそういうものに対する気後れ、だとか憧憬、であるとかが渦巻いているのを見るとなんとなく嫌になる。『あなたとは生きている世界が違う』と顔に書いてあればそれが上から見ているのか下から見ているのかに関わらずいい気がする人はいないだろう。それと似たようなものだ。とにかく会う人話す人からそのように見られていたせいで、その頃の私はかなり人付き合いを鬱陶しがっていた。

……いつまでも愚痴を垂れていてもしょうがない。この話の目的は全く別のところにあるのだから。

私の、世界の見方が180度変わった出来事、それをこれから話
していきたいと思います。

中学生として過ごしてきて三年目の春、新学期が始まってから一
月ほどしたある日が始まりの日だった。

『放課後に体育館裏で待っています』

そう書かれた差出人の名前の無い手紙。

もう何度受け取ったか分からない。どうせいつもの決まりきったパ
ターンで告白されるのだろう。

放課後になるまでは灰色の時間が続く、私を昼食に誘ってくれたり、
一緒に帰ろうと誘ってくれるような人はもはやいない。誘われたら
普通に応じていたのだが、いつからかその誘いも無くなった。

『きりっつ！ 礼！ さようならっ！』

型通りの挨拶が済むと生徒たちは思い思いの行動をとる。……今日
は告白を断ったら図書室で本を読むことにした。そして用事を済ま
せるために早めに体育館裏に行く。

「ごめん、待たせた？」

今回の相手がやってきた。

「いいえ、待ってないわ。」

「俺さあ、サッカー部でキャプテンやってる矢向っていうんだけど
さ、」

「矢向君ね。それで？」

いつものように相手の目を見る。すると彼も他の人たちと同じよう

に目線をそらして話を続ける。

「あのさあ、俺と付き合ってみない？」

そういうことを言うのならばせめて相手の目を見据えて言うべきだ、と少なくとも私はそう思っている。

「ごめんなさい。」

きっぱりと断ってその場を後にする。こういうときにいつも思うことは、相手を見定める時の私の目はどれほど冷たいのだろうか、ということだけだ。

結局その日は図書室で最終下校時刻間近まで過ごしていた。既に学校の敷地内に人気はあまり無く、遅くまで残っている先生方がいる職員室の灯りが夕闇に染まる校庭を照らしている。

「……そうだ、楽譜を買いに行かなきゃいけないんだった……」

今更ながら新しい楽譜を買わなければならなかったことを思い出す。そして下駄箱で靴を履き替え、校庭を通過して校門へ向かうとしたその時……

「……………」

なぜかどこからピアノの音が聞こえてくる。自分もピアノをやっているからわかるが、この音の主は半端ではなく上手い。

校庭に幽かに響く音をたどっていくと、体育館にたどり着いた。

もう運動部も帰ってしまった後の体育館はガランとしているが、確かにピアノの音はそこから聞こえてくる。

そして体育館の中を覗き込むと、舞台の上に普段はしまっており、はずのピアノが出ていて、そこで誰かがピアノを弾いていた。正体を確かめるため、舞台に近づく。

「なにをやっているの、もう最終下校時刻よ。」

「何やってるかって、見ての通りピアノを弾いてる。でもって最終下校時刻なのも知ってる。」

「ならばどうして帰らないの？」

「簡単、まだ帰りたくない。」

「それでも帰りなさい。先生たちに迷惑よ。」

「……先生たちには普段から迷惑をかけまくってるから今更氣にしない。それにしても君、なんか嫌なことでもあった？」

そう言うところどうど一曲弾き終わったその男の子が椅子を立ててこちらにやってきた。

「声がすこし刺々しいよ？」

そして私の目を真っ直ぐに覗き込んできた。

普段ならばここで相手の考えていることが大体分かってしまうのだが、今回は全く逆だった。この男の子が何を考えているのかさっぱり読み取れない。逆に自分の考えを読み取られているような気さえる。

「ふむふむ………そうか、よし！ そんなに上手くはないけど君に特別に一曲プレゼント！」

おもむろにそう言うと、男の子は再びピアノに向かうと音楽を奏で始めた。

「……この曲……」

聞き間違えようはずも無い。この曲こそ私がこの後楽譜を買いに行こうとしている、すなわちこれから練習する曲そのものなのだから。曲が終わるタイミングを見計らって曲名を口に出す。

「……スケルツォ 第二番……」

「おっ！ 正解！」

ちよつとうれしそうな顔をしてその男の子はこちらを向く。……改めて思ったが、この男の子、やはり異常に上手い。完璧なレガートと強弱の幅広さ、そして何よりもペダルの使い方が抜群に上手い。

「いやー、解る人が聴いてくれるって嬉しいね、君はクラシックを聴くの？」

「……一応ピアノを習ってるわ。」

普段は頭に『一応』だとはつけないが、あれほどの演奏を聴いたあとでは自然と謙遜してしまう。

「そうなの？ 折角だから何か弾いてよ？」

「もう最終下校時刻はとつくに過ぎてるから帰ります。」

「ありゃ？ そういえばそうだったね、じゃあ僕も帰ろ。」

その男の子は素早く舞台から飛び降りるとあっという間に体育館を出て行った。

……私も早く帰らなくちゃ……

結局この日は楽譜を買い忘れてしまった。

その翌日……

『ねえねえ、聞いた？ 矢向君、やっぱりフラれちゃったって。』

『聞いた聞いた、しかし矢向君でもダメか！』

教室に入った時に真っ先に聞こえてきた会話。どうやら昨日のことがもう生徒の間に広まっているようだ。つい声のした方をちらりと見る。

『あ……』

その会話をしていた女子生徒たちは私と目が会うと気まずそうに教室を出て行った。

「……………」

もう毎回のことなので慣れたが、あのようにあからさまに避けられているとさすがに少し心が痛む。

そして授業が始まり、三時間目の中程……

「わーっ、すいません！ 寝坊しましたー！」

遅刻した生徒が一人入ってきたようだ。おそらくは私の隣の席の生徒だろう。二年間、さらに今年まで私の隣だが、この生徒がまともに学校に来たことはおそらく数えるほどしかないだろう。

「小金井く、本当は小一時間説教たれてやりたいところだ。が！」

お前は学校に来れば許すことにしているからとつとと座れ！」
先生も慣れたもので、素早く授業を再開する。なんでもこの生徒は

素行は遅刻に無断欠席は当たり前、さらに宿題もまともにやってこないほどもちゃくちゃだが、この学校始まって以来と言われるほど成績は良いらしく、先生ももはや素行に関しては何となく愚痴を垂れるだけらしい。

そして今日も特に何も無いまま終わる。帰り際に体育館から聞こえてくる音に耳をすませてみたが、あのピアノの音は聞こえてはこなかった。

そして昨日買い忘れた楽譜を買うために数年前に水川駅前に出た大型書店へと足を運ぶ。いつもながら楽譜コーナーにいる人はそれほど多くない。

「……あ、」

しかし、そこには予想外の先客がいた。

「ん？ ……あれま、こんにちは。」

そこで楽譜を見漁っていたのは紛れもなく昨日体育館で出会った男の子だった。

「楽譜を買いに来たの？」

「そうだよ、君も？」

「ええ。……ところでそれは何の楽譜なの？」

「コレ？ シューベルトのピアノソナタ。それで、君は何を買いに来たのさ？」

「ショパンのスケルツォ集よ。」

「あれか、昨日弾いた第二番やるのかな？」

「そうよ。」

「ふーん、そうか、じゃあかなり上手いんだ？」

「……そうかもね。」

「さて、と。あとは……」

その男の子はシューベルトの楽譜が置いてある場所を離れると、別の作曲家の作品集を次々と手にとってはこちらと見てすぐに棚に戻す、それを繰り返して棚を一通り見終えたと、

「それじゃあ、また明日？」
と言ってその場を立ち去った。

その次の日の放課後……

帰り支度だけは整えて、体育館へ向かう。今日は運動部が体育館を使わない日なので、耳をすませる必要もない。確かに中からピアノの音が聞こえてくることを確かめて、私は体育館の中へと入った。

「……いた……」

やはりそこにいたのは昨日本屋で会ったあの男の子だった。舞台の隅に腰掛けて挨拶を試みる。

「……こんにちは。」

「ん〜？ あっ、こんにちは。聴きにきてくれたのかな？」

「そうね、そんなところかしら……」

「ん〜、何か聴きたいものがある？」

「そうね……落ち着いた曲がいいわ。」

「オツケー、それじゃあ *Impromptu* D899-3 でもいきますか〜！」

そしてその男の子の両手が鍵盤から歌を紡ぎ出す。もはやこの世のものとは思えない美しい響きが、人のいない体育館に反響して、さらに幻想的になる。

「……他にはなにかリクエストはあるかな？」

演奏を終えた男の子が質問を投げかけてくる。

「そうね……何でもいいわ……」

ある意味では非常にそっけない答え方をしたのだが、肝心の男の子は「よーし、任せて！」

と、気にした様子はない。

そしてその男の子の演奏を聴いているうちにいつの間にか夕日が体育館を染めていた。

「……………ふう……………」

思わず漏らしたため息を、その男の子は聞き逃していなかったようだ。演奏を終えて席を立つとまた私の目を覗き込んでくる。

「……なんか色々あるみたいだけどさ、これから弾く曲は何にも考えずに聴いてもらえる？　きっと少しは気が楽になると思うから。」

それだけいうと男の子は再びピアノに向かうと、聴いたことのない曲を弾き始めた。

いきなり心を驚掴みにする和音から、ゆったりと下降、そして少しの沈黙を挟んで水の上を滑るように左手が動き始め、少し遅れて右手が哀愁、憧憬、諦観……もはや言葉では表現できないほど様々な感情を含んだ音の詩を奏でます。

その曲だけは今までの曲より遙かに強く、私の心の中に入り込んできた。言葉は無くとも、全てを受け入れ優しく包み込んでくれる、そんな気がした。曲が進むに連れて、私の中の何かが融けてゆく、そんな気がする。

流れるような重音トリルから自然に冒頭の旋律が戻ってくる。そして、終わりに向けて少しづつクレッシェンドしてゆく。

この曲も終わりに近いのだろう……。左手の和音が奏でる旋律の上で右手が軽快に、そして優雅に音楽を形創ってゆく、胸の奥から何かが込み上げてくる気がする。まるで今の今まで心の奥底に溜まっていたものが、出口を見つけたかのように。

消え入るような和音を弾いた後、昇るべきところまで昇った右手の音が鍵盤の上を高音部から一気に低音部まで駆け下り、オクターブの、決然とした力強い音でこの曲を締めくくった。

「……え……あれ……どうして………」

「……はい。」

男の子は何も言わずに、ハンカチを渡してくれた。

一度流れ出した涙はなかなか止まらず、結局最終下校時刻を過ぎ

てもしばらくするまで止まらなかった。だけれども、こう言っては変かもしれないが、精一杯泣いたおかげで、私の中の何かが変わった、そんな気がした。

その翌日……

私が自分の席に座って授業が始まるのを待っていると、珍しく隣の席の生徒が一時間目が始まる前にやってきた。ふっと顔を上げたとき、視線がぶつかる。その時、思わず声を上げてしまった。

「あ……………！」

「おはよ。」

私の隣の席に来た、いつも遅刻や欠席をしている生徒、その顔は、間違いなくあの体育館で出遇った男の子の顔だった。その男の子は自分の席に腰を下ろすと、こっちを向いて話しかけてきた。

「とりあえず改めて、はじめまして……………かな？」

「……………はじめまして……………籠原秋乃です……………」

「……………小金井聡です。」

そして二人同時に、同じ言葉を言った。

『今後もしよろしくお願いします。』

「……………っという感じね。」

「へー、そんな話があったんですか……」

「知らなかったですよ、それより秋乃先輩にそんな時期があったなんてそっちの方が驚きです！」

「そうかもね、あんまり人には話さないから。」

「んで、実際のところその時に小金井さんと遇えて良かったんスか？」

「……そうね、おかげで『親友』も出来たし、みんな普通に話しかけてくれるようにはなったけど……」

「けど……？」

「……小金井くんの変人っぷりも隅々まで知ることになっちゃったし、先生には『もう手に負えないから』って小金井くんに説教をしておいてくれて頼まれちゃうし……」

その時部室のドアが勢いよく開き、誰かが飛び込んでくる。

「みんな、おまたせ！」

「どうしたんですか？　小金井さん。」

「いや、昨日サボった分のプリントとか受け取りに行ったら現文の佐野チャンに捕まっちゃってさ」

「それもいいけど小金井くん、昨日仕事を全部やってないのに学校サボってたでしょ？」

「あれ？　おかしいな？　ちゃんと全部やってたはずだよ？」

「昨日の分は？」

「……誤差の範囲内だよ！」

「はい、そういうことで今日中に昨日の分と今日の分を終わらせてね？」

「やっといってくれなかったの？」

「あたりまえじゃない。」

「酷いな……」

「はい、頑張って。」

ぶつくさ言いながらパソコンを起動する小金井さん。

「……ねえ、小金井くん、この後『舟歌』聴かせてくれない？」

「ん、ショパンの？」

「そうよ。」

「別にいいけどそしたらこっちをちょっと手伝ってくれるとうれしいな。」

「頑張ってね、終わるまで待っててあげるから。」

「……手伝ってよ……」

「だめよ、責任は自分で取りなさい。」

「わかったよ……」

（小金井くん……いつも私だけにあの曲を聞かせてくれてありがとう……）

籠原先輩は少しうれしそうな顔をして、必死で仕事をこなす小金井さんを見ていた。

こんぴけん SS (思い出は舟歌とともに) (後書き)

どうでしたか？

籠原先輩の意外な過去、そして小金井君との出会いの話は楽しんでいただけたでしょうか？

ちょっとこちらの不手際で次回もSSとなりますが、また読んでいただけるとうれしいです。

それではまた！

さて、ここから先は雑談です。

タイトルは結局「こんぴけん」に落ち着きました。

実はタイトルはずっと悩みの種だったんです。

正直言って、話の中身をズバツと表現できる言葉がないんです。

いろいろさまよった結果、現在のタイトルに落ち着きました。

それと、後書きで書いた不手際というのは、もともと間に一話入っていたものを削除したため、話の時間的前後関係を考えるとSSが続いてしまう、ということです。

まっ、そんなことあんまり気にしねえよな〜という希望的観測の下、普通に連載するんですけどね〜

こんぴけん SS2 (祭りだから食い意地張ってもいいんじゃない?) (前

SS第2弾です。

サブタイの○の中の言葉には深い意味はありません。

ではどうぞ。

こんぴげん SS2 (祭りだから食い意地張ってもいいんじゃない?)

「はるかゝ！ はゝやゝくゝ！」

「ちよっと待ってよゝ！」

「早くしないとアレ無くなっちゃうよゝ！」

「わかってるってばゝ！」

水川市立第一中学校、文化祭二日目、ちなみに最終日なのだ！

急いでいる目的は昨日買い損ねた三年C組の出展、喫茶店の一日五十個限定のとってもおいしいと評判のケーキを食べに行くためだ。朝の十時から販売開始、今は十時三十分、まだきつと間に合うはず

……

「いよっしやあああ！！ 間に合ったあああ！！！！」

「せーふ、ギリギリせーふ！」

「……えーと、とりあえずいらっしやいませ。何をお求めで？」

「おいしいってうわさのケーキを二つ！」

「……そんなに慌てなくてもまだ残ってるよ。はい、どうぞ。二つで三百円。」

「やたゝ！！ ゲットオオオオオ！！ ありがとう！ 榎戸先輩！」

「はいはい、どういたしまして。ほら、次の人が待ってるから早くどいてちょうだい。」

「やったよ春香ゝ！ うわさのケーキゲット！」

「やったゝ！ さすが美紀ちゃん！」

「はっはっはゝ、今日からウチを神と呼びなさゝい！」

そうして目的のケーキをゲットしてわたしたち二年B組のクラス出

展場所の教室に戻る。

「みんな、やったぜー！ 例のブツ手に入れたよ！」

『えっ、ホントに！？』

『ちよつとちようだいよ』

「ちよつとだけなら春香が譲ってくれるかもよ。」

「え？ 美紀ちゃんはみんなに分けてあげないの？」

「ウチは全部自分で食べる！」

そう言った後、間髪いれずに買ってきたケーキに喰らいつく美紀ちゃん……

『あゝ！ 食べちゃった！』

『こうなったら……春香、そのケーキを一口だけ……一口だけあたしに……』

「えーつと……ぱくつ。」

『うあつ！ 春香まで食べちゃった！？』

「うーん、おいしいなあ♪」

『美紀……あんたねえ……』

「あ、まだケーキ残ってたよ？」

『春香……それを早く言つてよ！ よっしや、突撃……！！！！！！』

全力で教室を飛び出してゆくクラスメイトたち、ちなみに男の子たちはそんな様子を呆気にとられたように見ていた。

「そういえばさあ、春香、」

「ん？ どうしたの？」

「あんた籠原さんって人を文化祭に呼んだんだって？」

「秋乃先輩のこと？ なんで美紀ちゃんが知ってるの？」

「やつぱり呼んだんだ！ うおー！ これはキター！」

「どうしたの？」

「あんたねえ、この辺りの中学生で二中の籠原さんって人を知らない人はいないよ？」

「そうなの？」

「そうだよ、この辺りじゃ結構有名だからね。二中のプリンセスってあだ名？もついてるし、容姿端麗、頭脳明晰っていう話だし。それと二中の男子はほぼ全員撃沈済みらしいし。」

「へー！初めて知ったよー！」

「……春香、不思議とそういう情報には疎いんだよね……」

「でも来れるかどうか分からないって言ってたよ？」

「……それはこのタイミングで言うことじゃないんじゃない？」

「どうして？」

「……人の期待を微妙に裏切りかねないからなんだけどなあ……まあいいや、春香がそのへん抜けてるのは今に始まったことじゃないし。」

「あーっ、ひどーい！」

「だってホントのことじゃん。」

「うーうー……なんかくやしい……」

「ま、口でウチに勝つには十年早い！」

「で、何でいきなりそんなことを聞いたの？」

「まあ折角だしさ、ウチもその人がどんな人だか見ておこうと思ったんだよ。……つーかそもそもどうして春香がそんな人と知り合いたんだ？」

「小学校の時に同じ学校だったんだよ？」

「……で、さんざん迷惑かけまくってて顔を覚えられたってどこ？」

「あははー……せいかり……」

「はあ……あんた小学生の時から今みたいに抜けてたわけ？」

「いっ……今はもっとましたもん！」

「それはつまり昔はもっと酷かったと？」

「はうーっ……」

「……あんたそのうち籠原さんって人にちゃんとお礼を言っといた方がいいんじゃない？」

「あははははー、そうだねー……」

そして美紀ちゃんと受付当番をしながらしゃべっていると、いつ

の間にかお昼ぐらいになっていた。

「おつつつかれ〜。美紀、春香。今度はうちらが当番だから昼でも食べてきなよ?」

「おっ、絵梨ちゃん、オッケー、それじゃあ後は任せた!」

「後は引き受けた!」

なぜか敬礼を交わして交代する美紀ちゃんと絵梨ちゃん。

「春香ちゃん、今度は私が見てるから春香ちゃんもお昼食べてきたら?」

「あっ、綾香ちゃん! うん、じゃあよろしく! 美紀ちゃん、お昼食ベに行こ〜!」

そして校庭に出ている食べ物屋さんで何かを食べに廊下を歩いてゆく。

「おっと。」

美紀ちゃんがすれ違う人とぶつかりそうになり、すんでのところで避ける。

「はにゃあ!」

わたしは思いつきりぶつかってしまった。

「あいたたた……」

「ったく……なんだよ! 痛てーじゃねーか!」

「はわわわわ……ごめんなさい。」

「ゴメンで済むと思ってるのか!」

ぶつかってしまったどう見ても不良みたいな人たちの向こうで、美紀ちゃんが口パクで『ヤバイから早く逃げろ』と言っているのが見える。

「だって、ごめんなさいしたらみんな許してくれるんだよ?」

「だからゴメンで済むと思ってるのかって言ってるんだよ!」

「思ってるよ?」

向こうで美紀ちゃんが頭を抱え込んでいるのが見える。きっと口パクで『バカ〜!』って言ってるのかな?

「テメエ……ナメてんのか!」

ドゴッ！ と音をたてて不良がロッカーを殴る。

「はううう……」

「落とし前つけろや、コラァ！」

『うるせーな、謝ってんだから許してやったっていいだろ？』

野次馬の中から一人の男の子が出てきてわたしと不良の間に立った。

「んだテメーは？ アァ？」

「誰だっけいいだろ、もう終わりにしろよ、みんなの邪魔だ。」

「テメエには関係ねえ！ 引っ込んでろ！」

野次馬の中から今度はポツチャリした男の子が出てきてさっきの男の子の後ろでなにやら囁いている。

（代々木、やべーよ、とっとと逃げようぜ、な？）

（どう見たって状況やバイだろ？ いまさら逃げられる空気じゃねえって。）

（そこをなんとか。）

（もう無理だ。）

（うわーん、代々木のバカあ！）

……この人たち、コントでもやってるのかな？

「なにゴチャゴチャやってんだ、ゴラァ！」

「だから許してやれよ、お前が許せば無事に解決するんだからよ？」

「ッ……この野郎！」

不良の内の一人が男の子に殴りかかろうとしたその時、

『邪魔だよ！』

向こう側から誰かが叫んだ。

「今度はなんだ、誰だ、テメエ？」

『知る必要はないし教える気もない。正直言って君達が邪魔で廊下が通れないからどいてくれ。』

「んだとお？」

「……！！ やべえ！ 兄貴、アイツ二中の小金井だ！」

「……ッ！ マジか！？」

「ヤバイって、兄貴！ アイツにたてついたら冗談じゃ済まねえ！」

殺される！」

「クソッ！ 覚えてろ！」

不良たちが慌ててその場を去ると、滞っていた人の流れが再び流れ出す。

「春香、大丈夫！？」

「うん、大丈夫だよ？」

「はぁ……ホントに良かった……それにしてもあんたもう少し考えてものを言いなさいよ……」

「あはははは……だってホントのことだもん。」

「それがマズいの！ ったくもう、今回は無事で済んだけど、もしかしたら大変なことになってたかもしれないんだよ？」

「ところでさっきの人だれ？」

「ん？ さっきの不良？ えーっとねえ、たしか四中の……」

「そっちじゃなくて……」

「二中の小金井さん？ あの人は不良じゃないよ？」

「そうなの？」

「うん、あの人は……まあ一言で言っちゃえば変な人？」

「変な人？」

「うーん、なんでもムチャクチャ頭が良いらしいんだけど、それ以上頭のネジが飛んじゃってるらしいんだよね……奇妙奇天烈、天才奇人？ みたいな感じらしいよ。一説ではものすごい裏ネットワークを持ってるとか、中一の頃喧嘩を売ってきたヤツをどっかの精神病院送りにしたとか……」

「って、そうじゃなくて！」

「なに？ 最初に出てきた人？」

「そう、その人！」

「うーん、ウチは知らないなあ……たぶんどっかの中学生じゃない？」

「……そのまんまだね。」

「まあいいや、とりあえずお昼食へ行こう！ 景気よく食べて嫌

な空気を吹っ飛ばすぞ、おー！」

そしてその一年半ほど後……

『新入生諸君は自分のクラスのところと並んでくださーい！』

「じゃあ春香、ウチはこっちだから入学式が終わった後ね。」

「うん、それじゃあまた後で、美紀ちゃん。」

今日は高校の入学式の日、わたしのクラスはC組なのだが……

「……ここってどのクラス？」

……さっそく迷子になってしまった。さっき別れ際に美紀ちゃんが言っていた言葉を思い出す。

『春香、迷子になっちゃだめだよ？』

……美紀ちゃんの心配は的中したみたいだ……

「どどど、どうしよう！」

もうすぐ体育館に移動する時間なのに……

必死に一年C組のプラカードを探すわたしの視界の隅に、どこかで見たことのある感じの人の姿が入った。

「あの人って……！」

素早く振り向いてその人の姿を探す。

「ひでぶっ……！」

「あ、ごめんなさい！」

振り向いた時に肘が当たってしまったらしい。とりあえず謝って、あの人影が見えた方向に行く。

人込みの中をかきわけて進んでいくと、その人はそこに立っていた。

「……見つけた……」

そこにいたのは紛れもなく一年半前に、わたしと不良の間に立ちふさがってくれたあの男の子だった。

「……すーはーすーはーすーはー……よし！」

意を決して話しかける。

「あっ……あの、い、い、い、一年し、し、C組のば、ば、ば、場所は、ど、どこですか？」

「……し、C組ならここだけど？」

「ここ!？」

「だからここだって、うちのクラス。」

「よかった、このまま間に合わないかと思った……」

『お前は桜木か？ お前さんはこっちに並んでくれい。』

担任の先生と思しき人がわたしの名前を確認する。

「あ、は……い！」

そして整列が終わると体育館へ移動してゆく……

……キンコンカンコン♪

『……い……お……い、桜木、起きろ。』

「はにゃ!？」

「起きろって、テスト終わったから。」

「えっ!? テスト終わった!？」

「だから終わったって言ってるだろ？ 答案回収するから起きろ。」

『桜木、ゆっくりお休みになってたみたいだから成績は期待してるぞ?』

「登戸先生、ごめんなさい！」

「……分かった、とりあえず今のところは許してやる。」

答案の回収が終わると、先生が話し出す。

「よし、これで期末試験も終わりだ。お疲れさん。それじゃあこの後は配布物なんかを配るから級長と副級長、学級委員は俺についてきてくれ。その他のやつらは教室の中でテキストに羽目を外しておくように、以上!」

先生が教室を出て行くと、神田君が代々木君の方を向いて、頭を抱えて絶叫した。

「終わった〜! ……そしてオワタ!」

「はいはい、それ中間の時も聞いたぞ?」

「代々木は余裕だな!」?

「いまさら騒いでももう変わらねえって……」

「そうか、代々木もオワタか……」

「そんなところだ……」

「で、ぐっすりお休みしてらっしゃった桜木さんはどんな感じで?」

「わたし? あはははは……ちよっと危ないかも……」

「先程寝てた世界史は?」

「あ、あれは大丈夫、全部終わってたから!」

「な、なんですとっ!」?

「桜木、本当に全部終わってたのか!」?

「うん、だって世界史は秋乃先輩に教わったもん!」

「な……なんというチート!!」

そうしているうちに級長たちが戻ってきて配布物を配り始める。そして先生もやってきて、夏休みの注意などを話す。

「おし、伝達事項は以上! 次は終業式だから忘れんなよ! そして夏休みは全力で楽しむように、別に家に引き籠もって××ゲーやる! って言うんだったら止めないがな。まあ、お巡りさんのお世話にならないように節度を持って遊ぶなり何なりやってくれ。以上、おしまい!」

「起立、気をつけ、礼!」

『さようなら』

そして終礼が終わると、代々木君、神田君と一緒にコンピューター研究部の部室へ向かう。廊下はテストが終わったという開放感でハイテンションになった生徒たちがたくさんいて、雰囲気もどことなくウキウキした感じになっている。

「はるるか♪」

廊下でこんな風に声をかけてくる人は一人しかいない。

「あ、美紀ちゃん！ なくに？」

「今度さあ、おいしいって評判のケーキ屋さんに行くんだけど、春香も来る？」

「行く行く！」

「おっしゃあ！ 了解！ いま春香で五人目だから、もっと集めてみんなで楽しく行こう！ ところでテストどうだった？」

「あはは……それは聞かない約束だよ……」

「ふっ、ウチはもう壊滅だぜ！」

「大丈夫、次のテストがあるよ！」

「春香、勉強教えてよ！」

「それはわたしより秋乃先輩に頼んだ方がいいと思うよ？」

「……そうか、じゃあ春香、よろしく頼んどいて！」

「えっ！？ わたしが頼むの？」

「冗談だよ、それぐらい自分で頼むから。それじゃまたね！」

「うん、じゃあまたね！」

美紀ちゃんと別れて部室の方向へ再び歩き出す。部室に着くと、秋乃先輩と小金井さんはもう来ていた。

「お疲れさまでーす。」

「ちわわーっす。」

「おつかれさまですー。」

「お疲れ、試験の出来はどうだった？」

「……聞かないでください……」

「そうか、それじゃあ期待することにしようかな」

「そういう小金井さんたちはどうだったんですか？」

「ん？ 聞くだけ野暮ってもんじゃない？」

「……今回は小金井くんと同意見ね。」

「……………代々木、聞いたオレがバカだった……………」

「お前のバカは今に始まったことじゃないだろ？」

「うわーん、お姉さまー！ 代々木がオレをバカにしてきますー！」

「とりあえず私たちから見たら二人とも大差は無い、とだけ言うておくわ。」

「籠原先輩……………さりげなく心にグサツと刺さる言葉を言いますね……………つか、目が怖いです……………」

「その原因を作ったのは神田君よ？」

「はいはい、そこまで。それじゃあ先に夏休みの予定をパパッと説明しちゃうから適当に腰掛けて話を聞いたね？」

「……………まだ何も聞いてないんスけど……………？」

「訂正、腰掛けて話を聞いてね？」

「どうして普通に修正しないのよ……………」

「それで、夏休みの予定ってどんな感じなんですか？」

「桜木さん、それを今から説明するからはやらない。」

「はーい！」

「それじゃあ説明を始めましょう。」

そしてコンピューター研究部の夏休みが始まった。

こんぴけん

SS2

(祭りだから食い意地張ってもいいんじゃない?)

(後妻

ではまた。

第7話 (夏休み、それは宿題がなければ最高である) (前書き)

例によってサブタイトルの○の中の言葉に深い意味はありません。

ではどうぞ

第7話 （夏休み、それは宿題がなければ最高である）

夏休み。

学生にとっては天国であり地獄である夏の長期休暇をさす。仲間とつるんでどこかへ出かけたり、夏休みの終わり頃宿題に追われて死にかけたり、と人によって様々な過ごし方がある。

しかしわれらがコンピ研はそんなものどこ吹く風、といった風に一学期と大して変わらない(?)活動を続けていた。夏休みの始まりとともになぜか備え付けの冷蔵庫の中には大量の飲み物やアイスが出現し、冷房をガンガン効かせた部屋で持ち込んだ携帯ゲーム機やなんやで遊んでいる様はとても部活動とは思えない……

そんな夏休みのある日、七月二十九日の朝、携帯宛に一つのメールが届いていた。

『午前十時、制服で部室に来られたし。持ち物は特になし。』

いつもの呼び出しメールだ。この書き方は小金井さんだな……このメールが来たということは今日は部活があることを意味する。……ん？ 何かが頭の隅に引っかかっている気がするな……七月二十九日……なんだっけ？

とりあえず制服に着替えて出かける支度をする。今は九時半、今から出ればちょうど十時前には着くだろう。

そしていつもの通学路を歩いていく。普段なら神田や桜木に出会うわけだが今日に限って誰とも出会わなかった。

十時五分前、学校到着。玄関を抜けて二階の南端の部室へと向かう。

「おはようございまーす。」

部室に入ったその瞬間……

「動くな！ 手を挙げろ！」

なぜか四つの銃口がこちらを向いていた。

「はいっ!？」

反射的に手を挙げて固まる、すると突然笑いの渦が巻き起こった。

「あっははは、やっぱり反応した。」

「やっぱりみんな引かかるのね……」

「わはははは！ 代々木、なんつー顔してんだ！」

「あはは、代々木君も引かなかった！」

「な……なんなんだ、これ……」

銃を構えていたのはコンピ研部員だった。というか何でそんなもんがここにあるんだ？

「あのー、いったいどういうことなんですか？」

「あれ？ 年間予定表見てないの？」

「へ？」

その瞬間ピンときた。そうだ、七月二十九日、『お楽しみ』の日だ。

「つーかそもそもその銃はヤバいんじゃないんですか？」

「あーコレなら大丈夫。いわゆるモデルガンってやつ？ 弾は撃て

るけど人は死なない程度になってるから大丈夫だよ。」

死なない『程度』という表現が非常に気になるどころだが、ツツこむだけ無駄な気がするので止めて置こう。

「……それで『お楽しみ』って結局なんなんですか？」

「んー、早い話がちよつとしたケンカと言うかサバゲーと言うか……まあそれも含めてこれから説明するからとりあえず座ってよ。」

「はあ……」

言われるままに席に着く。全員が小金井さんの方を向いたところで小金井さんがしゃべり始めた。

「さーてと、んじやとりあえずざっくり説明するけど、この戦闘は絶対に勝たなくちゃいけない。さもないければ来年度の活動資金が大幅に減っちゃうから頑張ろう。で、基本的には武器は自由のサバイバルゲーム。相手はアニメ研究会だ。」

「アニメ研究会ってなんですか？ 初耳ですよ？」

「細かいことは後で説明するから。それで、戦闘場所は学校、時間は深夜十二時に開戦、夜明けとともに終了の殲滅戦。生き残りがいた場合は人数の多い方が勝ち。人数的にはこっちが圧倒的に不利なんだけど、そこは助っ人を手配してあるから心配しないで大丈夫。さて、それじゃあ細かい質問を受け付けるからなんでもどうぞ。」

「えーと、とりあえず深夜に学校でそんなことしちゃあまずいと思うんですけど……」

「そこは問題ない。ちゃんと策を講じてある。」

「じゃあ、相手と銃撃戦をやるんですか？」

「んー、どっちかって言うところの意味こっちからの一方的なジェノサイドになると思うよ。相手はコスプレで戦う気だから、銃器は使わないと思うし、たぶん。」

「コ……コスプレ？」

「うん、まあその辺は実際に戦う時に解るよ。」

「あの一、さっき代々木君も聞いてたんですけど、アニメ研究会ってなんですか？」

「だから今回の相手、というか毎年戦ってるんだけどね……手っ取り早く説明すると僕らが勝てばウチにあるハイエンドマシンを貸し出す時に金を取る。負けたらタダで貸し出す。そんな感じ。あ、これだとアニ研の説明になってないな、まあ一言で言えば愛すべきアニメオタクの集まりだよ。あっちだって銃器を使ってもいいのに敢えてコスプレ+自作武器で挑んでくるんだよ。なんかこうすがすがしいよね。」

「……そもそもそんな部活があったんですか……」

「うん、活動場所は一階の北の端だからあんまり目立たないけどね……さて、質問はもうないかな？ 無ければとっとと戦闘訓練を始めたんだけど？」

「せ……戦闘訓練ですか？」

「うん、と言っても銃の撃ち方を軽くレクチャーするだけだから

すぐ終わるよ。」

小金井さんがしゃべり終わると同時に何の前触れも無く部室のドアが開いた。

「ういーっす、小金井はいるか？」

「ぎゃあ！　なんかでた〜！」

白衣にガスマスクをつけた怪しさ全開の人が二人現れた！　勇〇はどうする！　じゃなくなつて……な、何が起きてるんだ！？

「あ、いらっしやい。……岡本と片岡か？」

「ご名答、流石だな、小金井。」

「お……岡本君に片岡君？　いったい何しに來たのよ？　……とりあえずそのガスマスクを外してもらえるかしら？」

「おや、籠原さん、これは失礼。今日は小金井に用があつてきたんだ。で、本題だが小金井、例のブツが完成したから見に來いと伝えたかつたんだが、あいにく取り込み中のようだな。」

「あのー、小金井さん……この人たちだれっスか？」

「あー、こいつらはね、裏科学部のやつらだよ。」

「はじめまして、後輩諸君、裏科学部副部長で二年の岡本だ。こつちとは同じく裏科学部員で二年の片岡^{かたおか}。以後お見知りおきを。」

「あ、はあ……よろしく願ひします……」

「うむ、では我々は一旦撤収するとするか。」

「あ、ちよつと待って。せっかくだから戦闘訓練をやってほしいんだけど。」

「なんだ？　彼らに戦闘訓練を付けろと？」

「そ、折角だから頼むよ。校舎裏に特訓用の設備はセットしてあるから。」

「うーむ……分かった。では後輩諸君、銃を持ってついてきたまえ。」

「はい、これがみんなの分の銃だよ。」

小金井さんがニコニコしながら銃を手渡してくる。

「それじゃあ行ってらっしやい。」

怪しげな裏科学部員の人について校舎を出て校舎裏へと歩いていく。すると校舎裏には簡易的ながらそれなりにちゃんとしたトレーニング設備のようなものができていた。……誰が作ったんだ？　こんなもん……

「さて、ではやることの説明だが、訓練と言ってもやることは二つだけだ。正しい銃の構え方と狙ったところに打つ訓練の二つ。だが二つしかない代わりにみっちり鍛えるから気を引き締めるように分かったな？」

「はい……」

それから二時間、鬼のようにしごかれた俺たちはへろへろになって部室へ戻ってきた。

「やー、お疲れさま。どうだった？」

「鬼のようにしごかれました……」

「あら……それは大変だったわね……ご苦労さま。」

「さて、小金井、そろそろ昼時だがお前たちはどうするんだ？」

「んー、特に決めてないな。籠原さん、何かいいアイデアある？」

「私も特に無いけど……」

「うむ、それなら橋の向こうの『すかいらいく』に行つてはどうだ？　そのついでに例のブツを見ていってくればありがたい。」

「んじゃそうしようか、みんな、それでいいよね？」

「私は構わないわ。」

「オレもそれでいいっす。」

「わたしもー！」

「俺もそれでいいや……」

そして昼食を食べに水川大橋の向こう側にあるすかいらいくまで行くことになった。ちなみに水川大橋とは水川市内を流れる豊野川にかかっている橋の一つで幹線道路が通っている。この橋を越えると一気に建物が減って緑が多くなる。そして豊野川の川原はとても広

く、グラウンドが多数あるため、たまにウチの野球部やサッカー部なんかも練習に来るらしい。

「……こうやって歩くと結構距離あるのね……」

「うーん、そうかなあ？ 僕はなんとも思わないけど？」

「オレには十分遠いっす……」

「神田、もうちょっと速く歩けよ。」

「無理だ……」

「おや、そのもうへばってるキミ、我が裏科学部特製の気付け薬でも飲むかい？ もれなく強力すぎてラリラリハッピーになれるかもしれないが。」

「い……いや、もう大丈夫っす！」

さすがに怪しげな薬を飲むよりは気合で歩いた方がいいと悟ったように、神田の歩く速さがかなり上がった。ただしいかにも無理矢理歩いてます！ みたいな感じなのだが……

「さて、裏科学部は橋のあちら側の下で待機しているはずだから、一旦土手から河川敷に下りてもらおう。」

「はいはい、みんなOK？」

「そういえば小金井くん、今更なんだけど『例のブツ』っていった何なの？」

「それは見てのお楽しみ♪」

裏科学部員に導かれるままに土手の下に下りると橋の下には白衣を着た人たちが何人もいた。ガスマスクをつけている人が多いのはなぜなのか非常に気になるのだが、理由を聞いたら不吉な答えが返ってきてそうなので止めておこう……

「さて、では新型兵器のお披露目と洒落込もうではないか！ ……見よ！ これが新型兵器『エグゾーストポテトキャノン量産型』だ！」

白衣の人たちが持ってきたモノはどうも眞面目に見てもちよとしたバズーカにしか見えないシロモノだった。ついでに言うなら一番後ろにくっついているアレ、消火器じゃないのか？ ……なんとなく

頭をよぎる川原での射撃の場面……デジャヴか？

「おおー、本当にやっちゃったんだ〜！」

「ああ、小金井のアイデアが非常に役に立った。お前が言っていた通りにポテトキャノンのガス室の代わりにエグゾーストキャノンを取り付けてみた。おかげでいちいち燃料の混合に気を使う必要も無く、おまけに空気圧を調節することで威力調節も可能になった。それと今から試し撃ちをするからそこで見ててくれ。」

「りょーかい。」

「あのー、小金井さん。これ一体なんなんスか？」

「んーとね、ポテトキャノンって言うオモチャ？の改良版。」

「……全然わかんないんスけど……」

「おっ、今から撃つみたいだから見てみなよ。」

「発射よーい！ 三……二……一……撃てーい！」

構えている人がトリガーを引くと『ボシュッ』という音とともに何かが撃ち出されて対岸の岸に置いてあった工事現場でよく見かけるようなパイロンを思いっきり吹っ飛ばした。

「……あのー、何を撃ち出してんスか？」

「ジャガイモだよ、半切りのヤツだけど。」

「あの威力ってやばくないですか？」

「大丈夫だよ、怪我しない程度には威力を抑えてあるはずだから。」

「あれで抑えてあるんですか？」

「うん、たしか最大出力で撃つと骨が折れるかもって言ってたし。」

「小金井くん……まさかアレを今日使うつもり？」

「そうだよ。一応彼らに使ってもらう予定だけど。素人が撃つのは危ないからね。」

「……………」

「さて、小金井、こんな感じはどうだ？ 我々的には十分実戦に耐えうるように作ってあるのだが？ ちなみに空気の供給は自転車用のエアポンプを使って機動性を上げてある。」

「うん、いいんじゃない？ ところで今日は午前中はいったい何を

やってたんだい？」

「うん？ 午前中か？ そうだな、一応エグゾーストポテトキャノンの最終調整と2・×××○○○××××の合成をしていたが。」

「……一応聞いとくけどまさか今日使うわけじゃないよね？」

「使ってもいいんだがもれなく我々まで被害を受けそうでな。」

「ガスマスクはその名残って訳ね……」

「あの一、小金井さん。さっきの2・ナントカカントカって何ですか？」

「んー、いわゆるところの○○剤ってヤツなんだけど、わかるよね？」

「……そんなモン作ってどうするんですか……」

「特に目的は無い！ だが作る、それが我々裏科学部だ！」

「それはいいけどあんまりヤバイもん作って捕まるなよ？」

「そこは問題ない。作るとヤバイものは基本的に理論だけで留めておくようにしている。まあうっかり合成しちゃったりとかは誤差の範囲内だな。」

「……さいでっかい……基本的に？……まあいいか。さて、じゃあそろそろお昼にしようか。それじゃあ今度は夜にな。」

「了解した。」

そして俺たちは川原を後にしてファミレスへと向かった。

「さーて、何頼んでもいいけど五百円を越えた分は自分で払ってね。」

「えー、マジっスかー。」

「全部払わなくってもいいだけありがたいと思うべし。さーて、僕は何にしようかな。」

ちなみに席順は俺の右隣に神田、左隣に桜木、向かって右に小金井さん、向かって左に籠原先輩である。自然と二つあるメニューを俺と神田と桜木で一つ、小金井さんと籠原先輩で一つづつ見ることになる。

「神田は何にするんだ？」

「オレ？ そうだな……個人的にはトンカツかハンバーグなんだが値段の問題があつてな……。」

「そうかい……桜木は？」

「わたし？ うーん、あんまりカロリー高いのはちよつと……かな？」

「へえー、やっぱりそういうの気にするんだな。……神田も少しは見習ったらどうだ？」

「うるさい！ 余計なお世話だ！ オレは食べたいものを心置きなく食べられるんだったら体重とか体形なんてものは気にしない！ カロリーなんか気にしてたらおいしいもんは食えん！」

「……そこまで熱弁振るうことかよ……」

「秋乃先輩もカロリーとか気にしますよね？」

「え？ うーん……私はあるまり気にしない方かな。」

「えー！ 気にしないんですかー！」

「うん、私の場合は食べても全然体重増えないから。」

「うらやましいなく、そういう体質……」

「そんなこといったら小金井くんもそうでしょ？」

「うん、だね。高校に入ってから全然体重増えてないから。」

「そういえば小金井さんって体重何キロなんスか？」

「僕？ 53キロだけど？」

「……ついでに身長は何センチスか？」

「んー、172センチぐらいだったかな。」

「かるっ！ 代々木はどうだったっけ？」

「俺？ 身長は170の体重が57だったと思う。」

「くそー、何でもみんなそんなにやせてんだよく！ オレばっかポツチャリかよく！」

「神田君はどうなんだい？」

「オレっスか？ 156の66キロですよ……」

「へえー、でもそこまでってわけでもないんじゃない？」

「とりあえず励ましてくれて嬉しいんスけど逆にヘコむっス……」

「あ、そう。そういえば籠原さんは？」

「私？ えーっとね、身長が164センチで体重が……って言うわけじゃない！ 何聞いてるのよ！」

「別に体重を言えだなんて一言も言っていないよ？ そもそも女性に体重を聞くなんて失礼なことをするわけじゃないか☆」

「誘導尋問に乗っけて喋らせる、とかじゃなくて？」

「それもあるかもね。勝手にしゃべった事に関しては僕に責任は無いからね。」

「そんなに私の体重を知りたいの？ 別に人に言えない程重くはないけど？」

「いや、もう知ってるから別にいいよ？」

小金井さんが籠原先輩に耳打ちをする。すると籠原先輩が一瞬で耳まで真っ赤になった。

「えっ！……どっ……どうして知ってるの！？」

「ふっふっふっ、僕の情報網を甘く見ないでくれよ。全校の生徒と先生方の年齢・誕生日・身長・体重・住所・学歴・本籍地・年齢・家族構成・趣味・友人関係などなどなんかはその気になればほとんどのことはわかる情報網があるんだから。」

「じゃあ俺たちのこともほとんど知ってるんですか？」

「いや、知らない。調べてないから。そうだな……例えば神田君が駅前の三風堂ってラーメン屋でその食いつりから『魔王』って呼ばれて恐れられてるとか、代々木君が実は散歩という趣味を持つてるとか、意外と掃除が得意だなんてことは全然知らないから。」

「……思いつき知ってるじゃないですか！」

「ありゃ？ 口が滑っちゃったかな♪ でも大丈夫、ウソもつき通せば真実に成ってしまう！ というわけで何にも知らないからね♪」
「……絶対に確信犯ね……でもお願いだからその情報網を悪用しないでね……」

「大丈夫だって、それぐらいの分別はわきまえてるよ。カチンときたヤツの住所を調べあげて裏科学部に渡して暗黒生物を大量に送り

込むとか、最臭兵器ENGACHOとかDOZAE MONなんかを投入するなんてことは絶対にしないから。」

「そういう発想がある時点でかなり悪用する可能性が高いと思うんだけど……」

個人的には最臭兵器とやらが一番気になるのだが……つか暗黒生物って……

「あのー、さすがにそろそろ注文しないといけないと思うんですけど……」

「おっと、いけない。そうだね、じゃあみんな早めに注文するもの決めて。桜木さん、そのボタン押しちゃって。」

「はーい！ とりゃああっ！」

なぜにそこまで渾身の力を込めて叩くんだよ……しかもクイズ番組なんかの速押し風に……

「はい、ご注文をどうぞ。」

早速ウェイターさんがやってきて注文をとり始める。

「オレはカツ丼で。」

「僕はマグロ丼。」

「私はスパゲッティナポリタンでお願いします。」

「俺はビーフシチューで。」

「わたしはハンバーグで。」

「かしこまりました。しばらくお待ちください。」

ウェイターさんがテーブルを離れていくと料理が来るまではヒマである。

「そういえば籠原さん、新曲入ってるけど後で聴く？」

「新曲って言われても……今度は何？」

「んーつとね、シューマンの『序奏と協奏的アレグロ』とかリストの『パガ超』とか、あとアレだ。ドヴォルザークの『ピアノ協奏曲』とかかな。」

「そうね、ドヴォルザークのピアノ協奏曲は聴いてみたいわね……他のはまた今度でいいわ。なんでもいいけど最近小金井くんが探し

てくる物がだんだんマニアックになってない？」

「そんなことは無いと………？　言い切れないなあ？」

「……………」

「そういえば、小金井さん。今日の夜戦うって言ってたっスよね？
それって学校側にバレたらヤバいんじゃないんですか？」

「あー、それに関しては問題ない。後で君達に活躍してもらうから。」

「あの一、先生の説教を喰らうことになるのだけは勘弁してほしい
んですけど……」

「そんなことはないから大丈夫。去年僕らもやったから。」

「そうなんスか？」

「うん、これは毎年ウチの新生が担当することになってるらしい
から仕方ないんだ。」

「秋乃先輩、いったい何をするんですか？」

「え？　……まあ一言で言っちゃえば用務員さんを買収して見逃し
てもらおう、ってことなんだけど……」

「ば……買収……」

「……響きは悪いけどそんなたいしたことをするわけじゃないから
安心してちょうだい。」

「は……はあ……」

「おっ、料理がきたよ。」

先ほど注文した料理が次々とテーブルの上に並べられていく。

「それでは……いただきます。」

小金井さんの合図で料理を食べ始める。

「……そうだ、みんな七月の三十一日はあいてるかい？」

「ふあい？　ひひふあふふおふあんふゆうひひひふえふふあ？」

「神田……しゃべるときは口の中に入ってるものを呑み込んでから
にしろよ……」

「……そもそもそこまで詰め込まなくてもいいと思うけどね……」
「いずれにしても下品よ。そういうマナーはちゃんとしなきゃ。」

「それに神田君、口の中に物が入ってる時にしゃべるんだったら口に手を当てなきゃだめだよ」

素晴らしき連携プレーのよる神田叩き……

「……んぐっ……すいません……」

「なーに、次から気をつければいいんだから、気を落とさない。」

「んで、三十一日に何かあるんスカ？」

「うん、折角だからみんなで隅田川の花火大会を見に行かない？」

「って思ってたさ、どう？」

「花火大会っスカー、いいっスねー。出店、食べ歩き、浴衣……むふふふ……」

「神田君、あんまり変な想像してるとあなたの人間性を疑うわよ？」

「ひえっ！　なんで解ったんスカ！」

「いや、お前思いつきり口に出てたから……」

「まっ、マジか!？」

「ああ……さすがにそこまであからさまにやってると俺もヒクわ……」

「まあまあ、頭の中で考えてる分には問題ないじゃないか、どうせ代々木君も似たようなこと考えてたんじゃないの？」

「……」

「やっぱりねー、まあ健全な男の反応だと思うよ？」

「まさか小金井くんまでそんなことを考えてたの？」

「まさかあ、むふふふまでは考えてないよ。でも籠原さん、どうせ浴衣で来るんでは？」

「……たぶんそうなると思うけど……」

「でしょ？　籠原さんってそういうお祭りの時はいつも浴衣じゃない？」

「……そうね、たしかに浴衣以外を着て行った記憶が無いわ……」

「そうなんスカ？　……桜木さんは？」

「えー？　わたしは……ちょっと着て行こうかなって思ったけどどうしよう……」

「だいじょうぶよ、春香ちゃん。何かあったら私が鉄拳制裁を下すから、安心して着てきて。……さすがに私だけだと寂しいし……」

「うーん、考えておきます……」

「そうだ、食べながら聞いてくれて構わないんだけど、今夜の戦闘の時は基本的に誰かと一緒に動いてもらうんだけど、今その組み合わせを言うから覚えといて。まず籠原さんは部室で管制塔役、みんなからの位置報告と敵の位置に関する情報を聞いて作戦を随時修正して。」

「……去年と同じような役ね……」

「それだけ籠原さんの分析力に期待してるってこと。というより籠原さんに逆らおうなんて考える人はいないと思うし。で、次、神田君は裏科学部の人たちと一緒に動いてもらうから。」

「マジっスか？ めっちゃ怖いんですけど……」

「大丈夫だって。それに神田君、激しい運動は嫌でしょ？ 彼らは武器の特性上そんなに動かないから、そっちの方が駱駝と思う。」

「駱駝？」

「あ、ごめん。楽だ、の間違いだから直しといて。」

「……普通に修正しといて下さいよ……」

「さて、気を取り直して次行こうか！」

「……あくまで普通に修正する気はない、と……」

「退かぬ媚びぬ省みぬ！ というわけで代々木君と桜木さんは一緒に遊撃部隊やってね。」

「退かぬ媚びぬ省みぬって……って待て！？ 俺と桜木だって！？」

「……！？ ふえ！？ 今なんて言いました！？」

「だから代々木君と桜木さんで遊撃部隊やってくれて言ったじゃないか。僕は狙撃だから単独行動、以上、おしまい。」

「な……」

「ええっ！」

「何をそんなに驚いてるのさ？ それともそんなに嫌？ でも人数の都合上仕方ないんだから文句は言わないでよ。それと代々木君、

一応大丈夫だとは思うけどあんまり変な気はおこさないようにね？
桜木さんも身の危険を感じたらぶっ放しちゃって構わないから。」
「なっ……俺が何かするとでも！？」

「一応って言ったじゃん。まあナニしても勝手だけど自己責任でよろしく。」

「ナニって……」

「？ 何言ってるの？ 僕は何しても勝手だけど、って言ったんだけど？」

「へ？ いやでも今確かに……」

「……やっぱり代々木君も人間性を疑っておいた方がいいかしら？」

「そ……そんなに俺は信用されてないんですか……」

「それと小金井くんもあんまり紛らわしいことは言わないこと。」

「僕が何か言った？」

「……自覚はあるんでしょ？ とぼけないで。」

「だから何を？」

「……まさかさっきのは単なる誤植……？」

「？ 籠原さんまでどうしたのさ？」

「……意図的ではなかったのか？ なんとなく微妙な悪意を感じたんだが、気のせいだったのか……？」

「ほら、みんな口が止まってるよ。」

「え？ あ、いけない。みんなもちゃんと食べて。」

なんとなく嫌な空気が漂っていたが食事をしているうちにどこかへ飛んでいってくれた。

「そういえば聞いてなかったけど、みんな期末試験は大丈夫だった？」

「ぶほっ！……！」

「ぐはあっ！……！ いまさら聞かないで下さい！」

「……みんなそんなに悪かったの……？」

「……そういう小金井さんと籠原先輩はどうだったんですか……」

「私たち？」

「ちゃんとやらなきゃだめじゃない。そんなんじゃ試験前は特別補習をするわよ？　もちろんパソコンはお預けで。」

「……勘弁してほしいっス……」

「そんなこと言っても成績不振じゃ部活にこれなくなっちゃうけど？」

「……努力します……」

「小金井くんも何か言ってあげて。」

「よく遊べ、青春は二度と戻ってこないぞ？」

「……………どうしてこうなることが予測できなかったのかしら……」

「それから一応勉強もしようね。周りから文句が来ない程度に、一応。」

「……それぐらいならオレでもなんとかなりそうっス。」

「そ、無理は禁物。」

「……それでいいんですか？」

「ダメだと思ったら自分でさらにやればいいってこと。」

「微妙に深いっスね……」

なんか微妙にお説教を食らってしまったが、そうこうしているうちにみんなの皿は空になった。

「さーて、それじゃあ勘定してくるから先に外出てて。」

「あれ？　超過分は払わなくていいんスか？」

「うん、全部部費から出すから。」

「……だったら最初っからそう言っただけじゃなかったっス……」

「だってああ言っとかないとみんな遠慮しないんだもん。」

「……たしかにそうかもしれないっスけど……」

「それじゃあ先に行って舞ってて。」

「！？　何を舞うんスか！？」

「ごめん間違い。それともソーラン節でもやる？」

「無理っス。」

「即答かい……じゃあ先に行って待ってて。」

「はぁ……」

小金井さんが会計をしている間に外に出る。夏の真っ昼間にエアコンの効いた店内から外に出ると暑くて仕方がない。

「……あちい……」

「……言うな……代々木……余計に暑くなる……」

「……スマン……」

「もうう！ 代々木君も神田君もだらしない！ 男の子なんだからもっと爽やかじゃないと！」

「……余談ですが桜木さん……オレは爽やかさからはかなり遠いと自覚してるからそれは代々木にだけ言ってもらえると助かるっス……」

「……神田……お前自分だけ逃げようとしてるな……」

「……オレは見た目通り寒いのは平気だが暑いのはダメなんだ……」

「……俺だって暑いのはだめだ……」

「……そういえば籠原先輩は平気なんスか？」

「……どんな時でも平然としているように、っていうのを心がけるから。」

「……それは小金井さんにかかわれた時も含まれるんスよね？」

「……あれ……は……例……外……」

どう見ても意地を張っているようにしか見えません、籠原先輩……そんな感じで俺と神田がダレていると会計を済ませた小金井さんが店の中から出てきた。

「おーい、二人ともなにダレてるんだい？ コンビニ寄ってアイスでも買ってく？」

「賛成っス！ 早速行きましょう！」

突然の神田復活。

「……お前は何者だ……」

「こんな暑い日にアイスが食える！ そのためなら火にだってオレは飛び込むぞ！」

「……そのアイスは間違いなく溶けてると思うがな……」

「ぬおっ！ イタいとか突くな！」

……だめだ、神田は暑さで頭をやられたらしい……むしろこんくだらないことにいちいちツツこむ俺も気がおかしくなってるのか？

「えーっ！ 神田君と代々木君だけずるーい！」

「……わかったよ、桜木さんにも買ってあげるよ……籠原さん、なに？」

「私もアイスを買ってもらえると嬉しいかなって思ってたみたい。」

「……わかりました……負けましたよ……奢りますよ……」

結局小金井さんは全員分のアイスを奢る羽目になった。

そして部室に帰還。

「ふーっ、やっぱり部室は快適だね。」

「同感っス。じゃあ早速アイスを食べましょう！」

「……そうかい、好きにすればいいさ……」

「ではありがたく、いっただっきまーす！」

「神田……そんなにガキっぽく食べるなよ……てかこぼすな。」

「うまーい。」

「……………」

神田には全く聞こえていないようだ……

「ぷっ……神田君、かわいーい！」

「……そうかしら？」

個人的には籠原先輩の意見に賛成です……

「みんなも早めに食べたなら？ 溶けちゃうよ？」

「あ、それじゃあいただきまーす！」

そしてしばしの間アイスタイム。

「あ、それ食べ終わったら早速用務員さんの買収をやってもらおうから。」

「結局買収って何をするんですか？」

「んーとね、要はちよっとした雑用係。」

「雑用係？」

「まあ用務員さんのとこに行って『コンピューター研究部の者です』って言えば色々と指示が出ると思うから。そしたらその指示に従って。『もういいよ』って言われたらそこで任務終了、帰ってきていいよ。」

「言われるまで帰っちゃだめなんですね？」

「うん、でも一時間ちよつとで終わると思うから。心配しなくても大丈夫。終わったらお昼寝タイムだから。」

「お昼寝タイム？」

「そ、戦闘は徹夜でやるから今のうちに寝ておいてってこと。」

「はあ……」

そしてアイスを食べ終わった俺たちは用務員室へと向かっていた。

「すいませーん！ コンピューター研究部の物でーす！」

「あいよ、ごくろうさん。それじゃあさっそく仕事をやってもらうよ。」

用務員さんと思しき六十ぐらいのおじさんがもっそりと出てきた。

「さーて、それじゃあだな、とりあえずその嬢ちゃんは流しにたまつてる洗いもんを片付けてくれい。背の高い方の兄ちゃんは全部の教室を回ってゴミ箱の中身を捨てといってくれ、ポツチャリ君は俺の肩たたきでもやってもらおうか。」

「はい！」

「了解っス。」

「はあ……わかりました。」

そういうわけで俺は全ての教室のゴミ箱の中身を捨てることになった。そして教室を回っている途中、廊下で小金井さんと籠原先輩に出くわした。

「おや、頑張ってるね。」

「おつかれさま。」

「あ、どうも……ところで先輩たちはなにやってるんですか？」

「カメラを設置してるんだよ。」

「カメラ？ なんに使うんですか？」

「まあいろいろとね、ところで代々木君は何をやらされてるんだい？」

「俺ですか？ 全部の教室のゴミ箱の中身を捨ててるんです。」

「あちゃー、そりゃまた面倒な仕事だね。」

「はあ……そうですね……」

「じゃあ非常に非効率なやり方をしている代々木君にアドバイス、それぞれの教室のゴミをどれか一つのゴミ箱にまとめてから捨てるに行けば効率アップ。」

「……なんでその方法に気づかなかったんだ、俺……」

「まあ良かったじゃないか、早めに気がついて。……どうでもいいけどさあ、夏休みの時の教室のゴミ箱ってたまーに『発酵』してなかなか『スバラシイ』臭いを撒き散らしてることがあるんだよね」
「小金井くん、もうちょっと手を動かしてもらえととっても助かるんだけど？」

「おっと、ごめんごめん。……それじゃあ代々木君、頑張って。」

「……ではまた後で。ついでに普通にやる気が無くなるようなことを言わないでほしかったです……」

そして全てのゴミ箱を処理し終わった俺は用務員室へと戻った。

「ゴミは全部捨ててきました。」

「おう、おつかれさん。そうしたら次はどうするかな……そうだな、もうすぐ嬢ちゃんの皿洗いが終わるだろうから二人でその机の上に置いてある金持って買い物リストに書いてあるモンを買ってきてくれ。」

神田に肩たたきをさせながら悠然と指示を出す用務員さん。……あ、

肩揉みに変わった。疲れたんだな、神田。

「桜木、皿洗いはいつまでかかりそうだな？」

「すぐに終わるよ。後はお皿を拭くだけだから。」

「そうか、手伝おうか？」

「じゃあお言葉に甘えちゃおうかな。」

洗い終わって積み上げられた皿を布巾を使って拭いていく。この量

を見るからにはおそらくここ三日は洗ってないな……

「なあ、桜木……」

「ん？ なあに？」

「この皿の山、洗う前は異臭を発してなかったか？」

「え？ ぜんぜんそんなことなかったけど？」

「そうか……一応水で流すぐらいのことはしてあったのか……？」

「……よし！ これで終わり！ じゃあ代々木君、買い物に行こう！」

「わかった、ちょっと待ってくれ。」

机の上に置いてあるメモ用紙と現金を持って外に出る。外は相変わらず暑い、こんな中買い物に行かされるなんてついてないな……

「ところでどこに買いに行くんだ？」

「うーん、とりあえず学校前のコンビニじゃないかな？ ところでその買い物リストには何を書いてあるの？」

「うん？ えーっとだな……柿ピー、さきいか、メンマ、ハム、塩せんべい、おいしい○茶、な○ちゃん、そんなもんだな……」

「……なんかおつまみ系が多いね……」

「……やっぱそう思うよな……」

学校前のコンビニは校門を出て道路の向かい側にあり、うちの学生御用達のコンビニである。昼食を買い損ねた生徒が昼休みになるとよく弁当を買いに来るらしい。この店の売り上げの七割はうちが関わってるとか何とか、そんな噂もあるが、本当なのか……？

「さて、これで全部か？」

「うん、買い物リストに書いてあるものはこれで全部だよ。」

「よし、じゃあレジにいくか。」

そしてレジに行こうとしたとき、なんとなく見覚えのある人物がコンビニに入ってきた。……誰だっけ？

「桜木、今入ってきたやつ、なんとなく見覚えはないか？」

「え？ あれって級長じゃないの？」

「あ！ それだ。」

しかしなぜ級長がここに私服で？

こちらが声をかけるよりも先に級長がこちらに気づいた。

「おや、代々木君に桜木さん。こんな所で会うとは奇遇だね。」

「あ……ああ、つーかなんでメガネがここに？」

「……その呼び方は止めてほしいと何度も言ってる筈なのだが……まさか未だに君は僕の名前を覚えていないのか？」

「えーと、まて、今思い出すから………桜木、なんて言っただけ？」

「えーつとね………あれ？」

「……僕の名前を覚えていないのはクラスの七割に上ると聞いたから別に気にしないが、僕の名前はメガネじゃない、はまのひろゆき浜野博之だ。」

「……分かった、なるべく覚えとく……」

「まああまり期待はしていないから、無理に覚えなくても構わない。中学校時代からずっと同じ『メガネ』というあだ名だからな。」

「そうだったのか……」

こいつは絶対にメガネが顔の一部なのではなく、顔がメガネの一部に違いない……

「ところで君たちは何で制服でここにいるんだ？」

「あー、それはだな……部活でちよつとしたお使いつてとこだ。」

「部活？ 何部だ？」

「……コンピューター研究部、だ。」

「コンピ研か、それなら小金井先輩によろしく頼む。」

「へ？ お前小金井さん知ってんのか？」

「ああ、あの人は僕の中学の先輩だ。サボり癖と頭のよさ、ピアノの神がかった腕前で有名だった。」

「……なんか小金井さんらしいな……ってことはお前もしかして籠原先輩のことも知ってるのか？」

「なに！？ 籠原先輩までコンピ研にいるのか！？」

「ああ、そうだけど。」

「うーん、なかなか面白いことになってそうだな……」

「え？ 何かあったのか？」

「籠原先輩の伝説を知ってるか？」

「いや、知らん。なんだそれ？」

「いや、ここに入ってから変わってなかったみたいなんだが、籠原先輩に告白しても絶対にフラれる、という伝説があるんだ。」

「……初耳だよ……」

「なんせあの人はあの美貌と落ち着いた物腰、冴え渡る頭脳で中学校一モテる人だったからな、当然恋の病に侵されて告白する人間が後を絶たなかったんだ、しかしほぼ全校の生徒が告白しても誰一人として思いが届かなかった。でだな、ここからがミソなんだが籠原先輩に告白しなかった男子生徒は数人、その中には小金井先輩が含まれている。」

「……その流れでいくとお前も籠原先輩にコクったのか？」

「ああ、そして見事に撃沈したがな。で、話を戻すがその告白しなかった生徒は小金井さんを除くといわゆるネクラってやつでな、消去法で籠原先輩が好きなのは小金井先輩ではないか、といううわさがまことしとやかに囁かれていたんだ。もっとも当の小金井先輩は知らなかったみたいだな。」

「……で、それがどう関わってくるわけだ？」

「まあそうあせるな、僕に喋らせてくれ。さて、小金井先輩は成績はしょっちゅう学校をサボるのにもかかわらず学年トップの天才、さらに人格者でもあるから意外とモテるんだな、これが。」

「……人格者……には見えないんだが……」

「確かに普段の行動からは想像できないかもしれないが、何か困っている人を見ると自分から進んで力になってくれる人なんだ、あの人は。……まあ九割方は気分で決まるが。」

「……そうだったのか……」

「で、籠原先輩の話に戻るが籠原先輩は普段は何に対してもクールに振舞っているんだが、小金井先輩にからかわれた時だけはそのクールさがどこかへ行ってしまうんだ。おまけに小金井先輩が学校に

いない日はメールで連絡を取っている、という噂もあってだな……」

「それなら本当だぞ、コンピ研に入ったばかりの頃に見た。」

「おおっ！　やはり本当だったか！　これは一大ニュースだ、早く同志に知らせてやらなければ！」

「同志って……」

「『籠原先輩の本当の気持ちを探る会』の同志のことだ。メンバーになるには籠原先輩に告白してフラれることが条件だ。」

「……ストーカー集団じゃないよな……？」

「失礼な、皆木っ端微塵に玉砕した者達だ。もう再起するほどの元気は残っていない……話がそれすぎたな。長々と話して済まない。要は籠原先輩は小金井先輩が好きだから誰の告白にも応じない、といった話なんだ。」

「……マジかよ……」

「ああ、だが肝心の籠原先輩に対してそんなことを聞く勇氣のある者はいないからあくまで一説でしかないがな。」

「一説って……他にも何かあるのか？」

「ああ、おそらくはモテモテの籠原先輩に嫉妬した女子の誰かがが流したうわさだと我々は推測しているんだが、籠原先輩が実はレズだという説だ。」

「……嘘だよな？」

「ああ、これに関しては実際に本人に聞いてみた勇者がいてな、『あなたは私をなんだと思っているの？』と恐ろしく冷ややかな目とともに言われたそうだ。」

「……聞いたのか……」

「聞いたから分かるのだが、ちなみにその勇者はあまりの恐ろしさに三日間寝込んだそうだ……まあ、それから特に大きな動きがあったわけではないから我々としても行動が取れずに困っていたところだ。」

「お前らの中に逆恨みして小金井さんにケンカを売ろうってやつはいなかったのか？」

「馬鹿を言うな！ あの人に喧嘩を売って無事で済む訳がないんだ！ 聞いた話だが、かつて小金井先輩が中学に入学したばかりの頃、喧嘩を売ったやつがいたらしいんだが、その日を境に学校へ来なくなったらしい。噂では怪しげなブツを投与されて重病にかかりどこかへ療養に行ったとか、精神が崩壊して精神病院送りにされたとか……そのほかにも……ああ、想像するだけで身の毛がよだつ……」

「……こ……怖いな……」

「ああ……それと小金井先輩に関しては誰が好きだとかそういうった噂が全く流れてこないんだ。もともとあの人はあまり掴み所がない上にそういう質問をしてもさらっと流されてしまうんで仕方がないとは思うのだが……まあいずれにしても二人とも心のうちを探るのはほとんど不可能に近い。我々としては早めに決着がついてほしいところなのだが……」

「……そうか、他になんかおもしろ情報はないのか？」

「そうだな……例えば小金井先輩に告白すると『君は僕のことを何にも知らないよ』と言われて断られるとか、か？ むしろ代々木君の方が色々面白い事を知ってるんじゃないのか？」

「あー、そうだな……籠原先輩、胸のサイズのことを気にしてる、とか？」

「？ そんなことはないはずだが？ 似たようなことを言ったやつがいたらしいが、キツパリと『それが何か？』と言われたそうだ。」

「あれ？ じゃあおかしいな。小金井さんが似たようなことを言った時はメチャクチャへこんでたぞ。」

「うーむ、だとするとそれは籠原先輩が小金井先輩に対してだけとる特殊行動の一つだな。……そうだな、例えば小金井先輩と籠原先輩と一緒にどっかの花火大会に行った、という噂に関しては何か知ってるか？」

「そうだな……そういや今日の昼メシの時に小金井さんが祭りの時はいつも籠原先輩が浴衣だとか言ってたな。あとお前は小金井さんと籠原先輩の家が隣同士ってのは知ってるか？」

「浴衣の情報は貴重だな、それと小金井先輩と籠原先輩が隣同士というのは有名だぞ。さらに言わせて貰えば家族ぐるみで付き合いがあり仲がいいらしい。」

「……お前らはそういう情報をどこから仕入れてくるんだ？」

「なに、小金井先輩の情報網には劣るがこちらは人数勝負だ。人が多ければ自然と情報も集まる。」

「……そうかい……っと、いけね、俺らそろそろ会計して帰るわ。」

「そうか、長々と済まなかったな。そういえば今日は早めに学校から帰った方がいいぞ。」

「ん？ 何でだ？」

「十年ぐらい前からだったか、毎年七月の最後の週の何曜日かの夜には学校から不思議な声がするんだ。」

「不思議な声？」

「ああ、どうも戦争でもしているかのような声なんだが、なんでも戦時中の兵士の亡霊が甦って戦争をしている、なんて噂だ。」

「……ものすごい心当たりがあるがきつと言わない方がいいだろう……」

「そ……そうか。でもなんでそんなことを知ってるんだ？」

「なに、僕の家は学校の目の前だからな。ちなみにこのコンビニの上だ。」

「……そうだったのか……」

買い物を済ませて用務員室に戻る途中、桜木からある提案があった。

「ねえ、代々木君、わたしたちで小金井先輩と秋乃先輩にカマかけてみない？」

「はい？ なんだそりゃ？」

「だから！ 好きな人いますか？ って聞いてみるの、小金井先輩に。」

「それはそれでおもしろそうだけど上手くいくか？」

「だめだったらしょうがないから諦めよ、ね？」

「……分かった、やってみるか。」

そしてだいぶ遅くなったが用務員室に到着。

「すみません、遅くなりました。」

「おう、おつかれ、気にすんなって。さて、んじゃあお釣りをくれい。それとお前さんたちが買ってきたな○ちゃんは飲んでいいぞ。」

「え？ いいんですか？」

「おうよ、はなっからそのつもりだよ。ほら、飲んだ飲んだ。」

「じゃあありがたく、いただきます。」

「……プハーツ！ 一仕事した後のジュースはうめえ！」

「何気に神田が一番大変だったんじゃないのか？」

「おう、代々木たちが遅いから辛かったぜ。」

「……スマン、なんかスマン……」

「そんなに怒っちゃいないぞ？」

「そういえば用務員さん、やっぱり校内でちょっとした戦闘なんかされたらやっぱり迷惑ですよね？」

「んー、後始末はアニ研の人が手伝ってくれるし、カメラを通して君たちが戦ってるのを見てるのもなかなか面白いから五分五分ってとこかねえ……」

「あのカメラってそのためだったんですか？」

「いんや、本当はコンピ研の人たちが使ってるものなんだけど折角だからってことであれを通じて見させてもらってるんだ。」

「そうなんですか……」

「さて、それじゃあこの辺でもう仕事はおしまい。ご苦労さん。」
「やっ」と雑用係から解放された俺たちは部室へと戻った。

「戻りました。」

「おっ、おつかれさま。」

「おつかれさま、大変だった？」

「ええ、まあ。」

先輩たちはパソコンに向かってなんだか知らないが作業をしている。

「あの一、小金井先輩！」

「ん？ 何？」

「小金井先輩、好きな人っていますか？」

桜木がそう言った瞬間、確かに籠原先輩の動きが一瞬固まった。その後も聞き耳を立てているからなのか手が止まっている。

「んー、そうだねえ……よく分からないや。」

「え？ よく分からないんですか？」

「うん、自分でも自分のことが良く分からないから、そういうことも分からない。そういう桜木さんは誰かいるのかな？」

「わたしですか？ ……秘密です。」

籠原先輩の手が再び動き始めた。……やっぱりクロなのか？

（ねえ、代々木君、やっぱり怪しいよね？）

桜木が耳打ちをしってくる。

（……だな。）

「さあて、籠原さん、そっちの具合はどう？」

「……大丈夫、全部のカメラが問題なく動作してるわ。」

「了解、じゃあこっちも仕上げに入ろう。あ、みんなもう寝てていいよ。」

「あの一、寝るって言うてもどこで寝るんスカ？」

「椅子の上に決まってるじゃない。仮眠なんだから。」

「マジっすか……」

「そんなに布団で寝たかったら保健室に行ったら？ ベッド空いてると思うよ？」

……なぜか妙にからかわれているような気がするんだよね……

「いや、疲れたからもうどうでもいいっス……」

「そう？ じゃあお休み。」

「みんな、おつかれさま。ゆっくり休んでちょうだい。」

そしてしばしの間仮眠タイム。その後俺たちが目を覚ましたのはなんと夜の七時だった。

「うわっ！ 寝すぎた！」

「ぬおっ！ 今何時だ？」

「そんなに慌てなくても平気だよ、それより桜木さんを起こしてもらえるかな？」

俺たちは慌てて飛び起きたが、桜木は眠り続けている。……けっこうかわいい寝顔を見て一瞬ドキッとしたが、このまま見蕩れていると何を言われるかたまったもんじゃない。

「おーい、桜木、起きろー。」

「ふえ？　もう朝？」

「いや、まだ夜にもなってないぞ。」

「あれ？　そういえばお楽しみがまだだもんね。」

「あの一、桜木さんもいいんですけど籠原先輩は起こさなくていいんスか？」

「うん、籠原さんは六時ぐらいまでずっと作業を続けてたからさつき寝たばかりなんだ。」

「……それを知ってる小金井さんは寝たんですか？」

「寝てないよ、僕はそんな必要はないから。」

「……大丈夫なんですよね？」

「問題ないよ、たまーに徹夜するから。」

「……そういう問題じゃないと思うっス……」

「まあ、それはさておき、晩ご飯はどうする？」

「あの、それよりもパパとママに連絡しないといけないと思うんですけど……」

「その心配ならないよ。君たちが寝た後に僕と籠原さんで連絡しておいたから。」

「……そうっスか。」

「で、晩ご飯はどうするの？　コンビ二弁当でもよければそれが一番ありがたいんだけど。」

「それでいいです。」

「はい、決定。じゃあ当分の間は好きなことをしていいから。」「了解っス。」

そして気ままに自由時間を過ごし、小金井さんが籠原先輩を起こしたのは夜の九時になってからだった。

「籠原さん、起きて。」

「……あれ……今何時……?」

「もう九時だよ。」

「……いけない……そんなに寝てたのね……」

「晩ご飯買いに行くから、準備して。」

「わかったわ。みんな、疲れはとれた?」

「ええ、おかげさまで。」

「じゃあ行きましょう。」

本日三度目のコンビニへ。

「僕は冷やし中華にでもしようかな、でもそばも捨てがたいな。」

「オレは断然冷やし中華っス!」

「うーん、じゃあ僕はそばにでもするかな。」

「私もそばにしようかしら?」

「わたしは冷やし中華にします!」

「俺もそうしようかな……」

結局先輩方はそば、俺たちは冷やし中華、ときれいに分かれた。

「さーて、じゃあ戻って早く食べよう。」

「おや、小金井じゃないか。」

裏科学部再び。例の……岡本さんと片岡さん?

「岡本に片岡か、何やってんの?」

「お前たちと同じように夕飯の買出しだ。……そういえば秘境部の連中がお前を探していたぞ。」

「あつ、いっけね! そういえばあいつらが来るのを忘れてた!

サンキューな、岡本。みんな、急いで戻ろう。」

足早に、というかもはや一般人の小走りレベルの速さでコンビニを出て行く小金井さん。当然誰も追いかけてなかった。

「相変わらずメチャクチャ速いっスね……」

「……あれも一種の才能なのかしら……?」

「さあ……?」

とりあえず急いで部室に向かう。そして部室のドアを開けると、そ

こには小金井さんと共に迷彩服のムキムキマッチョな男が三人いた。
「うおっ!? 自〇隊!?!」

「違うよ、彼らが秘境部の人たち。今夜の戦闘に参加してくれる最高の助っ人だよ。右から巖根君、軍畑君、御嶽君。」

「先に御紹介に預かりました秘境部の者です。以後お見知りおきを。」

「あ……はい……」

名前までいかつい人たちだ……無論口には出さないが……

「今夜は頼むよ。君たちには期待してるから。」

「こちらこそ、『ボス』や『皇帝』の通り名をもつ小金井さんにお招きいただき光栄の極み、必ずやご期待に応えましょう。」

「そんな硬くならなくってもいいのにさ。……そういえば倉賀野はどうしたの?」

「はっ! 部長でしたら只今単独富士登山に挑戦しております。」

「そうなんだ、確かにアイツならそれぐらいやりそうだね……まあ今夜はよろしく。十一時半にここに集合だから。」

「はっ! それでは失礼させていただきます。」

そう言って秘境部の人たちは部室から去っていった。つか『ボス』はまだ分かるんだが『皇帝』って何なんだよ……ついでに言えば秘境部にしろ裏科学部にしろ変な言葉遣いする人が多い気がするな……

「さーて、じゃあ晩ご飯にしよう!」

晩ご飯は昼に比べればあっという間に終わってしまった。その後は作戦の細かい内容をずっと話し込み、気がつけば十一時二十分になっていた。

「よし、これで作戦の説明はおしまい。みんな、頑張ってくれよ?」

「イエッサー!」

「わかりました〜!」

「わかったわ。」

「了解です。」

「さて、そろそろ助っ人たちがやってくるはずだからみんなそこら辺をチャチャッと片付けちゃって。」

そして十一時半を回る頃、ヤバめな助っ人たちが続々とやってきた。「いらっしやい、これでみんな出揃ったかな？」

「裏科学部は揃っている。」

「秘境部も同じく。」

「よし、じゃあ作戦の最終確認をやろう。人の組み合わせに関してはあらかじめ伝えてあったはずだから省略、で、基本的には敵を見つけたら即撃っちゃって構わない。ただし籠原さんの指示はよく聞くこと。弾はできるだけ大切にしてほしいんだけど、無くなっちゃったら籠原さんに報告して。そうしたら籠原さんが弾の備蓄ポイントまで誘導してくれるから。あとは部室は絶対死守、ここを乗っ取られたら指示系統が壊滅するからね。……そんなもんなかな？ 質問はある？」

「質問だが我々重装部隊は攻撃には出れないのか？」

「それは籠原さんが判断して前線に投入する。だけど開始直後は部室を守ってて。」

「了解した。」

「ついでになんか塩素臭いんだけど？」

「なに、気にするな。ちょっと混ぜるな危険をやっていたただけだ。あと我々からの注意だが決して理科室には入らないように。」

「？　なんかあったっけ？」

「理科室には我々が多数の罠を仕掛けた。うかつに立ち入ったのならどうなっても責任は取れん。ぶっちゃけ誰かがついとうっかり理科室に入ってトラップが作動するまで我々も入れなくなってしまったというわけだ。」

「……そうかい……みんな聞いたね？　……他に質問はない？　ないなら小型無線機を配るから。」

小金井さんは机の上に置いてあった小さな機械を次々と手渡していく。

「持ったらイヤホンを耳に入れて、これから通信テストをするから。準備はいい？」

「大丈夫です。」

「よし……あー、あー、聞こえてる？」

「聞こえてます。」

「籠原さん、位置情報はちゃんと表示されてる？」

「……ええ、問題ないわ。」

部室にあったパソコンのモニターは一ヶ所に集められ、画面には一台だけ学校の見取り図、そのほかにはカメラからのものと思われる校舎内の映像が映し出されていた。

「よし、戦闘開始まであと五分……みんな、気を引き締めていくよ！」

「はい。」

刻々と開戦の時が迫る。

「……五……四……三……二……一……零！」

小金井さんのゼロカウントと共に開戦を伝える笛の音が響き渡った。……誰が吹いてんだ？

七月三十日、午前零時、戦闘開始……

第8話 (実はさあ、この話って……うわ、なにするやめ(r y) (前書き)

というわけで久しぶりに交信……もとい更新した気がします。

例によってサブタイの○の中の言葉に深い意味はありません。と
いかもはや完全に遊んでますので(笑)

第8話 (実はさあ、この話って……うわ、なにするやめ(r y))

サバイバルゲームが始まった。

戦闘開始の合図と共に秘境部の人たちは誰よりも速く、音を立てずに部室を出て行った。

「じゃあ健闘を祈るよ。」

続いて小金井さんがスナイパーライフルを片手に部室から出て行く。

「よし、行くか、桜木。」

「うん、出撃〜!」

ややハイテンション気味な桜木と共に部室を出る。俺たちに割り当てられた初期配置は二つある階段のうち部室に近いほうを上がった四階の廊下だ。指定ポイントについた俺たちは指示通り無線で報告する。

「もしもし、代々木です。いま初期配置ポイントに着きました。」

『了解です、では健闘を祈ります。』

籠原先輩の話し方もいつものようではなくどこか事務的だ。

「桜木、敵は見えないよな……桜木？」

「きつ……きゃあああああ! でたあああああ!」

バババババツ、と銃声が響き渡る。

「なっ! 落ち着け! 何が出たんだ?」

「いっ……今そこになんかいた……」

「……? 何もいないぞ?」

「え? でも今確かにオバケみたいなのが……」

「……学校の怪談、ってヤツか? トイレの花子さんとか理科室で笑う骸骨とか、音楽室でひとりでに鳴るピアノとか……」

「やっ……やめて〜!」

「……もしかして、桜木ってそういうのダメ系?」

「……………うん……………」

「……そうだったのか、意外だな。つーか何で今まで言わなかったんだ? 言ってたら籠原先輩と一緒に部室に居れたかもしれないのに。」

「……だって……そんなの言うの恥ずかしいんだもん……」

「……………女なんだし別にいいと思うんだが……」

「そ……そう? でも代々木君だったらそんな子は嫌じゃない?」

「……そんなことは無い。」

もちろん怖がりな女の子のほうが男としてはなんつーか守りたくなるというか、そそる、ということは口が裂けても言わないが。

「そう、なの? それだったらもっと早く言っておけばよかった……」

「別に桜木一人でいる訳じゃないんだし、そんな怯えることはないって。」

「……うん、ありがと……」

『もしもし、こちら司令室です、聞こえますか?』

「あ、はい。聞こえてます。」

『四階の廊下、北側より敵が接近中。至急応戦してください。』

「聞こえてたな? 桜木。」

「うん、大丈夫。」

廊下の反対側に目を凝らすと確かに人影のようなものが動いている。だが暗いせいで距離が上手くつかめない。

「桜木、敵がいるのは見えるよな?」

「うん、見える。」

「ここで待ち伏せするか?」

「そのほうがいいと思うよ。」

「よし、そうするか。」

物陰に隠れて待ち伏せをする。二十メートルほどの距離まで近づい

てきた敵の姿はなんと甲冑に身を包んだ人間だった。

「籠原さん……相手が甲冑なんですけど……」

『心配しないで、それはハリボテの甲冑だから強度は無いわ。安心して撃っちゃって。』

「分かりました。」

そして甲冑の騎士に狙いを定める。

「桜木、一斉射撃で仕留めるぞ。」

「うん。」

向こうはまだこちらに気づいていない。

「撃てっ！」

トリガーを引く。弾の嵐で相手がよろけ、倒れる。

「やったか……？」

そっと相手に近づいていく。すると倒れていた相手が起き上がり、手にしていた剣でこちらに攻撃を加えてきた。

「うわっ！」

「覚悟っ！」

とそのとき、突然相手がまるで頭に何か当たったかのように倒れ、今度こそ動かなくなった。

「な……何が起きたんだ……？」

『代々木君、春香ちゃん、大丈夫？』

「ええ、大丈夫です。」

『うろたえなくても弾の主は小金井くんよ。窓の外、体育館の屋根の上にいるわ。』

言われるままに窓の外を見ると、確かに体育館の屋根の上に人がいる。おまけにこっちに向かって軽く手を振っているんだが……そういえば窓って開けてあったんだ。

「……あれ、小金井さんだよな……」

「……うん、わたしもそう思う……」

『わかった？ あと敵を撃つ時はなるべく頭を狙うこと。それでは引き続き警戒を怠らないように。』

「了解です。」

「わかりました。」

そして俺と桜木は薄暗い廊下を進んでゆく。

その頃部室前……

「神田君、敵は見えるか？」

「いえ、見えないっス。」

「了解した。片岡、今のうちにイモを込めておけ。」

「アイアイサー。」

片岡先輩が弾を込める。^{ジャガイモ}まだ敵が見えていないのでポテトキャノンとやらの威力は未知数である。

『重装部隊へ、二階廊下を敵兵が二人進撃中。迎撃用意をお願いします。』

「了解した。片岡、圧縮空気の使用はできているな？」

「はっ。既にいつでも撃てる状態です。」

「よし、では暗視スコープで目標を捕捉してくれ。」

「はっ！」

「神田君は我々がぶっ放した後に弾込めの時間を稼いでくれ。」

「了解っス。」

「敵捕捉しました！」

「よし、発射！」

ポシュッと音がして砲身に込められていたジャガイモが飛んでいく。その先で『ぐわっ！』と声がして何かが倒れる音がした。

「弾込め開始！ 頼んだぞ、神田君！」

この裏科学部特製のポテトキャノンは一発撃ってから次の弾を撃つ準備が整うまで三十秒ほどかかる。その時間を稼ぐのが今回のオレの役目である。そのためにオレが持っている銃は連射速度を上げ、代わりに威力と命中精度を下げているらしい。

「うおおお！」

銃を正面に向けて撃ち続ける。敵に当たらなくてもいいから牽制の役目が果たせればそれでいい、というのは結構気楽なもので、要はとりあえず前に向かって闘雲に撃てばいいのだ。

「……よし、準備完了！ 神田君、銃撃やめ！」

岡本先輩の声で銃撃を止めて後ろへ下がる。

「……敵捕捉完了、発射！」

再びボシュッと音がしてイモが飛んでいく。一撃必殺級の威力を持つこの兵器、当たれば即座にジ・エンドなのだ。こんなモノを作ってしまうとは……

「あのー、岡本先輩？ この兵器を思いついた人って誰なんスか？」

「うむ？ ポテトキャノン自体は前から我々も知っていたがエグゾーストキャノンをくつつける、というアイデアは小金井が言い出した。」

「あの人って……何者なんスか……」

「うむむ……まあバカだな。」

「……そうっスか……」

「そういえば先程聞こえた悲鳴は何だったのだろうか……」

「……オレには桜木さんの声に聞こえたっス。」

四階の廊下の中程……

「敵、いないな……」

「うん、いないね……秋乃先輩、敵いないんですか？」

『ええ、今のところ四階廊下にはいないわ。でも警戒は緩めないこと。』

「わかりました。」

さて……ここでこのまま時間を潰してもいいのだがさすがにそれは退屈だ。

「籠原先輩、進撃許可をもらえませんか。」

『残念だけれども今はまだ出せないわ。三時を過ぎたら攻撃に移るからそれまでは四階経由の敵の進撃を防いで、それが今のあなたたちの任務よ。』

今現在午前十二時三一分、まだ二時間半もある……

「……わかりました。」

『では引き続き警戒を怠らないように。それと地形を生かすこと。』
籠原先輩との交信終了。さて……

「桜木、お前俺たちが上がってきた階段のところで一人で見張りつてできるか？」

「え……ダ……ダイジョウブ、ダイジョウブだよ……」

「……そういえばオバケが駄目だったな……しょうがないか。」

「ご……ごめんなさい……」

「気にすんなって。」

「う……うん、ごめんなさい……」

「だから何で謝るんだよ？ 気にすんなって言っただろ？」

「えへへ……そうだね……ありがとう……」

「はいはい、どういたしまして。」

その時どこから『うおぎよあああああああ！！！！！！！！』
という絶叫が響いてきた。

「なんだ？」

「……まさか……オバケ！？」

「……んなわけないだろ。」

ということで正解は無線機で聞いてみることにした。

「もしもし、籠原先輩？」

『はい、どうかしましたか？』

「さっきものすごい叫び声が聞こえたんですけど、なんなんですか？」

『……裏科学部の人が『多分誰かが理科室に入ったんじゃないか？』
って言ってたけど……』

「そうなんですか？」

『ちよっと待ってて、いま岡本君に繋ぐから。』

『もしもし？ 代々木君とやらの繋がっているのか？』

「あ、はい、えーっと……岡本さん？」

『そうだ、で、用件はなんだね？』

「えーっとですね、さっきの絶叫は理科室に誰かが入ったからだっ
ていう話を聞いたんですけど？」

『ああ、おそらくそうだと思われる。なんせ裏科学部員が好き勝手
なトラップを個人単位で多数仕掛けたからな、正直なところこちら
も正確なトラップの数は把握していない。』

「……例えばどんな感じのものを？」

『手前が仕掛けた物は個人所有の人体骨格模型にちよっと細工を施
して骸骨がうすぼんやりと光りつつアゴをカタカタ鳴らしながら追
いかけてくるような物を仕掛けた。』

「……なんというオモシロ兵器！」

『この程度ならまだまだヌルいぞ？ 加減を知らない一年の部員は
なんだったかな……ああ、そうだ、DOZAE MON 噴霧装置かな
んかを仕掛けていた気がするな。』

「……してそのドザエモンとは？」

『詳しくは色々アレなので言えないが、まあ読んで字の如くだ。』

「はあ……」

『ちなみに暗闇での敵の検出には赤外線センサーを使っている。ま
あ、仮にネズミか何かが出て装置が誤作動したらそれまでだがな。

一応作動条件を床面ぎりぎりに設置したセンサーと床上二十センチ
に設置したセンサーの同時反応に設定したから問題ないとは思うが
……』

「……とりあえず法律に触れてはいないですよね……？」

『うーむ、さりげなくDOZAE MONはアウト気味だった気がする
が、まあバレなければ問題は無いだろう？』

「その発想はマズいでしょう！？」

『バレない犯罪は犯罪に非ず、だ。まあ我々もその辺はちゃんと弁えているつもりだから心配御無用。法律を犯したらそれはマッドサイエンティストではなくただの犯罪者でしかないしな。』

「……色々と問題を抱えまくってません!？」

『どうでもいいがあんまりギャーギャーと騒いでいると敵に居場所を捕捉されて襲われるぞ?』

「……先に注意してほしかったです!」

『自分の命ぐらい自分で守りなさい。それでは通信を切るぞ。』

裏科学部の岡本さんとの通信が切れると、籠原先輩がやや呆れ気味の声で敵が接近していることを伝えてきた。

『……廊下の反対側より敵が接近中、応戦用意されたし……代々木君、少しうるさいわよ?』

「……すいません。」

それから三十分ほど過ぎただろうか? 籠原先輩からの指令で俺と桜木は廊下の巡回をしていた。

「やれやれ……まだ始まってから一時間ぐらいしか経ってないんだよなあ……」

「うん、なんだか時間が経つのがすごく遅く感じない?」

「敵はちよこちよこ来るのにな……」

その直後、突然桜木が立ち止まった。

「……ね、ねえ、代々木君……何か聞こえない?」

「何が? 敵の足音でもしたのか?」

「ううん、そうじゃなくって……なんだろう……」

「どれどれ?」

耳をすませてみると……

「……ピアノの音?」

「……やっぱり？」

「……なんでだ？」

「ま……まさか夜中にひとりでに鳴る音楽室のピアノ!？」

「ちょっ！ 声でかいって！」

「はわわわわ！ 出た〜!？」

「んなわけあるか！」

だが音の聞こえてくる方向を考えると、確かに音楽室から聞こえてきているようだ……

「……よし、調べてみるか……」

「ええ〜っ！ 行くの〜!？」

「だから声でかいって！」

「……ほんとに行くの？」

「……確認しなきゃ本当に学校の怪談になっちゃうしな……」

「も……もしも本当に誰もいなかったら……」

「考えるな！ 考えるから出るんだ！」

とは言ったものの、本当にピアノの音が聞こえるのだからシャレにならない。階段を上って音楽室に近づくほどはつきりと聞こえてくるので、まず間違いなく誰かが弾いているに違いない……

音楽室のドアの前に立つ。……確かにピアノの音が聞こえてくる……しかもなんだか不気味な曲だし……なんかの冗談だよ……な？

「……確かに鳴ってるな、ピアノ……」

「やっぱりオバケだよ……」

「いや、そんなはずはない、いくぞ！」

桜木にものを言わせる暇を与えずに、一気にドアを開けると……灯りがついていない音楽室は、ガランとしていて誰もいない。が、ピアノは確かに鳴っている。だが、入り口近くの窓以外にカーテンが引いてあるせいで、ピアノの周囲は完全に暗闇に包まれている。

「……誰がいるか？」

「……わかんないよ……」

「……よし……」

そして俺が音楽室の中に足を踏み入れた次の瞬間、何かが俺の首に回されていた。

「騒ぐな、騒げば即座におねんねしてもらう。」

「なっ!?!」

その「何か」は低く唸るような声で警告を発してくる。

「ここに迷い込んだのが間違いだったな。さあ、観念してもらおう。」

「桜木、逃げろ!」

しかし、桜木は逃げようとはしなかった。

「え? この人、秘境部の人?」

「うむ? ……なんだ、味方か。すまなかったな。」

そして俺の首に回されていた手が離れた。

「おい、小金井さん! あなたの後輩が迷い込んできました!」

『あゝ、そうしたらカーテン開けつつこっちに連れてきて。』

秘境部の人に連れられて、ピアノの方に歩いてゆく。カーテンが開けられるに従って、ピアノの前に誰かが座っているのが見えてきた。

「……小金井さん……なにやってるんですか……」

「ん? ちょっとしたイタズラ?」

「なんでまた……」

「いやー、深夜の学校でピアノの音が聞こえてきたら誰でも気になるでしょ? だからそうやって怖いもの見たさにやってきた哀れな子羊たちを秘境部の助っ人に殺してもらった。案外みんな来るもんなんだね。」

「……いや、本気で怖かったんですけど……」

「まあそこそこはご愛嬌♪」

「……そういえばさっき弾いてた曲は何なんですか?」

「あゝ、あれはリストの『鬼火』ってやつ。」

「……名前からホラーですね……」

「そう? 名前はそんなじゃないけどこっちのほうがもっとヤバイと思うけど?」

そういうなり小金井さんは一曲弾きだした。

……この曲は本気でやばい！

「……こっちのほうかはるかに怖いんですけど……」

「曲名は『調のないバガテル』っていうんだけどね」

「……これで後ろから脅かされたらやばいですね……」

「ヒーツヒツヒツ！」

いつのまにか俺たちの背後に回っていた秘境部の人々が脅かしてきた！！

「うわっ!？」

「×○△□○▽×!?!」

「……すまない、ちょっとした出来心だ。」

「や……やめてください…… 心臓にめっちゃ悪いです……」

「まあこれぐらいに慣れておけば大概のことには驚かなくなるだろう？」

「そんなのに慣れたくないです……」

「うむ、確かに。女性には止めておこう。」

「男には!？」

「何をためらう必要がある？」

「……助けてください、小金井さん。」

「ムリ。」

「なんで即答なんですか……」

「見る分には、楽しいから。」

「……ひどいですね。」

「まあ気にしない気にしない。それよりなんか聞きたい曲ある？」

「俺は特には。……桜木はなんかあるか？」

「……じゃあベタなんですけど、『月光』とかは？」

「ベートーベンの月光かな？ いけるよ。そうそう、ちなみにベートーベンといえばアレ。」

小金井さんが指差した方向にはおなじみの顔写真が……!?

「きゃあああ! 目が光ってる!?!?!」

「ゴメン、アレもイタズラだから。」

「……ほんともう勘弁してください……」

「うん、さすがにもうこれ以上は何もないから。じゃあいくよ?」

そして小金井さんは、ベーターベンの『月光』とやらを弾き始めた。

その一時間半ほど後部屋にて

『こちら代々木です。敵を一人仕留めました。』

「わかりました。後三十分程で進撃するからそろそろ準備をしておいて。」

『……すいません、補給用の弾の場所ってどこですか?』

「四階でいま代々木君がいる位置なら廊下の端の消火器ボックスの中が一番近いわ。」

『了解です。ありがとうございます。』

あらかじめ決めた突撃開始時刻が迫っている。そろそろ小金井くんを呼び戻さなきゃ……

『もしもし? 岡本だが小金井につないでもらえるか?』

「待ってて、今つながわ。」

パソコンで小金井くんと岡本君の無線機を会話ができるようにする。

「つながったわよ。」

『ありがたい。おーい、小金井、聞こえてるか?』

『聞こえてるより、そっちはどう?』

『幸いポテトキャノンなら絶好調だ。』

『そうか、ならあんまり心配しなくても大丈夫そうだね。』

『ああ、時に小金井、この会話は籠原さんも聞いているのか?』

『ん、どうだったっけ? こういうときは聞こえないようなプロ

グラムだったと思うんだけど………忘れた。』

自分が組んだプログラムのことも覚えてないの？ でもこういう時は大体本当に忘れてることが多いし、確かにこのプログラムを組んでいた時はかなり疲れてたけど、本当に覚えてないのかしら………全部筒抜けよ………

『そうか……お前らしいな。じゃあ聞こえていないと仮定して話そう。』

『何を？』

『正直暇でな、折角だから裏科学部特製ENGACHO弾でも撃とうかと思ってな。』

『やめてよ、後で突撃する時に味方が糞死するよ？』

『む……そうか、盲点だったな。』

『……撃つ前でよかったよ………』

『うーむ、それが駄目ならお前と喋って時間を潰すか。』

『なんかおもしろい話でもあるのかい？』

『小金井、ぶっちゃけた話、お前の好みの女の子ってどんな感じだ？』

『人にそういうのを聞く時は自分から言ったら？』

『我々裏科学部にはロリコンが多いが？』

『岡本もその一人ってことかい？』

『そういうことだ。で、どうなんだ？』

『そうだねー、髪の毛の長さは特にこだわりは無いけどあえて言うなら長い方がいいかなー。』

『ほう、他には？』

『んー、僕を気遣ってくれるってのは大きいかもね。』

『ほうほう、で？』

『えー、まだ言うのかよ………そうだなあ………騒がしいのはあんまり好きじゃないなあ………』

『そうか、ところで結婚相手には何を求める？ 俺は若さだが。』

『………さいでっかい、ずいぶん唐突に話題を変えるね………僕の場合

は料理が上手いっていうのは外せないな。』

『なぜだ？』

『だってまずい飯は食べたくないから。』

『何を言う、嫁の飯がマズい、といったネタもあるだろう？』

『そんなネタはいらないから毎日おいしいご飯が食べたい。』

『ささやかな願いだな。』

『後は、そうだね……やっぱり僕のことを深く知って支えてくれる人がいいな……』

『自分の全てを預けてもいい人、という訳か？ 意外にロマンチストだな。』

『全ては預けないよ、そんなことしたら相手にとって重荷じゃないか。』

『ふ……肝心な事は全部背負い込む癖、まだ直ってなかったのか。』

『……そうだね、いつまでも自分の中に溜め込んでしまうのは良くない、とは思ってるんだけどね……まあいいんだ、そうやって溜め込んだのものは音楽に乗せて吐き出せばいいんだからさ。』

『そうか。……ついでにだが、実際のところどう思ってるんだ？』

『ん？ 何を？』

『何って、籠原さんのことだ。お前の本心が聞いておきたい。』

『籠原さんか……そうだね、籠原さんは……』

『小金井くん、突撃開始時刻が迫っているから部屋まで戻ってきて。あなたが戻ってこないと重装部隊が出撃できないわ。』

『あ、ゴメン、すっかり忘れてた。今からいくから。』

……一瞬小金井くんの答えを聞くのが怖くなった。だから無理矢理会話を中断させてしまったけれど、私の本当の気持ちはどうなんだろう………いまさら考える必要もない、そんなものはとつくの昔に答えを出しているのだから……

「重装部隊、突撃準備を始めてください。あと十五分で突撃を開始します。」

『了解した。それと小金井との通信はもう終わったから切断してお

いてくれ。』

「了解しました。代々木君、春香ちゃん、突撃開始十五分前です。突撃配置についてください。」

四階の部室から遠い方の階段付近

「わかりました。」

籠原先輩から突撃配置に着くように指示が出る。俺たちの突撃配置とは四階の部室から遠い方の階段である。そこから突撃開始の合図と共に階段を降りて敵の本拠地を叩く、という作戦だ。

「桜木、準備はいいか？」

「うん、弾もちゃんと装填してあるよ。」

「わかった、じゃあ後は突撃開始時刻が来るのを待つだけだな。」
ほとんど真っ暗な廊下の中で静かに時を待っていると、まるで全身の神経が研ぎ澄まされていくように、今まで聞こえなかった様々なものが聞こえてくる。虫たちの鳴き声に混じって誰かが廊下を移動しているような物音が階下から聞こえてくる。

「……こうやってると結構いろんな音が聞こえるもんだな……」

そのとき、桜木が俺の服の少し引っ張った。

「ん？ どうした？」

「い……今廊下を誰かが歩いて……窓の外に出て行った……」

「は？ ここ四階だぞ？」

「……で、でも本当に今……」

「そ……そんなバカな……つーか廊下に人なんていなかったはずだぞ？」

「……だって向こうから歩いてきたわけじゃないんだもん……いつの間にかいて窓の外にいったんだよ……や、やっぱりもしかして……」

「や……やめてくれ、絶対にありえないから……」

「で……でも本当に見たんだもん……」

『突撃開始十分前です。小金井くんが部屋に到着しましたので重装部隊が配置につきます。皆さん、指定位置に着きましたか？』

「あの、籠原先輩、ちょっといいですか？」

『なに？　どうかしたの？』

「さっき四階の廊下って誰かいました？」

『え？　誰もいなかったと思うけど、あんまりよくは見てなかったわ。』

「……そ、そうですか。」

『……？　何かあった？』

「いえ、なんでもないんです……」

『そう？　それならいいけど……』

「……ねえ、代々木君……さっきのってやっぱり……」

「いや、決してそんなことはない、ないはずだ！」

「……こわい……」

ち、近い！　桜木、もう少しでいいから離れてくれ！　……でもこれはこれで悪くないと思ってしまうのは男の悲しい性なのか……

「……もし今オバケがでたら……代々木君はどうするの？」

「……そうだな、とりあえず叫んでみるか？」

「……あはは、代々木君らしいね。」

「そうか？」

「……ありがと、もう大丈夫だから……」

「……それならもうちょっと離れてくれると助かるんだが……」

「えっ？　……ひゃっ！　ご……ごめんなさい！」

「い、いや、別に気にしてないって……」

「はわわわわ！！！！　わたしなにやってるの！？」

「いや、まて、落ち着け！　そんなにパニックすることはないだろう！」

「あわわわわわ……」

なぜそんなにパニックになってるんだ！？　そこまで取り乱されるとこっちが困るわ！

「落ち着けて！ 何そんなに慌ててるんだよ？」

「ふえ！？ わたしなにやってるの！？」

「とりあえず落ち着けて……」

二回続けて似たようなことを言うな！ どれだけこっちがそういうことにならないように気を配ってると思ってるんだよ、まったく……はっ！ もしや大事なことから二度言ったのか！？ ……ってんなわけあるか！

「う……うん……すはー、すはー……も……もう大丈夫……」

「ホントかよ……」

とりあえず落ち着いてから突撃に備えるか……そう思った矢先に突然籠原さんから指令が入った。

『みんな！ 三階廊下にて多数の敵が出現！ 四階に向かっていきます！ 至急応戦して！』

「な……なんだって！？」

するとその言葉を裏付けるかのように階下から足音と雄叫びが響いてきた。

「マジかよ！ いくぞ、桜木！」

「うん、わかった！」

階段下に向かって銃を構える。駆け上がってきた人影に向かって撃つ。

「ぐわああああっ！！！！」

不意を撃たれたのか、あっけなく倒れる。

「やった！」

「気を抜くな、桜木！ まだ来るぞ！」

続いて二人、三人と敵が現れる。

「くそっ！ 数が多いな！」

倒しきれない……やばっ、弾が切れただと！？ ……しまった！ 替えの弾を込めておくのを忘れてた！ なんてアホなんだ、俺……

「桜木、少しの間でいいから時間を稼いでくれ！」

「わかった、やってみる！」

幸いなことに弾の詰め替えは数秒で終わるようになっていた。桜木が敵を抑えている間に弾の詰め替えを終わらせて戦闘に復帰する。

「よっしゃ、いくぞ！」

と銃を構えるのと同時にさらに四人ほど増援がやってきた。

「いや、待て、これはムリゲー……」

さすがにヤバイ、と覚悟を決めた瞬間、階下から迷彩服の男が現れ、瞬く間にその場にいた敵全員を仕留めてしまった。

「……ありえねえ……」

「す……すごい……」

「おお、君たち、怪我はないか？」

「ええ、おかげさまで……」

「そうか、それではこの先も気をつけて進むように。それではまた後で。」

突如として現れた秘境部からの助っ人は俺たちの横を通って窓から階下へ降りていった。

「……なあ、桜木、もしかしてさっきお前が見たって言うオバケの正体って……」

「も、もしかしたら秘境部の人だったのかな、あははは……」

「……とりあえず三階へ行こう。」

そして三階に下りる。そこでは廊下の中ほどに陣取ってどっかから湧いてくる敵を撃ち続ける。そして三十分ほどが経った。

「ふう……やっとな敵の攻撃が収まってきたな……」

「うん……そうだね、これでちよつとは休めるかなあ？」

「……気を抜くなよ。」

しかし、この時桜木以上に俺が気を抜いていた、ということには気づくことができなかった。なのでこっちに向かっていた桜木の背後から敵が忍び寄っていたことを知るよしもなかった。

『代々木君！ 春香ちゃん！ 敵が接近してるわよ！』

「え！？」

気づいた時には黒いフードをかぶった魔法使い風の男がすぐそこま

で迫っていた。しかもその手にはボウガンが構えられている。なぜ魔法使いの格好をしておきながらボウガン？ ……っと、そんなことを考えている場合じゃない、桜木が危ない！

「桜木、危ない！」

とっさに桜木の前に出る。

「ぐっ！！！！！！！！」

運悪くボウガンから撃ち出された矢が頭に命中する。……幸い先端にはゴム球が取り付けられていたようだが、衝撃で意識が遠くなる………だ………めだ………ここで……意識………を………失っては………

「！？」 代々木君！」

桜木の驚いた顔が薄れていく意識の中で最後に見たものだった。

「……木くん……代々木くん……」

なんだろう、誰かが俺の名前を呼んでいる………？

「……代々木くん……ひっく……ひっく……」

なんだ？ 泣いてるのか………？

「う……ん？」

「代々木くん！ 大丈夫！？」

徐々に意識が戻ってくる………そうだ………たしかあの時ボウガン野郎に撃たれて意識を失って………

「お……俺はどうなってたんだ？」

「代々木は気を失ってたんだよ。しっかりしろい。」

この声……神田？

目を開けると目の前には目を泣き腫らしている桜木の顔と心配そうに覗き込んでいる神田の顔があった。

「よかった……ほんとによかった……ひっく……」

「ったく、桜木さんに世話かけんなよ。つか代々木、お前今の状況把握してるのか？」

「へ？」

今の状況？ えーと、桜木と神田が俺の顔を覗き込んで、俺は横になって、頭の下に何かがあって……ん？ 何があるんだ？ 温かくて、柔らかいが……

「ちくしょおお！ 無意識のうちに膝枕体験だとお！ 許せん、断じて許せん、何でお前ばかりそんなオイシイ体験してるんだああ！」

神田の蹴りが俺に炸裂する！

「なっ！？」

いてえ！ ってか膝枕だど！？ ……慌てて身を起こすと確かに俺の頭があつたところには桜木の足があつた。にわかには信じられない、というか信じたくない……

「……………マジ？」

「……もしかして代々木くん、イヤだった……？」

「桜木さん、心配ご無用。男で膝枕を嫌がるヤツはいない！ 特に代々木はムツツリだから間違はなく心の中では喜びのあまりの打ち回ってるに違いない！ うらやましいぞコンチクショー！！」

そう言いつつ神田は全力で蹴りを繰り出してきた。

「いてえ！ 何なんだいきなり！ しかも俺を勝手にムツツリにするな！ それと桜木、あの後ボウガン野郎はどうなった？ 俺はどうなってたんだ？」

「あ、うん。あのね、秘境部の人が窓から入ってきてやつつけちゃった。それと代々木くんは一時半ぐらい気絶してたんだよ。」

「……そうか、とにかく桜木は無事だったんだな？」

「うん、その……ありがと、守ってくれて……」

「あ、いや、別に体が勝手に動いただけだから。」

「ちくしょおお！ さり気にポイントを稼ぐなあああ！ それに気を失ってたんじゃないかってただ単に寝てただけなんじゃないのかよおおおお！」

「お前はさっきから何が言いたいんだよ！ ……それより戦局はどうなってるんだ？」

「戦局ならばだな、敵は今現在本陣に立て籠もっている。そこで一時的に戦闘休止状態だ。」

なぜかそこには白衣に身を包んだ裏科学部の……岡本さんと片岡さんだっけな？ がいた。

「あれ？　なんで裏科学部の人がここに？」

「何言ってるんだ？　オレと裏科学部の人とはセットで動いてるんだぞ？　忘れたか？」

「……そういやそうだったっけ……」

「まあ、無事でなによりだ。早速籠原さんと小金井に連絡してやらなければな。……もしもし、こちら岡本だ。たった今代々木君が意識を取り戻したぞ。……ふむ、了解した、そう伝えておく。……というわけで籠原さんからの伝言だが、戦闘に参加できるなら一階まで降りて秘境部の連中と合流すること。無理ならば部室へ戻って来いとのことだが、どうする？」

「大丈夫です、一階に行けばいいんですね？」

「ああ、えーっと、桜木さんだったかな？　代々木君をしっかり見てやってくれ。少しでも異常があったら即座に連絡を入れてくれ、我々はちよつと取りに行かなければならないものがある。遅れて駆けつける。」

「わかりました、代々木くん、行こう？」

「ああ、わかった。」

立ち上がる。一瞬クラッときたが問題なさそうだ。

「よし、行こう。」

そして一階へ降りていくと、階段下で秘境部の人の内の一人が待っていた。

「代々木君だね？　怪我は大丈夫かい？」

「ええ、大丈夫です。」

「そうか、ならば良いんだ。」

「ところでこの後何をやるんですか？」

「ん、なに、ちよつと敵を炙り出すだけだ。今その準備をしに裏科

学部の方たちが準備をしている。」

「そうですか……」

『もしもし？ 代々木君？』

「あ、はい、代々木です。」

『大丈夫？ 特に身体に異常はないわね？』

「ええ、問題ないです。」

『じゃあこれからやることを簡単に説明するわ。まず裏科学部の片岡君が外から敵本陣に○涙弾を撃ちこむの。それに耐え切れなくなった敵が本陣から出てくるはずだから、それを今から裏科学部の人たちが持つていくガトリングガンで殲滅してもらうわ。』

「……いいんですか？ そんなモン使って？」

『問題かもしれないけど……でも裏科学部の人たちは一応越えてはいけない一線をしっかり弁えてるから大丈夫なんじゃないかしら？ それに日ごろの恨みを晴らすいい機会だし。』

「なんか物騒なワードが聞こえてくるんですけど……」

『だってあの人たちは日ごろから私に『コスプレしてくれ』ってことあるたびに言うってくるのよ？ 鬱陶しいことこの上ないわ！』

籠原先輩、こええ……

『いずれにしても戦闘はもうすぐ終わるから。』

「そうなんですか？」

『戦闘は日の出と共に終了よ。だから五時半ぐらいには終わると思っただけど。』

「そういえば俺って一時間半ぐらい気を失ってたんでしたね。」

『ええ、だからあと一時間ぐらいで終わりだから頑張ってちょうだい。』

「わかりました。」

そして俺が籠原先輩との交信を終えた直後に神田と裏科学部員の人々がガトリングガンを持ってきた。

「よし、じゃあコイツをやつらの本陣のドア前に設置するぞ。片岡は校庭に回っててくれ。」

「了解です。」

片岡さんがミニバズーカのようなものを持って校庭へと出て行った。

「……あれ、なんですか？」

「あれ？ あれとはなんだ？」

「いま片岡さんが持ってたヤツなんですけど。」

「ああ、あれは小型のエグゾーストキャノンだ。あれで○涙弾を撃ち込むのだよ。」

「……そうですか。」

「うむ、ではコイツを設置しよう。弾もたっぷり持ってきてあるから楽しい楽しいジェノサイドが楽しめるぞ。」

そして敵の本陣のドア前にガトリングガンを設置する。……って
うかこの人さりげなくジェノサイドと言った！

「……そういえば結局敵ってどれぐらいいたんですか？」

「うーむ、我々の情報ではどこからか助っ人を雇って六十人ぐらいだったらしいが。」

「ろ……六十人……」

「場合によってはさらに増えるかもしれん。ただ、いずれにしても我々に下っているのは皆殺しの指令だけだからな、一人残らず殺るまでよ。……さて、秘境部の方々、準備はよろしいかな？」

「ええ、いつでも構いません。」

「了解……籠原さん、こちらは準備が整ったから片岡に発射指令を出してほしい。」

『総員、戦闘準備をしてください。催○弾発射三秒前……二……一……発射。』

校庭の方から発射音がする。そして弾が敵陣内に到達してから数秒としないうちに中から何人もの敵がのた打ち回りながら出てきた。

「うぎよおおあああああああ！！！！！！ 目が！ 目があああああ
あ！！！！！！！！」

「はい、いらっしやうい♪」

岡本さんがガトリングガンで敵陣から転がり出てきた人を片っ端か

ら仕留めていく。……なんというか、すごく楽しそうだ……若干クレイジーな笑みを浮かべているのは気のせい……だよな!？」

「突撃!」

さらにガスマスク（おそらくは裏科学部員がつけていたもの）を着した秘境部の人たちが弾幕の合間を縫って敵陣へと突入していく。

「……なあ、神田、桜木。なんか相手が哀れになってこないか?」

「……そうだな……さすがにここまで来るとやりすぎ感も否めないが……」

「……でもあれの攻撃目標がわたしたちじゃなくってよかったな、っていうのが正直な感想かな。」

「……………だな……………」

○涙弾が打ち込まれてから五分と経たない内に敵陣は完全に制圧された。

「制圧完了。」

秘境部の人たちが敵陣から出てくる。

「あ、ドア閉めといってもらえるかな? ○涙剤が漏れてくると困るから。」

「……そんなにヤバいんスか?」

「うーむ、一応そこまでの量を投下したわけではないが念のためにな。」

「○涙剤っていったい何を投下したんですか?」

「昼間に川原で合成していたものだ。」

「あの2・ナントカカントカってやつですか?」

「そのとおり。まあ詳しい説明はしても理解できんと思うので省略させてもらう。」

『敵陣の制圧ご苦労さまでした。それでは残兵の掃討に移行してください。』

籠原さんより再度指令が下る。

「よし、それでは校舎内の敗残兵狩りに出かけようではないか。」

「敗残兵って……あっちの負け確定ですか……」

「だろう？ たしかにまだ決着がついたわけではないが。」

『重装部隊は一階と二階、代々木君と春香ちゃんは三階と四階の敵を探し出して倒すこと。秘境部の人たちは好きなように動いて構いません。それではあと一時間弱ですから頑張ってください。』

「それでは神田君、敵を虐めに行こうではないか！」

「イエッサー！」

神田……だいぶ毒されてるな……

「代々木くん、大丈夫だったら行こう？」

「ああ、心配ないから、行くぞ！」

残兵探しは意外と難航した。とにかくヤツらは本陣が陥落した、ということを知らないので抵抗する気満々なのである。しかしさっきの経験と秘境部の人の助けを借りて確実に残兵を仕留めていく。意外なところでは掃除用具入れの中に隠れていた敵もいた。ちなみに秘境部の人が手早く掃除用具入れを縛り上げてさらに向きを変えて扉が壁を向くように置いていたが、無事に発見されるのだろうか？
そして日の出が間近に近づいている。

『みなさん、まもなく戦闘終了となります。終了の合図の笛が鳴ったら指示通り校庭に集合してください。』

「……もうすぐ終わりだな。」

「うん、結構おもしろかったよね？」

「……そうだな、だけどボウガン野郎のせいで素直には頷けないが……」

「あははは、そうだね。」

「……笑うなよ……俺は本当にへこんでんだよ……」

「……………ね、ねえ、代々木くん、これが終わったら……」

「おっ、見ろよ、桜木、日の出だぜ。」

家々にさえぎられて地平線は見えないが、太陽が顔を出し始めていた。朝日に町が染まってゆく光景は、なんとなく心に染み入ってくる。

「……こうやって見るとやっぱり日の出っていいよな。」

「……うん、そうだね。」

「そういえば桜木、今なんか言いかけてなかったか？」

「ううん、なんでもないよ。なんでも……」

そのとき戦闘終了を告げる笛の音が学校に響き渡った。

「……やつと終わったか、こうやって終わってみると長かったような短かったような……」

「それよりも早く校庭に行こうよ。きっとみんな待ってるよ？」

「そうだな、行くか。」

朝日に照らされはじめた校庭に出てくると、裏科学部と秘境部の人と神田は既に集合していた。

「お疲れ様です。」

「やあ、お疲れさま。」

「おうよ、おつかれさん。」

「そういえば小金井さんと籠原先輩はどうしたんですか？」

「小金井達なら今来るぞ。」

「おーい、おつかれさま。」

校舎から出てきた小金井さんがこちらに向かって手を振りながら近づいてくる。その後ろには籠原先輩もいる。

「みんな、おつかれさまでした。」

「おつかれさま。」

「さて、敵は出てきてないね？」

「ああ、誰一人としてな。」

「そういえば用務員さんがまだ出てきてないね。」

「なに、すぐ来るだろう。」

「え？ 用務員のオジサン来るんスか？」

「うん、開始と終了の笛を吹いたのは用務員さんだよ？」

「……そうだったんスか。」

「あ、ほら、出てきたよ。」

用務員さんが眠そうな足取りでこちらにやってくる。

「おはようございます。じゃあ判定をお願いします。」

「うん？ 今年もアニ研の子たちには生き残りがいないのか？」

「ええ、そうですね。」

「そうかい、それじゃあコンピ研の勝ち。おつかれさん。なかなか楽しませてもらったよ。ときに少年、ずいぶんと楽しい体験をしたじゃないか？」

「……あれは不可抗力なんですけど……」

「なーに、人生長くてもあんなことはなかなか体験できないぞ？」

「いや……だからその……」

「がっはっは！ まあ頑張れや！」

そう言っただけの背中をバンバン叩くと用務員さんは校舎へ戻っていた。何を頑張れっただけ……

「さて、では小金井、我々はもう帰るぞ。」

「うん、ごくろうさん、それとサンキューな。」

「なに、こっちも楽しませてもらったからな。礼は要らん。」

「では小金井さん、我々もそろそろお暇させて頂きます。」

「うん、おつかれさま。あ、それと貸した武器は返して、こっちで手入れして保管するから。」

「はっ、かしこまりました。」

「はい、それじゃあまたね。」

「それでは。」

そして裏科学部の人と秘境部の人たちは帰っていった。

「さーて、じゃあ部室に戻って銃の手入れをしようか。」

部室に戻って銃の手入れをする。手入れと言っても汚れを拭き取るぐらいだが、小金井さんは嬉々としてバラバラにしていた。

「あのー、小金井さん、そこまで分解する必要ってあるんすか？」

「ないよ。」

「じゃあなんでそこまで分解するんすか？」

「だって楽しいじゃないか♪」

「……そうっすか……」

「みんな、もっと手を動かして。じゃないと終わるのが遅くなるわ

よ？」

「はいはい、ゴメンナサイ。」

「小金井くん、誠意というものがまったく見えてこないんだけど？」

「少なくとも僕の手は休み無く動いてるよ？」

「必要のない事をしないの！」

「……よし、ここはみんなでもバラバラにしよう！　そうすれば籠原さんも文句が言えないはずだから！」

「申し訳ないんですけど俺はそんな器用じゃないので遠慮させていただきます。」

「オレも同じくっス。」

「わたしも遠慮しておきます。」

「み……みんなひどいなあ……」

「ほら、小金井くんもちゃんと手入れをして！」

「手入れはしてるよ……」

そんなこんなで戦闘終了から二時間後、後片付けが終了した。

「さーて、それじゃ朝ごはんでも食べに行こうか！」

「賛成っス、オレはもう腹が空き過ぎて死にそうっスよ……」

「そうね、小金井くんのおごりで行きましょうか。」

「なっ！　また!？」

「そうしてくれると嬉しいなって思ってみたり？」

「もうその手は止めてくれると嬉しいなって思ってみたり……もうわかったよ!!　奢るよ!!!!」

「みんな聞いたわね？　小金井くんが朝ごはんをおごってくれるって。」

「聞きました。」

「確かに聞いたっス。」

「わたしも~！」

「……ええい！　ここはもう大奮発！　駅前のカフェで朝の一杯としゃれ込もうじゃないか！　好きなものを選んでいいから！」

「うふふ、それじゃあお言葉に甘えて。」

「よし、それじゃあ行くぞー！」

「……みんな少しは遠慮してくれるんだよね？」

「遠慮？ なにそれ？ おいしいの？」

「……ひ、ひどい……ああ……旅の資金が……」

ともあれ夏の「お楽しみ」はこうして終わりを告げた。次なるイベントは八月三日から六日にかけての「お泊り会」だ。

第9話 （お酒は二十歳になってから） （前書き）

一ヶ月ぶりの更新です。

例によってサブタイの中の○の中の言葉に深い意味はありませんが、もちろんお酒は二十歳になるまで飲んじゃだめでっせ（笑）

第9話 （お酒は二十歳になってから）

七月三十一日、今朝きたメール。

『今日は先日話したように隅田川の花火大会に行きます。集合場所は水川駅北口、集合時間は午後四時半です。持ち物は特になし、交通費は部費から出ます。何か予定が入ってしまったって来れないという人は折り返し連絡してください。』

この丁寧な書き方は籠原先輩である。先日の『お楽しみ』の後の朝食時に全員参加で花火大会に行くことが決まった。そういう訳で今現在午後四時、そろそろ家を出なくては。ちなみに俺と神田と桜木はいつもの交差点で待ち合わせをして行く事になっている。

「よし、そろそろいくか。」

家を出てすぐの交差点、そこには既に神田がいた。

「いよーっす、遅いぞ。」

「まだ間に合うだろ？」

「そうだが、オレは待ってたんだ。」

「いつからだよ？」

「二十分前からだ！」

「……それは気が早すぎるってもんだろ……」

「いや、行く前にアイスを食べるためにはむしろ遅いぐらいだ！」

「お前は食えることしか考えてないのかよ!？」

「暑いんだからそれぐらいいいだろ！」

「そういう問題じゃねえ！ しかも「い」が一つ多い！ つーか桜木はまだ来てないみたいだな。」

「ああ、だな。でもそろそろ行かないと間に合わなくなるぞ？」

「何やってんだ？ あいつ。」

「ふっ…… まだまだだな、代々木。女の子はこういうときは準備に時間がかかるものと相場は決まっている！」

「そうかい、でもそろそろ時間的に間に合わなくなるぞ？」

「うむむ、そこはオレも困ってるんだ。」

「んじゃ籠原先輩にメールして『遅くなる』って伝えておけば？」

「そうか、その手があったか！」

早速メールを打つ神田。逆にお前はそういうことを微塵も考えつかなかったのか？

「よし、これで大丈夫。そういえば代々木、お前は服装とかには気を遣わないのか？」

「そういうお前だって何にも考えちゃいないんだろ？」

「いや、オレの場合はどうすれば一番太ってるように見えないか、ということに気を遣いまくっている。」

「……そうかい、でも見るからに暑っ苦しいってわけじゃないんだし、そこまで気を遣わなくてもいいんじゃないのか？」

「さすがはオレの親友、だが気を遣わなくてはいけない事情もあるのだ！」

「どんな事情だよ……」

「それはだな……」

そのとき神田の携帯の着信音が鳴った。

「おっと、ちよっと待っててくれ。……ふむふむ、なるほど。」

「籠原先輩からか？」

「その通り、ちなみに中身は『小金井くんも遅れてるから大丈夫』だそうだ。」

「小金井さんが遅れてるって……確定なのか？」

「さあ？ 確かになんとなく引かかる言い方だが……それと籠原先輩は既に駅の北口にいるそうだ。」

「はええ……」

「オレも驚きだ。さすがは籠原先輩。」

「ついでにもう遅れるってことが確定してる小金井さんも……」

「おっ、あそこを走ってくるのは桜木さんじゃないのか？」

「みんな、おまたせ〜！」

向こうから桜木が走ってきた。……おい、あれは……

「おおっ、桜木さん、浴衣着てきたんだ！」

「ホントに着てきたのか……」

「うん、着付けに時間がかかったって、遅くなっちゃった。」

桜木はそう言いつつその場でくると回る。

「いやいや、オレや代々木みたいに普段通りの格好で来られたら面白くないから、グッジョブだ！」

「……悪かったな、普段通りの格好で。」

「遅くなっちゃったわたしが言うのもなんだけど、みんな、早く行こう？」

「おおっと！ そうだ、既に籠原先輩は駅前にいるんだった！ で
は全力で歩いていこう！」

「走らないんだな。」

「オレに走ることを強要しないでくれ！」

「しねえよ。」

やけに（無駄に）ハイテンションな神田を先頭にして駅への道を歩いてゆく。

「ねえ、代々木くん、浴衣変じゃないよね？」

「あ……ああ、まったく問題ないし、似合ってると思う。」

「よかった、似合ってたかどうかどうしよう、ってずっと思ってたんだよ〜！」

「そうなのか？ 結構似合ってるぞ？ ……なんつーかいつもと違うって結構新鮮だな。」

「えへへ、ありがと。でも秋乃先輩の方がずっと似合ってるんだよ〜。」

「なんでそんなこと知ってたんだ？」

「だって見たことあるもん。」

「……左様ですかい……」

そして予定時刻より十分ほど遅れて駅に着く。

「すいません、遅れました。」

「大丈夫、春香ちゃんが着付けに時間がかかったっていうのは見ればわかるから。」

「うおおおお！ お姉さま！ メツチャ浴衣が似合ってます！」

「……神田君、あなた大丈夫？」

「全然平気っスよ！」

「体じゃなくて頭の方よ。」

「うあっ！ 今日はいつになく冷たいっス！」

「神田、俺も桜木も似たような意見なんだが……」

「……すんません、もうちょつとテンション下げます……」

「そういえば小金井さん、まだ来てないんですか？」

「ええ、寝過ぎしちゃったから遅れるって。」

「寝過ぎした？」

「小金井くん、今日は房総半島を一周してきてるのよ、もちろん列車で。」

「ば……房総半島……」

「あ……ありえねえ……」

「でも三十分前ぐらいで東京にいたはずだからそろそろ着くとは思うんだけど……」

「もう着いてるよ？」

「きゃっ！ ……小金井くん！？ 驚かさないでよ……」

「いやー、あまりにもスキだらけだったからつつい。」

「……何か言う事は？」

「遅れてごめんね、さあ、行こうか！」

小金井さんが全員分の切符を配る。そして改札を通るとホームへ上がる。

「そういえば小金井さん。その服、制服っスよね？」

「うーん、半分正解。ズボンはそうだけどワイシャツは違う。」

「でもなんでこんな時に制服着てるんですか？」

「僕にはそういう服のコーディネートセンスはないから、それだけ。」

「そんなことないっスよ。絶対に代々木よりはましっスよ。」

「うーん、でも僕の場合は持つてる服が似たようなのばかりだから。」

「……それだとコーディネート以前の問題ですよね？」

「そうだねえ……」

「そういえば籠原先輩って普段はどんな服着てるんスカ？」

「え？ 私？」

「籠原さんはねえ、おとなしめ、というか清楚な服を着てることが多いのかな。派手な服を着てるところって見たことないから。」

「へえー、参考になるっス。」

「何の参考だよ……」

「おっ、電車が来たよ。目的地までは二十五分弱で着くから。」

「あの一、どこで降りるんでしたっけ？」

「浅草橋って駅。そこから歩くよ。」

そして電車に揺られること二十五分弱、浅草橋駅に降り立つ。花火大会に来たと思われる人でホームは結構どころではなく混んでいる。「みんな、はぐれないようにね。」

「いや、マジではぐれそうっス……しっかしずいぶん人がいますね。」

「まあお祭りだし。……つとと！ さっそく迷子になるなよ。」

「そんな……こんな人込みじゃ無茶ですよ……」

「じゃあ手でもつないだら？」

「それは名案……ってそんなの無理っス！」

「そしたらロープでもって繋いどく？」

「それはもつと問題な気がするんですけど……」

「まあ万が一にもはぐれちゃったら僕か籠原さんの携帯にでも電話してよ。そしたら可能な限り救済措置をとるから。」

「はあ……まあはぐれないように努力はします……」

「さーて、先輩たちが見物場所を確保してくれているはずだから待たせちゃ悪いし早めに行こう。」

「先輩って誰ですか？」

「あ、そっか。君たちは会ったことがないんだっけ。先代部長とか先々代部長とか、とにかくコンピ研の歴代の先輩たちだよ。だいたいは『お泊り会』のときに顔会わせをするんだけどね。」

「どんな人たちなんですか？」

「優しいし、おもしろい人たちだよ。せっかくだし話してみたら？きつとすぐに仲良くなれるよ。」

「そうですか。」

「ねえ、ところで神田君はどこに行っちゃったのかしら？」

「え？ 代々木の後ろ辺りにいなかったっけ？」

「……いないですね。」

「まさか……さっそく迷子になっちゃったの？」

「……可能性は否定できない……というか確実にそうだろうね……」

「神田ー、どこだい？」

『ここだー！』

だいぶ横の方で神田が必死に人波に流されまいとしてい………あ、流された……

「おっと、神田君を見失わないうちに僕らも早く行こう！」

結局改札口を出たところで神田に合流することができた。

「……人波こええ……マジで迷子になるかと思ったっス……」

「まあ本当に迷子にならなくてよかったじゃん。」

「……何でもいいですけどここにいと邪魔じゃありません？」

「んー、そうだね。それじゃあ行こうか、今度こそはぐれないでね。」

「了解っス。」

そして見物客であふれかえっている道を歩いていく。
しばらく歩いてゆくと、交差点の真ん中でこちらに向かって手を振っている人がいるのが見えてきた。

『おい、小金井〜!』

「あつ、宇都宮さん! お久しぶりです。」

「ういっす、久しぶりだな、小金井。」

「こんにちは、宇都宮先輩。」

「おう、籠原か。そっちは今年の新入生か?」

「ええ、本当はここで自己紹介させたいところなんですけどね。」

「確かに人も多いからとりあえず移動するか。そうだ、小金井、今年は来たメンツが豪華だぞ?」

「そうなんですか?」

「おうよ、黒磯さんと渋谷さんだけじゃなくって勝田さんとかまで来てる。」

「あれま、そりやまたすごい!」

そしてその大先輩らしい人について人込みの中を進んでゆく。

「なあ、神田、それにしても凄い人込みだよな……神田!」

「心配ご無用、ここにいるぞ。」

「なっ!? いつの間に背後に!」

「さっきまた流されそうになったから代々木の後ろに憑くことにしたのだ!」

「俺に憑くな!」

「別にいいじゃないか、憑いたって。」

「怖えよ! なあ、桜木……桜木!」

「もしかして桜木さんはオレの後ろに……いないだ!」

「おい、さくく〜ら〜ぎ〜!」

『ここだよ!』

「……だいぶ流されたな……」

「だな……」

『おい、代々木くんたちどこ行くのさー!!』

「? 何でだ？」

『こっちに着てよ』

「……この流れはまさか……」

「まさかの……」

『早くしないと迷子になっちゃうよー!』

「俺らが迷子!!」

「なんだってー!」

慌てて桜木のいる方へ戻る。

「うわ……あぶねえ……危うく迷子になるところだったぜ……」

「冷や汗が凄いことに……」

「代々木君も神田君も何やってるの? ちゃんとしてきてって言わなかった?」

「申し訳ないんすけど今までの文章を読み返した限りそんなことは言ってなかったっす、お姉さま。」

「神田君、隅田川に沈めるわよ?」

「ああ……今日のお姉さまはまた一段と過激で……」

「カ・ン・ダ・ク・ン?」

「ゴメンナサイ、生まれてきてゴメンナサイ、生きててゴメンナサイ。」

「神田、そこまで卑屈になる必要は無いと思うよ? ねえ、籠原さん?」

「……小金井くんに免じて許してあげるわ、神田君。」

「ああっ、お姉さまっ! お慈悲をっ!」

「神田、お前は命が惜しくないのかよ……」

「……神田、次は僕でも籠原さんをセーブできないと思うから、適宜がんばってね?」

「……あ……秋乃先輩から黒いオーラが出てる……」

「おいおい、いきなりブラック籠原炸裂は止めてくれよ、頼むから。」

「……別に私は怒ってませんから大丈夫です。宇都宮先輩。」

「……いや、だから既に凄まじく怖いんだよ……小金井、何とかしろ。」

「無理です、唯一止められる方法は僕の命が危なくなるのでやりたくありません。」

「……まあいい、そろそろ着くぞ。」

案内された場所は、河川敷の土手の上だった。既に敷かれていたブルーシートの上で何人かの人が酒盛りを始めているようだ……

「おいっす、いらっしやい！」

「久しぶりだな、小金井と籠原！」

「後輩諸君もいらっしやい！」

「まあ、とりあえず上がろう、みんな、靴脱いで。」

「小金井さん、靴だけでいいんスか？」

「神田、何もかも脱ぎ捨てるのは止めときな。」

「……最低ね。」

「ぐはあっ！」

「秋乃先輩の会心の一撃！ 神田君はたおれた！」

「……桜木、悪ノリはやめろ……」

「まあまあ、さて、それじゃあ新入部員の自己紹介から始めますか？」

「だな、ほい、新入り諸君、自己紹介を始めてくれい。」

「代々木実です。」

「神田武彦です。」

「桜木春香です。」

「おーし、三人とも『です』の位置がきれいに揃ったな！ それじゃあこっちも自己紹介だ。俺は先々代部長の黒磯だ、ヨロシク。」

「ほいじゃあお次だ、先代部長の宇都宮だ、よろしく。」

「俺は宇都宮と同期の渋川だ。よろしく。」

「オレは三代前の部長だった勝田だ、ヨロシク。」

「黒磯の同期の湯河原です。宜しく。」

「同じく黒磯の同期の衣笠だ、よろしく。」

「俺は勝田の同期の友部だ、ヨロシク。」

「今日来たのはこれで全員ですか？」

「そうだ、まあこのメンツがそのまま夏季合宿の手伝い要員だがな。」

「そうですか、そしたら何人かの先輩たちが酒に飲まれる前に合宿の菓を配っちゃおうと思います。」

「おう、今年も大宮先輩のとの別荘借りてやるんだろ？」

「はい、もう大宮さんに確認済みです。」

「さすがに仕事が速いな……っていうかそれやったのは籠原か？」

「さすが黒磯さん！ 正解です！」

「籠原、小金井の奇行は相変わらずか？」

「ええ……もちろん……」

「まあ小金井だしな、そんなぐらい許されてもいいんじゃないか？」

「えー、で、説明をしようと思います。と思ったんですけどめんどくさいので各自で読んでみてください。」

「さすが小金井、地味に手を抜くな。」

「菓の方は気合を入れて作りましたから。」

「たった一時間で？」

「草稿に三十分かけてるよ？」

「……それは草稿はさらに手抜きだったってこと？」

「さあね☆」

「おいおい、ここでコンピ研名物の掛け合いを始めなくてもいいだろう……」

「……えーっと、宇都宮先輩？ 名物だったんですか？」

「ああ、確かお前さんは……代々木だったっけ？ そうなんだよ、名物だったんだ。なんせ常日頃からあいつらはあの調子だしな。」

「おい、小金井。協賛に『オカルト研究会』が入ってるが、マジか？」

「マジですよ。肝試し要員に手配しました。なんでもたまたま近

くで彼らも合宿やってるらしいので。」

「……今年の肝試しは修羅場になりそうだな……」

「もちろん先輩方にも参加してもらいますから。」

「……マジかよ……」

「まあ去年は面白い物が見れたし、たまにはいいんじゃないか？
俺らも行っても。」

「ああ、去年のアレね。」

「去年のアレってなんスか？」

「ああ、去年も肝試しをやったんだが、小金井と籠原のペアだったんだな。そしたらこいつら二人してダッシュで帰ってきやがってよ、いまだに笑い種だぜ。どっちもオバケ系がダメだったんだとさ。」

「……小金井さん、そのテのやつダメなんですか？」

「そうだよ。ダメなんだよね。なんか本能的に受け付けない。」

「他にも色々弱点はあるけどね……」

「それは言わない約束だよ、籠原さん。」

「まあとりあえず飲めや！ 二十になってないヤツは鮭は飲むなよ。」

「友部、お前だいぶ酒が回ってるぞ？」

「いんや、まだ大丈夫だっちゅーの。」

「微妙に古いぞ」

「気にしたら負けだ！ 飲めや歌えやあらほらさっさ」

「……勝田さん、いざという時は友部さんを頼みます。」

「分かってる、だがもしかしたらなんてことがあるかも試練から、
宇都宮、頼むぞ。」

「既に危ない兆しが見えている気がするんですよ、変換ミスを全く気にしないとかフォローしようとしてもしないとか……」

「まあ気にすんな。ほれ、新入りたちもそのジュース飲んでもいいんだぞ？ おつまみも食うか？」

「それでは……」

「ありがたく……」

「いただきま〜す！」

そして花火を見つつ先輩たちとしゃべりながら飲み食いしている間に第二会場の花火も終わってしまった。

「ふー、食った食った！　そして飲んだ！」

「いんにゃ〜。まだふあなびはちゅづくぞ〜、」

「わハはハは！　それ見ろ友部〜、酔ってんじゃねーか。アヒヤヒヤヒヤヒヤ！」

「……黒磯先輩、この人たち頼みますよ？」

「ああ、そのために車を用意しておいたんだからな……」

「いいか、一年生たち、大きくなってもああなっちゃ駄目だからな？」

「はあ……そうっスね……」

「さーて、撤収だ！　黒磯さん、酔っ払いたちは頼みます！」

「はいはい、了解した。」

そして酔っ払った先輩たちは黒磯先輩の車に押し込められて自宅へ強制送還されていった。

「よし、じゃあお疲れ。気をつけて帰れよ。」

「はい、それでは合宿のときにまた。」

「おうよ、んじゃな。」

そして先輩たちは帰っていった。

「さーて、それじゃあ僕らも帰ろう。」

そしてやはり満員の列車に揺られて帰途についた。

揺られること三十分弱、やっと水川駅に到着する。

「お疲れ様、全員ちゃんというね？」

「すいません！　桜木が寝そうです！」

「ん？　どれどれ……あっちゃ〜、ホントだ。じゃあ代々木、その

まま連れてってあげなよ？」

「力が入らない人を運ぶって地味にキツイんですけど!？」

「キアイだゝ、がんばれゝ。」

「『気合』がカタカナだとなんか気が抜けるんですが!？」

「すまん、代々木、オレとお前では背の高さがだいぶ違うから力にはなれないんだな。」

「神田! 手を貸せ!」

「オレの両手はもうすぐ夜食で埋まるから無理だ!」

「さらにこのあと食うのかよ!？」

「もちろんだ!」

「まあおつかれさま、それじゃあねゝ」

「待ちなさい!」

「逃げるゝ! ……ぐえっ!」

「逃がさないわよ。」

「分かったから、逃げないからワイシャツの襟を後ろから引っ張るのはやめて!」

「代々木君、神田君、帰りましょ。」

「へゝい。」

「神田……結局手伝ってくれないのかよ……」

こうして花火大会は終わった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3067p/>

こんぴけん

2011年11月14日03時29分発行